

第15号

特集「JIBSN対馬セミナー2017：変貌するボーダー」



JIBSNレポート第15号の発刊によせて

境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) が設立されてから6回目のセミナーである対馬セミナーを今回は取り上げます。本セミナーは2017年度のJIBSN主催のセミナー並びに2017年11月10日から14日まで催行された『ボーダーツーリズム対馬・釜山』のイベントとして2017年11月11日に長崎県対馬市にて実施されたものです。

本セミナーでは、JIBSN代表幹事である野口市太郎・五島市長、比田勝尚喜・対馬市長、小野徹・礼文町長、水野正幸・JR九州高速船(株)代表取締役社長、伊豆芳人・ボーダーツーリズム推進協議会会長によるご挨拶の後、日本の境界地域におけるボーダーツーリズムと人口問題の現状及び今後の課題に関する共通理解を深めることができました。

セミナーの会場手配をはじめさまざまなご協力をいただいた対馬市の皆様にはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。また、今回のセミナー開催に際し、前回に引き続きお祝いの言葉を頂戴した鈴木貴子衆議院議員にもここに改めて感謝申し上げます。

(副代表幹事代行 古川浩司)



JIBSN 設立 5 周年記念シンポジウム・プログラム

JIBSN境界地域研究ネットワークJAPAN対馬セミナー



変貌するボーダー

／境界地域：観光と人口問題を考える

開会 13:30
 開会の辞 司会：古川 浩司（JIBSN 副代表代行／中京大学）
 ご挨拶 野口 市太郎（JIBSN 代表／五島市長）
 比田勝 尚喜（対馬市長）
 小野 徹（礼文町長）
 水野 正幸（JR九州高速船株式会社代表取締役社長）ほか

SESSION 1 14:00-15:45 「進化するボーダーツーリズム」
 司会&コメント 田中 輝美（ローカルジャーナリスト）
 報告者 今野 直樹（礼文町産業課）
 渡辺 公仁人（稚内市建設産業部サハリン対策監）
 樋口 貴彦（五島市総務企画部政策企画課）
 大浜 知司（竹富町政策調整監）
 内山 歩（対馬市しまづくり推進部 政策推進課）
 伊豆 芳人（ボーダーツーリズム推進協議会 会長）

SESSION 2 16:00-17:30 「境界地域の人口問題を考える」
 司会&コメント 花松 泰倫（九州大学）
 報告者 織田 敏史（根室市北方領土対策参事）
 山口 将悟（標津町副町長）
 小嶺 長典（与那国町長寿福祉課）
 古川 浩司
 川口 幹子（一般社団法人 MIT・対馬）

総合討論 17:40-18:30
 司会&コメント 岩下 明裕（北海道大学／九州大学）

※登壇者は予定で変更の可能性があります

日時 2017年11月11日(土) 受付13:00～
会場 対馬市交流センター (〒817-0021 対馬市厳原町今屋敷661番地)
共催 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(境界研究ユニットUBRJ)
 九州大学アジア太平洋未来研究センター(CAFS)
 NPO法人国境地域研究センター(JCBS)
 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」
 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点
 対馬市
協力 ボーダーツーリズム推進協議会 (JBTA)
お問合せ 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター内
 境界地域研究ネットワークJAPAN事務局 (JIBSN)
 E-MAIL: jibsn@slav.hokudai.ac.jp





境界地域研究ネットワーク JAPAN 対馬セミナー
変貌するボーダー 境界地域：観光と人口問題を考える
日時：2017年11月11日 場所：対馬市交流センター

開式の挨拶

(古川浩司) ただ今から境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 対馬セミナー「変貌するボーダー／境界地域：観光と人口問題を考える」を開始いたします。本日司会を務めます JIBSN の副代表代行の古川と申します。代行となっておりますのは、実は私自身が所属する NPO 法人国境地域研究センターは JIBSN 副代表幹事で、理事長が九州大学名誉教授の藪野裕三さんですけれども、理事長の代わりに私が JIBSN 担当ということでいろいろと調整等をするということで副代表代行となっております。

本日は皆さま、お忙しい中、本セミナーにお越しいただきましてありがとうございます。JIBSN の説明を少しさせていただきますと、元々は与那国町で日本島嶼学会が国境サミットを開催して根室や対馬の市長を招請したことがきっかけで、それをさらに発展させていこうということで2011年11月に発足いたしました。2011年11月に札幌で設立を宣言した後、稚内市、五島市、竹富町、根室市、そして昨年(2016年)は小笠原村の東京連絡事務所があります竹芝で5周年セミナーを行いまして、今回が6回目のセミナーとなります。まずは、あとでご挨拶を頂きますけれども、改めて今回ホストをしていただいております対馬市役所の皆様には感謝の意を表したいと思います。

では、早速ですけれども、まずは JIBSN の代表幹事であります五島市長の野口市太郎様よりご挨拶を頂きます。それではよろしく願いいたします。皆さん、拍手でお迎えください。

(野口市太郎) 皆さん、こんにちは。ご紹介を賜りました長崎県五島市長の野口市太郎でございます。今年の4月から境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) の4代目の代表幹事を仰せつかっております。今回の対馬セミナーの開会にあたりまして、ひと言ご挨拶を申し上げたいと思います。本日は礼文町の小野町長をはじめ、北海道から沖縄まで全国各地からご参加を頂きまして、誠にありがとうございます。ご案内の通り JIBSN は国内外の境界地域に関する調査研究を行い、境界地域の抱える様々な課題に適切に対処し、その発展に寄与することにより学際的な領域にまたがる境界研究と、地域に根付く実務を連携するという新たな社会的貢献を図るということを目的に設立をされておりました、これまで様々な活動が行われて参りました。JIBSN も6年目に入り、島嶼の境界地域の現状把握や課題抽出といったところから、境界地域を活性化するアイデアやプランの実施に移ってきていると思っております。今後境界地域をどのように発展させていったら良いのか、どのような活動を展開していったら良いのかを全国の仲間の皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

ここで、五島市について少しご紹介をさせていただきます。五島列島は我が国の西の玄関



口であります長崎からさらに西へ 100 kmほどの所にございます。五島市はその南部を占めておりまして、11 の有人島と 52 の無人島で構成されています。古代には「古事記」あるいは「肥前風土記」にも登場し、奈良および平安時代には遣唐使船の日本最後の風待ちの港として大変重要な島でありました。

現代の五島市においては、昭和 30 (1955) 年が人口のピークですが 9 万 2000 人おりました。これが前回 (平成 27 (2015) 年) の国勢調査では 3 万 7000 人ということで、実にこの 60 年間で 6 割の人口が減ったという状況になっております。こうした中、「人口減少に挑む」という市政運営のスローガンを掲げまして「再生可能のエネルギーの島づくり」そして、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産の世界遺産登録」「クロマグロの養殖基地化」あるいは「日本一の椿の島づくり」、この四大プロジェクトを中心にした地域活性化に取り組んでいるところであります。

こういう状況の中、この (2017 年) 4 月から国境離島新法が施行されました。この法律では、「有人国境離島地域の保全および特定有人国境離島地域にかかる地域社会の維持に関する特別の措置を講じること」としており、国境離島にとりましては非常に画期的な法律となっております。このような制度をしっかりと活用することで、雇用の創出や交流人口の拡大につなげ、総力を挙げて最重要課題である人口減少に挑み、五島の活性化を目指していきたいと考えております。五島市におきましては、境界地域は最終地ではなくゲートウェイであるという考えから、五島市に一番近い外国であります済州島との交流ができないかを研究しているところをございまして、JIBSN においても是非後押しをお願いしたいと思っております。

さて、本日は「変貌するボーダー」と題しまして、境界地域の観光と人口問題について各地からご報告を頂き議論することになっております。私どもも各地の取り組みを是非参考にして参りたいと思っております。各地域の状況や実施頂いている対策等をご報告していただく皆様方、そしてコメントを頂く研究者の方々、本セミナーに多大なるご協力を頂きまして誠にありがとうございました。本日は長時間のセミナーになりますが、どうぞよろしく願いいたします。最後に、対馬セミナーの開催にご尽力いただきました開催地の比田勝対馬市長、北海道大学の岩下先生をはじめ、事務局の皆様へ深く感謝を申し上げますと共に、本日お集まりいただきました皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしましてご挨拶いたします。今日はどうぞよろしく願いいたします。

(古川) ありがとうございます。引き続きまして、今回のセミナー会場のご提供をはじめ NPO 法人国境地域研究センターにも様々な形でご協力を頂いております対馬市長の比田勝尚喜様よりご挨拶を頂きます。よろしく願いいたします。皆さん、拍手をお願いいたします。



(比田勝尚喜) どうも皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました対馬市長の比田勝尚喜でございます。まずは皆さん、国境の島・対馬へようこそおいでいただきました。ありがとうございます。また、対馬市開催にあたりましてご尽力いただきました JIBSN 事務局の皆様、誠にありがとうございました。この度は JIBSN セミナーが対馬市開催ということで、全国の境界地域の皆様、関係機関、研究者等、多くの方々がお越しいただくことを心よりお待ちしております。

さて、本年は国境離島地域における大きな進展といたしまして、平成 29 (2017) 年 4 月 1 日から「有人国境離島法」が施行されております。法の中では航路・航空路の運賃低廉化や輸送コスト支援、そして雇用機会の拡充等が明記されているところでありまして、国境離島地域の維持、振興の大きな一歩になるものと捉えております。

また、観光の面におきましても、滞在型観光の促進に対する支援も実施されており、現在対馬市でも着地型観光のメニュー作りとして ANA 総合研究所との連携によりまして「国境の島・対馬 日本遺産を歩く 城山トレッキングコース」や「砲台トレッキング」など多数の商品開発に取り組んでおりまして、長崎県内での連携の取り組みとして「魏志倭人伝が息づく島・壱岐と防人の島・対馬」など数種類のツアー商品により取り組んでいるところでございます。この新法の施行は、国境離島地域にとりましてまさに追い風になるものと大いに期待しているところでございます。

さらに、対馬市の最近の嬉しいニュースとして、10 月末に朝鮮通信使に関する記録がユネスコの世界記憶遺産に登録されました。これは江戸時代の外交の記録で、対馬の交易の歴史や国境地帯としての役割を考えていく上で欠かせないものでありまして、登録に向けては対馬市内に事務局を置きます NPO 法人「朝鮮通信使縁地連絡協議会」を中心組織として、各自治体や民間団体、学識経験者の先生方と連携し、幾年にわたる協議・検討を重ねてきたことが報われた形となり、とても嬉しく思っているところです。

さて、このセミナーのテーマといたしまして、国境観光についてですけれども、対馬市は韓国までわずか 49.5 km の距離に位置する国境の島であることから、積極的に取り組んでいかなければならないと考えていまして、平成 26 (2014) 年度に「日本初の国境観光を創る—対馬の挑戦—」と題し、当協議会協力のもと福岡市でシンポジウムを開催し、ボーダーツーリズムの認知度向上を図っていくことの重要性を再認識したところでございます。また、今年度設立されました「ボーダーツーリズム推進協議会」にも会員として参加させていただいているところであり、今後は皆様方とも連携を密にし、国境観光をさらに進化させていきたいと考えております。

本日ここにお集まりの皆様は、島は違えども同じ国境地帯として、国境地帯だからこそその魅力、またその反対に、国境地帯だからこそその諸課題を抱えていることと思います。皆様が生かしの知恵を出し合い、共に行動し、境界地域の抱える様々な課題に適切に対処し、その発展に寄与していけるよう、良い議論が展開されることを期待いたしますとともに、国境地帯がお互



い助け合いながら活性化に邁進されることを祈念し、対馬市への歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は遠いところ、この国境の島・対馬へようこそお越し頂きまして誠にありがとうございました。

(古川) ありがとうございました。次にご挨拶を頂きますのは、本年新しく JIBSN のメンバーになりました礼文町長の小野徹様からなのですけれども、礼文町からこちらまで非常に長い旅だったと伺っております。わざわざお忙しい中こちらまで起こし頂まして、感謝を申し上げますとともに、ご挨拶をよろしくお願いたします。

(小野徹) 皆さん、こんにちは。ただ今紹介を頂きました、北海道礼文島町長の小野徹でございます。本日は境界地域研究ネットワーク対馬セミナーにお招きいただきまして、誠にありがとうございます。先ほど司会の方からお話がありました通り、今回初めて参加させていただくことになったわけです。境界地域研究ネットワークに関係する皆様方に心から敬意と感謝を申しあげたいと存じます。

礼文島ですけれども、北海道の最北端の町・稚内市の西方約 60 km の日本海上に浮かぶ島でございます。対馬暖流が北流いたしますが、その先端に私たちの礼文島があるわけでございます。今日は親元に帰ってきたような、そんな気持ちがございます。礼文島は先ほど最北端の島という話をさせていただきました。北方領土の択捉島の最北端のカムワッカ岬という所が日本の最北端の地と呼ばれる所ありますが、自由に行き来できる地とすれば我が礼文島が日本最北端の島であると言えると考えています。宗谷海峡を挟んでロシアのサハリン州と隣り合う国境の島でありまして、礼文島の東側 20 km にはあの有名な利尻島があるわけでありまして。今はちょうど雪を被って綺麗な姿を現しております。礼文島は 5 月から 9 月までレブンアツモリソウやレブンウスユキソウといった礼文島でなければ見ることのできない高山植物がたくさん見られる場所でありまして、色とりどりの高山植物が咲き乱れる、まさしく花の島・礼文島と言われる所以であります。

北海道は来年、北海道と命名されてから 150 年を迎えるわけであります。先ほど来、有人国境離島の話がされております。礼文島もこの法律の恩恵を本当に大きく受けているわけですが、1 つは、私どもも国境の島という中で、国が勧める「離島のシンボルプロジェクト・日本の国境へ行こう」といったプロジェクトがありますので、その中で一生懸命頑張っていきたいと考えておりますし、今回のプロジェクトに皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。国境に位置するがゆえに大きな課題も山積しているわけでありまして。しかしながら、この課題がなかなか解決できない、そういった思いもあるわけでありまして。今日は皆さん方と共にこの境界地域の観光と人口問題、このことを一緒に考えながら、国境地域が元気になるための方策を皆さんと一緒に極めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。本日は誠にありがとうございます。



(古川) ありがとうございます。先ほど来、ボーダーツーリズムという言葉がご挨拶の中に出てきておりますけれども、実は今回も対馬・釜山国境観光ツアーの一部として JIBSN の対馬セミナーを組み入れております。この後、ツアーに参加している方々は比田勝港から釜山港、あるいは釜山港から博多港に戻る際に JR 九州高速船を利用させていただくわけですが、本日は JR 九州高速船代表取締役社長の水野正幸様にもご参加いただきましたので、ご挨拶を頂きます。よろしくお願いいたします。

(水野正幸) ただ今ご紹介にあずかりました、JR 九州高速船の水野でございます。本日は JIBSN 対馬セミナー開催、本当におめでとうでございます。また、お呼びいただきまして、誠にありがとうございます。もう 1 つ大事なことは「ビートル」という船を運航しておりますが、ご利用いただくということで、感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

ビートルという船自体はジェットフォイルということで、船体を 2m ほど波から浮かべて、水中翼が海に浸かりながら振動、波を吸収しながら高速で飛んでいく、約 80 km 以上のスピードを出せる船でございますが、これを 26 年くらいやっておりまして、福岡と釜山を 3 時間程度で結んでいます。これを 1 日 2 往復くらい走らせておりまして、年間 20 万人くらいのお客様に利用していただいております。対馬にも釜山から、対馬の比田勝の方に 1 日 2 往復走らせていただきまして、年間 14 万人ほどご利用いただいておりますが、お客様の伸び率は対馬航路の方が増えておりまして、福岡航路を超える勢いのお客様が増えていらっしゃいます。以前から対馬と釜山の間には船が走ってございましたけれども、私どものビートルが就航しましてからさらなる呼び水となりまして、より韓国のお客様が増えて参りまして、今では年間 58 万人くらい (2016 年度: JR 九州、大亜海運、未来高速の 3 社合計) 利用しますので、日本一の港になってきたのではないかと考えております。

このビートルを運航して思っておりますのは、私どもは先ほど申しましたように日本と韓国それぞれからお客様をお送りしているわけですが、逆に日本から送るというよりも韓国から日本に来られるお客様……ある意味では韓国人のお客様の方が両航路を通じますと多くなっていて、約 7 割くらいでありまして、そうしますと日本から見た国境の町と言うよりも韓国から見た日本の玄関口が特に対馬ではないかと考えています。先ほど野口五島市長が仰いましたように、国境の果てというよりも本当に玄関口だと強く思っております、言わば文化の交流地域ではないかと考えています。

私どもの方では観光主体で運航しておりますが、それはやはり文化、歴史あるいはショッピング (買い物) の目的でご利用される方が多いわけです。文化はよく高い所から低い所へ流れていくと言われますが、日本と韓国はそれぞれに良いところがあって、そのお互いの良さを求めて流れていく、ご利用していただくと思っております。その最前線がまさしく対馬ではないかと考えています。異国情緒、文化なり歴史が交流する地域として、ここは最前線



でもあり、言わば営業的に言いますとマーケティング・スタディの場でもあると思っております。その意味で私どもとしましては対馬を非常に重要視しておりまして、対馬の発展が私どもの発展につながっていくのではないかと考えておりまして、今日のセミナーには喜んで参加させていただいております。ビートルも後ほどご利用いただくわけですが、対馬における文化と歴史、あるいはこれを踏まえた将来展望、これを是非皆様にも考えて頂き、またご提言頂き、より良いセミナーとなられますことを祈念申し上げまして私の挨拶に代えさせていただきます。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

(古川) ありがとうございます。それでは、今回、本セミナーにも協力団体としていろいろご協力いただいておりますし、今回のツアーでも非常にご協力いただいておりますし、後ほどご報告もいただくボーダーツーリズム推進協議会会長の伊豆芳人様からもご挨拶をよろしく願いいたします。

(伊豆芳人) 今、ご紹介いただきましたボーダーツーリズム推進協議会の伊豆と申します。本当にJIBSNのセミナーに参加させていただいて嬉しく思っております。細かいことは後ほどのセミナーで申し上げますけれども、「進化するボーダーツーリズム」というのは、私の考えでは、今まで研究者の皆様がモニターとかでやっていらっしゃったボーダーツーリズムの商品を如何にしてマーケットに出していくか、要はビジネスにするかということで、今年(2017年)の7月10日にボーダーツーリズム推進協議会を設立して、先生方のご支援を頂きながら、基本は民間でボーダーツーリズムの推進協議会を作り、自治体の皆様にもご協力いただきながらやっとな活動を始めたとごさいます。

私は長くツーリズムをやっています、特に地域観光のテーマは「素通りからストーリーへ」と言って、ちょっとダジャレっぽいのですが、素通りされないようにストーリーを作るということで、今はゲートウェイというストーリーをこれから皆さんとどうやって作って旅行商品としてマーケットに出していけるかということが、我々のこれからのテーマということで考えています。今日は皆さんの話を伺いながら勉強させていただきたいと思しますので、今後ともボーダーツーリズム推進協議会をどうぞよろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございます。

(古川) ありがとうございます。実は今回地元の行事と重なってご参加がかなわなかったのですが、衆議院議員の鈴木貴子様から祝電を頂いております。それでは、開会セレモニーを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



セッション1「進化するボーダーツーリズム」

(田中輝美) では、セッション1を始めます。皆さん、改めましてこんにちは。今日は足を運んでくださってありがとうございます。司会を務めます田中輝美と申します。お手元の資料にローカルジャーナリストと書いてあると思うのですが、島根県で生まれ育って、今も島根県を拠点に、地方に暮らしながら地域の事を広く発信するという、フリーランスのジャーナリストをしまして、このセミナーにも毎年参加させてもらっているご縁もありまして、今日は司会というお役目を頂きました。今回のセッションのテーマが「進化するボーダーツーリズム」ということで、先ほどの開会セレモニーでも話がありまして、関心の高い方も多いと思います。ボーダーツーリズムは日本の国境や境界地域を魅力的な観光資源として捉えて、それを生かした旅を作っていこうというものです。そのため、海外でもあるのですが、日本では2013年度からモニターツアーを、今日のセミナーの主催もしています境界地域研究ネットワーク JAPAN の協力を得ながら少しずつ行ってきたところです。これまで対馬・韓国釜山、稚内・サハリン、沖縄の八重山・台湾とモニターツアーを行ってきました。

その積み重ねもあり、これからのセッションは、今日も来て先ほどもご挨拶いただきましたボーダーツーリズム推進協議会のリーダーをはじめ、ボーダーツーリズムを既に実施した自治体の方、これから国境を生かしたい、国境地域の観光ということに関心があるという自治体の方に来ていただいて、それぞれが今感じておられるボーダーツーリズムも含めた観光政策や課題についてご報告を頂くというセッションになっています。順番に従ってまず報告をしていただきます。では最初は、一番遠くから来ていただきました礼文町の今野直樹様、よろしくお願いします。

(今野直樹) 皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました北海道礼文町産業課の今野でございます。それでは、礼文島の観光資源とボーダーツーリズムということで、私の方からご報告させていただきます。先ほど、町長もこのようにご挨拶させていただきました通り、私ども礼文町は本年度から JIBSN に加盟させていただきました。このセミナーも初めてでございますので、本日は私ども礼文島の概要についてご紹介させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは座って説明させていただきます。

まず、礼文島の位置ですが、先ほどの町長からのご紹介があった通り、「日本のてっぺん」と言われております稚内市の西方 59 km の日本海上に位置しております。現在、北方領土を除きますと日本最北の離島であります。その南東側には標高 1721 m の秀峰利尻山がそびえる利尻島があり、この 2 つの島はよく夫婦島と言われております。礼文島までのアクセスについては、稚内からフェリーで 1 時間 55 分、利尻島までは 45 分の距離にあります。運航するフェリーは約 3600 トン、乗客定員は約 500 名で、夏の観光シーズンには 1 日 4 往復、冬の期間には 1 日 2 往復運航しております。また礼文島には空港もありますが、以前は稚内と礼文間

を19人乗りの小型機が就航しておりましたけれども、平成15年3月末をもって定期航空路線が運航休止となりまして、それ以後礼文空港は現在まで休止中となっております。島の大きさは、南北29km、東西8km、面積が81.33km²で周囲が72kmの、やや細長い形をした島でございます。最も高い地点が礼文岳と言いまして、標高490mで、周りにはなだらかな丘陵地が続いております。この礼文島の名前ですが、アイヌ語で「レブンシリ」、意味は「沖の島」という意味でございます。

■ 礼文島について



人口は、平成27(2015)年の国勢調査では2775人、世帯数が1338世帯です。過去の人口統計の推移で見ますと、昭和30年頃には約1万人近い人口がありましたけれども、今年(2017年)4月1日現在では、人口が2604人、世帯数1305世帯です。高齢化率が34.9%と高く、少子高齢化の人口構成となっております。産業構造で見ますと、漁業従事者が651人と就業人口の36.2%と最も高く、島内に漁業協同組合が2つあって、その組合員の数が約350名、その組合員の平均年齢は61.0歳となっております。多くはウニ、昆布といった磯根漁業が生産額の約4割を超えておりました、漁船漁業ではホッケ、タラ、タコ、ナマコなどの水揚げがあります。また、漁業と並ぶ主要産業となります観光業には約1割の方が宿泊業あるいは飲食サービス業に従事しておりました、現在島内には収容人数が200名を超える規模のホテルが3軒、その他旅館、民宿といった宿泊施設が21軒となっております。

最北の離島であります礼文島の気象は、皆さんは厳しいものとお想像されていると思いますが、この真ん中の地図にあります通り、日本海側を赤い矢印の対馬暖流が礼文島まで北上してきますので、夏は冷涼、冬は比較的温暖な気候となっております。温暖と言いましても当然最低気温はマイナスになりますけれども、旭川などの内陸部に比べましても、内陸の旭川などはマイナス20℃くらいまで下がるのですが、礼文島はせいぜいマイナス10℃前後で、ここ10年くらいの最低気温、一番冷えた時で、2010年(平成22年)2月にマイナス15.5℃を記録しているという状況です。夏の最高気温は、だいたい8月は22、23℃ですが、26℃前後に

なることもあります。春には花が咲いて、夏はさわやかな日が続き、秋には山々が色づいて、そして冬は雪に覆われるといった四季のはっきりとした北海道らしい気候であります。

◆人口

2,775人 1,338世帯
(平成27年国勢調査)

●平成29年4月1日現在

- ・人口 2,604人
男:1,299人 女:1,305人
- ・世帯数 1,305世帯
- ・高齢化率 34.98%
(65歳以上の高齢者人口の割合)

◆産業別就業人口

- 総数 1,798人
- ・漁業 651人(36.2%)
2漁協:組合員数 約350名
平均年齢:61.0歳
- ・宿泊業、飲食サービス業 189人(10.5%)
宿泊施設:ホテル 3軒
旅館・民宿 21軒

調査年	人口	世帯数
大正9年	8,479	1,630
大正14年	7,728	1,476
昭和5年	7,916	1,436
昭和10年	8,190	1,398
昭和15年	7,767	1,297
昭和20年	7,662	1,261
昭和22年	8,677	1,436
昭和25年	9,545	1,493
昭和30年	9,874	1,579
昭和35年	8,795	1,596
昭和40年	8,374	1,620
昭和45年	7,535	1,655
昭和50年	6,525	1,619
昭和55年	5,990	1,804
昭和60年	5,724	1,732
平成2年	5,121	1,669
平成7年	4,375	1,707
平成12年	3,856	1,615
平成17年	3,410	1,481
平成22年	3,078	1,445

◆気象

対馬暖流の影響により比較的温暖。オホーツク海からの流氷の影響もほとんどなく、夏期は冷涼で冬期は温暖。



春(3月～5月)

4月・5月は曇天日数や降水量が少なく、秋と並んで晴天の日が多く日照率が高い



夏(6月～8月)

6月はオホーツク海高気圧の影響で曇りや降雨が多く、濃霧が発生
夏期間には太平洋高気圧の影響で晴天が続き気温上昇

秋(9月～11月)

9月は比較的気候が安定10月以降は大陸の高気圧に支配され気温が低く、11月初旬には初霜が降る



区分	気温	年・月
最高気温	28.4℃	2013年8月
最低気温	-15.5℃	2010年2月

冬(12月～2月)

12月には雪の日が多くなり、年内には積雪になる
1月・2月は北西の季節風が強く、内陸ほど気温は下降しなため、強風により体感温度は低い



では、礼文島の観光資源についてご紹介させていただきます。水産業と並ぶ基幹産業である礼文島の観光は、最北の厳しい自然条件が作り上げた優れた景観、貴重な高山植物、そして豊かな北の海の幸といったものを主な観光資源として発展してきました。昭和49年(1974年)には全国で27番目の国立公園「利尻礼文サロベツ国立公園」に指定されてからは、たくさんの観光の方が全国から訪れるようになりまして、「花の浮島」として全国に知られております。海の綺麗なのが特徴的な澄海岬、礼文島最北の岬でありますスコトン岬、このスコトン岬からは晴れた日にはサハリンのモネロン島を望むことができます。また、本州方面では

2000mを超える山でしか見ることができない高山植物が礼文島では海拔0mから咲くという、特異な植生分布となっておりまして、その種類は300種類を超えと言われております。その花と景色を眺めながらのフラワートレッキングというのが人気でございまして、シニア層を中心にたくさんのトレッカーが夏には賑わいを見せております。特に礼文島の固有種でありますレブンアツモリソウが咲く5月下旬から6月中旬にかけては、全国からたくさんの観光客の方が鑑賞に訪れております。



また、礼文島で獲れるウニには鮮やかなオレンジ色をしたエゾバフンウニ、やや黄色っぽいキタムラサキウニの2種類がありますが、どちらも天然利尻昆布をエサにしているということで、その濃厚な旨味は日本一と言われております。最近ではウニ丼1杯が5000円するのですけれども、これを楽しみに全国から訪れる観光客の方もたくさんいらっしゃいます。また、ホッケをご存知の方はだいたい開きになった干物をイメージすると思うのですが、礼文島独特の食べ方に「ちゃんちゃん焼き」というのがあります。これは礼文島で獲れた脂ののった生のホッケを開いて炭火の上に置いて、焼きながら味噌とネギを混ぜながら少しずつ食べるという、是非礼文島に来たら味わっていただきたい一品でございまして。

そのほか、平成21(2009)年にオープンしました源泉かけ流しの礼文島温泉「うすゆきの湯」は、観光客の旅の疲れをいやしてくれる憩いの場となっておりますし、「北のカナリアパーク」……これは2012年(平成24年)に公開されました、吉永小百合さん主演映画「北のカナリアたち」のロケで使われました分校の校舎のセットをそのまま残してございまして、映画撮影の資料展示を一般開放しております。この場所は利尻富士が非常にきれいに見える、島の中でも眺望が最も良い場所と言われてございまして、この絶景は訪れた観光の皆さんに大きな感動を与えております。

先ほど紹介したトレッキングは全部で島に7つのコースがございまして、西海岸の方は車

道がなくて歩いてしか縦断できないのですけれども、そこを8時間かけて歩く「8時間コース」、3つの岬を巡る「岬めぐりコース」、たくさんの高山植物と絶景が楽しめる「桃岩展望台コース」、「礼文岳登山コース」、湖畔の散策コース、それから秘境と言われております礼文滝を巡るコースなど、小さい島ですが多種多様なトレッキングコースがございます。



礼文島への観光客の入込み数の推移で言いますと、平成14(2002)年度が入込のピークでございまして30万8400人ございました。それ以降年々減少傾向が続いてございまして、平成27(2015)年度には11万6500人と当時の半分以上に減少しております。おかげさまで昨年度(平成28(2016)年度)は11万7900人とわずかに増加に転じまして、今年(2017年)度の4月から9月の上期でも対前年度で7300人、率にしまして6.9%の増加となっております。少しずつですが回復の兆しが見え始めているように感じているところです。

これらの要因として考えられるのは、1つは最近急速に増加しておりますインバウンド、外国人旅行者が北海道の道北エリア、さらには私どもの離島にまで延伸してきているということ。またもう1つは、FDA(フジドリームエアラインズ)によりますチャーター便の稚内空港への乗り入れ便が増加したことなどの効果が大いと感じているところです。遠いと思われておりますこの国境地域に飛行機の乗り継ぎのストレスなく到着できるというチャーター便のメリットが旅行者に定着してきたものと考えているところです。こうした傾向は稚内市を中心として利尻、礼文、それから周辺町村による広域連携での観光プロモーション、または地道な普及活動が成果として表れてきたのだと思っておりますし、今後もしっかりと連携しながら、広域連携、広域観光を展開していかなければならないと感じております。下の棒グラフなのですが、月別の入込みを見てみますと、6月から9月の4か月間が突出してございまして、典型的な夏季集中型の観光となっております。そのため、ほとんどの宿泊施設が10月以降はクローズしてございまして、通年営業しているのは数軒だけといった状況になっております。また、以前から課題となっております、端境期と冬季の誘客につながるような新

たな観光資源の発掘については思うように進んでいないという状況にあります。

◆観光客入込数



そんな中で、最近の滞在型観光への取り組みや体験メニューといったものがいくつかありますのでご紹介します。まずは右上の方に載っておりますけれども、漁協が直営でやっている施設なのですが、「うにむき体験センター」。こちらで1個800円のキタムラサキウニを買っていただいて、職員の方に剥き方と取り出し方をレクチャーしていただきながら実際にウニを取り出してその場で食べることができる。そして、漁協の職員の方からウニの身のオスとメスの見分け方だとか味の違いだとか、こういったウニに関する豆知識も教えていただけるといった施設となっています。



また、先ほどご紹介しました北のカナリアパークでは、礼文島の海岸で拾うことができる

穴あき貝やシーグラスといったものに絵や花をデザインしたり色を付けたりして、キーホルダーなどのアクセサリなどを作れる体験もできます。また、利尻富士が一番きれいに見える所とご紹介しましたがここではゆっくりコーヒーなども飲んでいただけるようにしております。さらに、今年4月に施行されました有人国境離島法に基づく特定有人国境離島地域社会維持推進交付金を活用しまして、滞在型観光の促進を目的にしまして、北のカナリアパークで絶景を眺めながら礼文島で獲れる新鮮な海鮮食材を使った「島フレンチ」を味わうことができる1日限定の特別な野外レストラン「シェフズテーブル in 北のカナリアパーク」というのを今年9月に実施したところでございます。

それでは、礼文島でのオーダーツーリズムの可能性として、これまで観光資源としてあまり注目されていませんでしたが、礼文島を知る上で、その歴史や文化的価値の高いものに埋蔵文化財の遺跡出土品がございませぬ。

■ ボーダーツーリズムの可能性として・・・

◆ 礼文島の重要文化財（縄文遺跡出土品）

北海道船泊遺跡出土品

- ・1998年(平成10年)に発掘
- ・縄文時代中期後半から後期中葉の遺跡
- ・貴重な遺物が数多く出土
- ・住居跡や墓坑、貝製品の制作作業場跡も見つかる
- ・礼文島では産出しない黒曜石やカンラン岩、新潟県産のヒスイ、北海道南西部との類似性を持つ土器群など



日本列島の最北の島『礼文島』に生きた縄文人の生活を知る貴重な資料

学術的価値が非常に高い！！

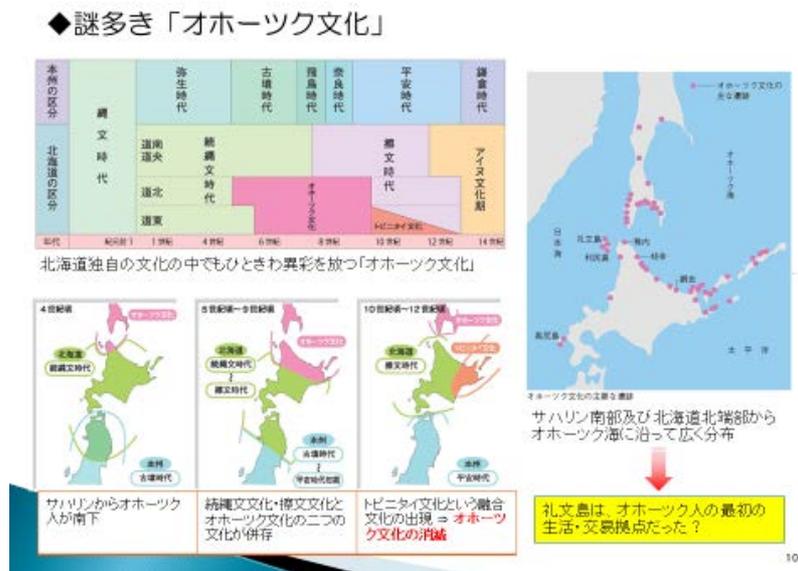
平成25年6月19日 国の重要文化財に指定



平成10（1998）年に発掘されました礼文島北部の船泊遺跡という所なのですが、こちらでは縄文時代中期後半から後期中半までの遺跡がありまして、貴重な遺物が数多く出土しております。また、この出土した中には礼文島では産出しない黒曜石やカンラン岩、新潟県産のヒスイ、それから北海道南西部に類似性を持つ土器群など、日本列島の最北の島・礼文島に生きた縄文人の生活を知る貴重な資料でございます。海を越えて活発な交流も行われていたということ物語る貴重な資料ということで、その出土品の1616点が平成25年に国の重要文化財に指定されております。

縄文遺跡の他にも礼文島には非常に興味深い遺跡が残されておりまして、縄文時代が終わると列島には大陸から農耕文化がもたらされております。稲作を基盤に弥生時代期になるのですけれども、北海道では稲作が普及しなかったことから狩猟と採集を中心としました「続縄文時代」というふうになります。その後、飛鳥時代の頃にはカマド付きの住居だとか雑穀

栽培など、古墳文化に強く影響を受けた擦文文化というものが北海道独自の文化として成立いたします。そして、やがてアイヌ文化へと続いていくわけですが、この流れの中でひと際異彩を放つ文化というのが古代文化にあって、それがオホーツク文化と呼ばれているもので、4世紀頃からサハリンからオホーツク人が稚内や礼文、利尻に南下し始めます。やがてオホーツク人は日本海北部からオホーツク海沿岸へ生活圏を広げていきますが、北海道内には縄縄の擦文文化とオホーツク文化という2つの文化が併存する時代が9世紀頃まで続いています。やがて10世紀になると擦文人の活動が北部や東部のオホーツク人の生活圏まで進出し、オホーツク文化は少しずつ衰退し始めています。やがて、オホーツク文化と擦文文化が融合したトビニタイ文化が生まれ、オホーツク文化は消滅し、オホーツク人も擦文人と同化していったようです。



オホーツク文化の遺跡は、サハリン南部及び北海道北端部からオホーツク海に沿って広く分布しています。つまり、生活圏が海沿いであったことから、彼らの生業が海での狩猟・漁猟に特化していたことが考えられますし、動物の歯牙を加工した様々な骨角器や道具が見つかることから、海への適応性・依存性が高い文化であったことがうかがえます。また、近年のDNA鑑定によって、オホーツク人はサハリン以外にも、東北アジア、ロシアの沿海地方、アムール川流域の人々と強いつながりがあることが明らかになってきました。礼文島がオホーツク人の最初の生活の拠点または交易の拠点であったのではないかと思います。

このように、大陸と深いつながりを持ち、独特な文化であったオホーツク文化の遺物の中には、オホーツク人の精神世界を物語るような、神秘的な遺物があります。それがこの「歯牙製女性像」です。“オホーツク文化のヴィーナス”とも呼ばれ、クジラの歯牙から精巧に加工されたものです。このような遺物は全てオホーツク文化に属するものであり、北海道内では利尻島や根室、網走などでも出土しており、現在12体が知られています。礼文島で出土し

たものは女性像3体のほか、クマの形をした動物像やシャチやクジラなど海の動物を模したものもあり、うち、女性像2体とクマの動物像1体が昭和47（1972）年に北海道の有形文化財に指定されています。ご覧いただけるとおり、非常に神秘的な形や表情がお分かりいただけるかと思います。

◆神秘的なオホーツク文化の遺物



神秘的なオホーツク人の精神世界を物語る
“オホーツク文化のヴィーナス”『歯牙製女性像』



『礼文島出土の歯牙製女性像及び動物像』
北海道指定有形文化財(昭和47年2月17日指定)



浜中遺跡出土の女性像

現在これらの資料は礼文町郷土資料館にて展示を行っております。また、礼文島遺産ミュージアムというホームページ上でも紹介しております。



これら遺産に関するパンフレットやマップ等も各種作成しておりますし、また広域連携の取り組みとしては北海道内の27自治体で組織する「北海道縄文のまち連絡会」というのがあり、こちらの事業で平成25（2013）年度から『縄文88か所巡りスタンプラリー』というのを

実施しながら普及・活用を進めているところです。礼文島における、これからのボーダーツーリズムを展開する可能性の一つとしてご紹介させていただきました。

以上で私からの報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。では次に稚内市の渡辺公仁人様、お願いいたします。

(渡辺公仁人) 皆さま、こんにちは。日本最北端の稚内からやってまいりました渡辺です。本日はどうぞよろしくお願ひします。稚内市は2002年(平成14年)ですけれども、ロシアのサハリン州に海外事務所を構えていまして、私事ではありますけれども、今年の3月まで、5年9か月ですけれども、州都でありますユジノサハリンスクの方に所長として駐在しておりました。現在も事務所長を兼務しておりまして、現地の人脈、経験を活かして、現在もサハリンとの調整役を務めさせていただいているところです。



我が町稚内にありますけれども、水産、酪農、観光を基幹産業とする人口3万5000人の日本最北端に位置する小さな町であります。そして、宗谷海峡を挟んで43km先にサハリンの島影を望む国境の町であります。また、利尻礼文サロベツ国立公園の一部地域を有す自然豊かな町でもあります。サハリンと申しますと、北海道以外の方々には馴染みが薄くて北方領土と混同される方も数多くいらっしゃいますけれども、かつてはその南半分を日本の領土としていた樺太のことであります。また、現在のサハリンは石油と天然ガスで潤う、ロシアの中でもモスクワと並んで一二を争う豊かな地域であります。日本からサハリンへは札幌の千歳空港、それから東京成田空港から直行便が出ております。また、期間限定ではありますけれども、我が町稚内からフェリー航路が開設されておりまして、4時間ほどで行き来することができます。稚内市は長年この航路を使って友好都市となっていますネベリスク、コルサコフ、ユジノサハリンスク、樺太時代は本斗、大泊、豊原と呼ばれた所ですが、そこと文化スポー

ツ交流をはじめとする人的交流、そして経済交流を盛んに推進しているところです。

市内観光スポットへのWifi環境整備



- 平成28年度に整備
- 市内観光スポット5カ所
・宗谷岬 ・北防波堤下ホーム ・稚内公園
・ノシャップ岬 ・大沼
- Free Wifi
・SNSアカウント、メールアドレスでの接続認証
・利用時間制限なし

観光ガイドブック等の多言語化



- 平成27年度から実施
- 日本語版をベースとし、4カ国5言語を作成
- 稚内市ホームページにおいても、WEB用としてPDF化したガイドブックを掲載

稚内の基幹産業の1つの観光でありますけれども、平成28(2016)年度現在、稚内市への観光入込数というのは約50万人、そのうち延べ宿泊数が37万人ということになっています。外国人の誘致に関しましては、平成21(2009)年度に外国人を誘致する組織を立ち上げて、現地の航空会社、それから旅行代理店等にセールス活動や現地のマスメディアを招聘してPR活動を積極的に行ってきました。それからスライドにもありますように、Wi-Fi環境の整備や観光ガイドブックの多言語化、当然ロシア語はあります。こういうことを積極的に進めてきた結果、ここ数年外国人の入込については急速に伸びています。特に、東南アジアからの誘客に関しては大きく増えているという状況ですが、一方では、サハリンからの誘客については大変苦戦しているという状況にあります。



これは、稚内市における外国人の述べ宿泊数の推移でございますけれども、こう見ますと台湾をはじめとする東南アジアなどは急速に伸びております。ロシアを除くその他の外国人も伸びておりますが、ロシア人に関しては横ばいもしくは減少しているという現状にあります。2014年と2015年の推移を見てもらいたいのですが、2014年には1901名ですが2015年には1540人に減少しています。実はこれには原因がありまして、2014年の後半から原油価格が下降しております。併せて、ウクライナ問題に端を發して欧米諸国の経済制裁によって2014年12月にルーブルが大暴落しました。そういうこともあって、ロシア人自体が海外旅行に出かける環境ではなくなったということがあります。

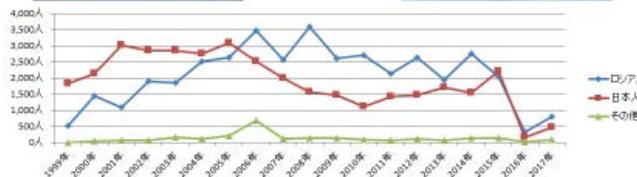
それから、2015年から2016年にかけては、また大きく減少していますが、これについては、今の原因のほかにもう1つ大きな原因……別の理由があります。先ほど、稚内とコルサコフの間に航路があるということをちょっとお話しさせていただきましたが、実はこの航路の維持には稚内市が多額の財政支援を継続している……支えているというのが現状であります。そもそもこの航路というのは、太平洋戦線前、稚内と大泊の一文字ずつを取って稚泊航路と呼ばれていた航路で、年間20万人以上の人と物を運び、北海道とサハリンの大動脈だった航路でありましたが、終戦とともに途絶えてしまいました。1995年、この年に50年の時を経てロシア船によって復活したという経緯があります。それから、1999年(平成11年)から、スライドにもありますように、2600トンのアイン宗谷という貨客船、フェリーですけれども、日本の船社、地元稚内の船会社によって運行が開始されたということです。いずれにしても赤字続きでありまして、稚内市が財政支援をしてもどうしても黒字に転換できないということで、2015年をもって撤退するということもありまして、一時はこの航路の存続も危ぶまれましたけれども、サハリン州政府からも提案がありまして、ここにありますが、ペンギン33という270トンの双胴船、荷物は積めません。この小さな船で再出発するということになりました。

稚内コルサコフ国際定期航路使用船舶 及び 利用状況の推移

船名:アイン宗谷 (1999年~2015年)
船型:貨客船 (RO-RO船)
総トン数:2,628トン 旅客定員:223名
車両積載:81トラック18台または乗用車48台



船名:ペンギン33 (2016年~)
船型:旅客船 (アルミ双胴船)
総トン数:270トン 旅客定員:80名
車両積載: -





この航路ができた……続いたということは大変喜ばしいことではあったのですが、実は大きな問題がいろいろと表面化、発現してしまったという状況にあります。特に、ちょっとしたシケでも船が大きく揺れて船酔いなどが大量発生してしまうという状況もありました。それから、要するに波が弱いということで、すぐに欠航してしまうんですね。ですから、観光客の人にとっては旅行計画が立てられないということがあります。また、エージェントの方にしてみれば募集ツアーも作れないという状況が発生しまして、要するに快適性と定期運航に対する問題が大きくクローズアップされている現状です。そういうことで、先ほど大きく減ったということです。

一方で、近年サハリンの方々の旅行形態が大きく様変わりしてしまっていて、2008年、2009年頃までは原油価格も低く、それから石油掘削事業ですか、そういうような主流産業となっている産業についても始まったばかりでまだまだサハリンは豊かな所ではなかったし、物も不足していたこともありまして、そこで働く技術者を中心に稚内の方にフェリーでやってきて休暇を過ごして買い物をして帰るといった形で、宿泊数も伸びていたのですが、2011年から原油価格が高騰しておりまして、大変豊かになってきたこともありまして、そうなる目と鼻の先の小さな稚内の町よりは札幌、または東京の大都市を拠点に休暇を過ごしたりする人が急速に増えていったということがあります。それでもアイン宗谷が運航していたときというのはゆったりと船旅を楽しみながら移動したいという方々もたくさんおりましたが、このペンギン33に代わってから稚内に訪れるロシア人が激減したというのが実態だと思っています。いずれにしても快適性と定期性を兼ね備えた船舶の確保と、それからサハリンの方々にとって稚内を観光地というような感じではなくて、生活圏の一部として身近で気軽に遊びに来られる場所として認知してもらえるような仕組みや取り組みが今後ロシア人の方々の入込を増やしていく上での重要なポイントになるのだと考えています。

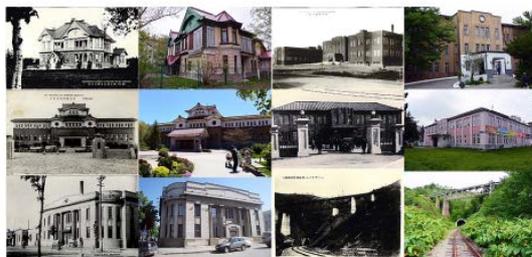
一方で、日本人にとってサハリンというのは観光地としてはまだまだ未開の地だと思っています。サハリンに行くということはロシアに行くということなので、パスポートの他にビザが必要です。そのビザの取得には、手間と時間とお金がかかっておりまして、ほとんどの場合は旅行代理店を通じなければ取得ができないという状況でありました。ところが今(2017)年の8月からロシアの沿海地方・ウラジオストク周辺……地域限定ではありますが、ウラジオストク空港から出入国する日本人を含む18か国の観光客に対して8日間の観光ビザがインターネット上で簡単に取得できるようになりました。また、来(2018)年1月からはサハリンにおいても同じような規制緩和が実施されるということになっておりますので、来年度以降の航路の増加について大いに期待しているところです。

それから、サハリンは豊かになったとはいえ、モスクワのように観光インフラ整備がまだまだ整っていないというのが現状ですので、日本でいう観光地というイメージができる所ではないのですが、何とも言えない、不思議な魅力のある所だと、長年住んでみて思っています。北海道の自然を卓越した大自然というのがそこにはありまして、そこに分け入ってする

釣りなどを中心としたアウトドアが盛んなのですけれども、それ以外に、何と言っても帝政ロシアというよりはソ連時代の街並みの中にここにあるような日本の古い建物がいまだに現役で使われていたり、今ではほとんど日本には残っていない構築物が数多く残っていたりします。ソ連時代のロシアと戦前の日本が入り混じった妙に懐かしく、一方では新鮮に感じてしまうような何とも言い難い不思議な魅力あふれる所であります。稚内市としてはこの不思議なサハリンの魅力をもっと日本人の方々に知っていただくと共に、稚内とコルサコフ航路を利用してサハリンに渡ってみたいと言っていただけのような、魅力ある航路にしていかなければならないと思っていますし、まずはその前にこの航路をしっかりと守っていかなければならないと考えています。



日本時代の面影 I



上から樺太憲兵分隊、樺太庁博物館、拓殖銀行豊原支店

上から樺太庁豊原病院、豊原町役場、豊真線宝台ループ橋

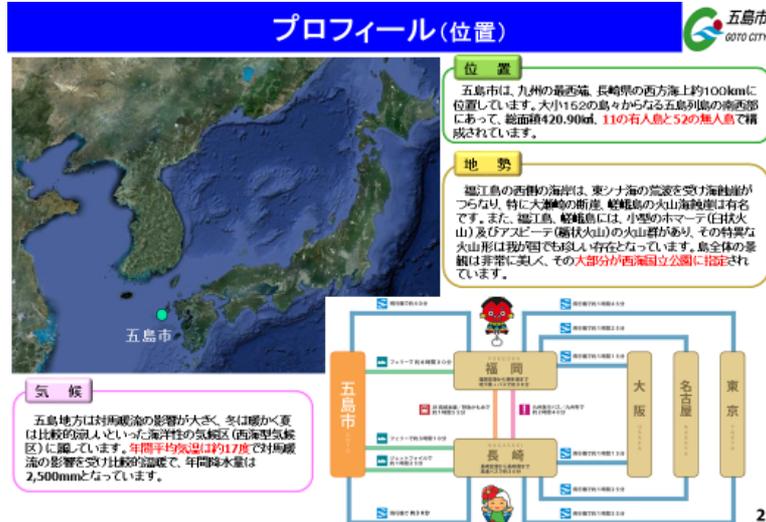
日本時代の面影 II (製紙工場/奉安殿・忠魂碑)



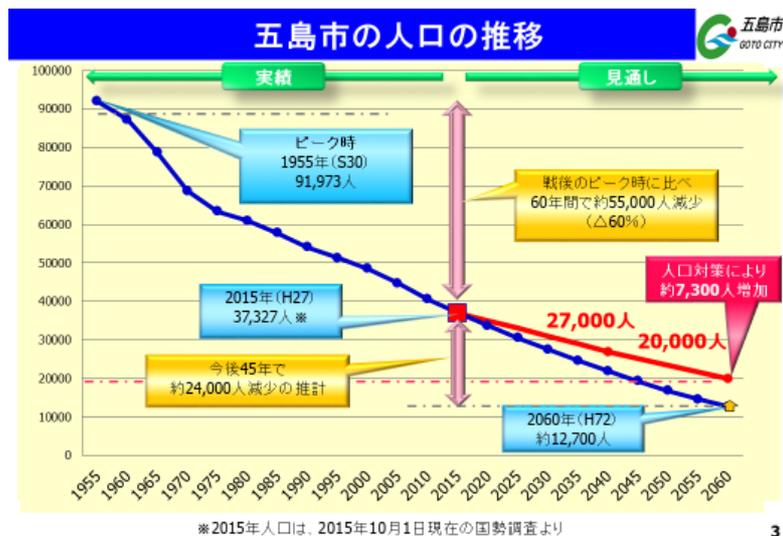
最後です。本日このセミナーに参加しておられる齋藤マサヨシさんの写真集(『サハリンに残る日本』)がインターネット上でも販売されております。サハリンと樺太に関して今までにない切り口の素晴らしい写真集でありますので、是非お買い求めいただければと思います。以上、雑駁ではありますが、私からの発表とさせていただきます。ありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。皆様からするとすごく遠い北海道の2つの町からのお話でした。続いて長崎県五島市の樋口貴彦様、お願いします。

(樋口貴彦) 皆さん、こんにちは。五島市から参りました政策企画課の樋口と申します。私は、離島振興の担当をしております、このような機会を得て説明ができることを大変喜びを感じております。どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。



まずは五島市のプロフィールから始めます。北海道をはじめ全国各地から来られている方も多いため、五島市の位置をまず確認していただきます。先ほど市長からもありましたけれども、長崎市から100kmの位置にございます。対馬との位置関係はこういった状況で、島全体が西海国立公園に指定されていまして、自然豊かな島にございます。交通に関しては、福岡と長崎にそれぞれ航路、航空路が出ています。ジェットホイルで長崎まで85分、フェリーで約3時間です。飛行機で福岡までが40分、長崎まで30分と、非常に便利な島です。



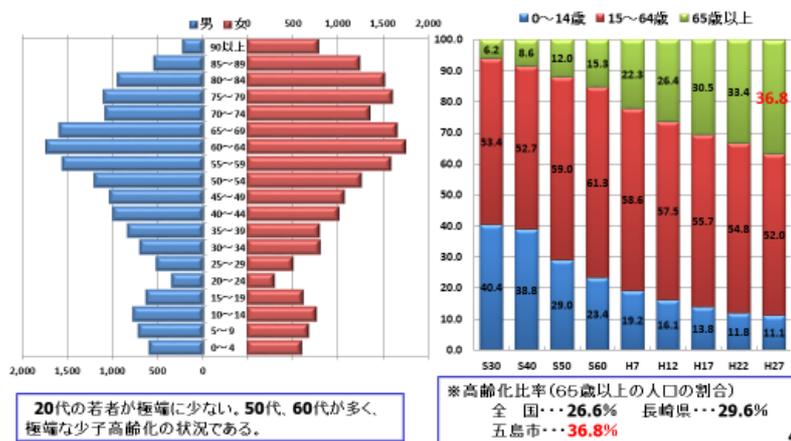
続いて人口の推移ということで、先ほどこちらもお話がありました通り、昭和30(1955)年が人口のピークで、その後は右肩下がりです。今では約3万7000人です。将来的には、2060年に1万2700人まで減少するという予測が出ています。市としては2万人という目標を設定し

ています。非常に低い目標ではないかというご指摘を受けるのですが、今以上に出生率を維持していかなければならない。また、毎年100名のU、Iターンを増やして、それを毎年実現していかなければならないという、非常にハードルが高いものとなっています。

推定人口ピラミッドは見た通りでございますけれども、20代のボリュームが非常に少ない、60代が異常に多い。先ほど礼文町の65歳以上が34.98%ということでしたけれども、五島市の場合にはそれ以上の37%弱で、将来的には約半分にまで達するだろうという予測も出ております。いわば日本全体の少子高齢化の最先地というような位置で我々はいつも政策を考えているところです。

5歳毎階級別人口、年齢3区分人口推移

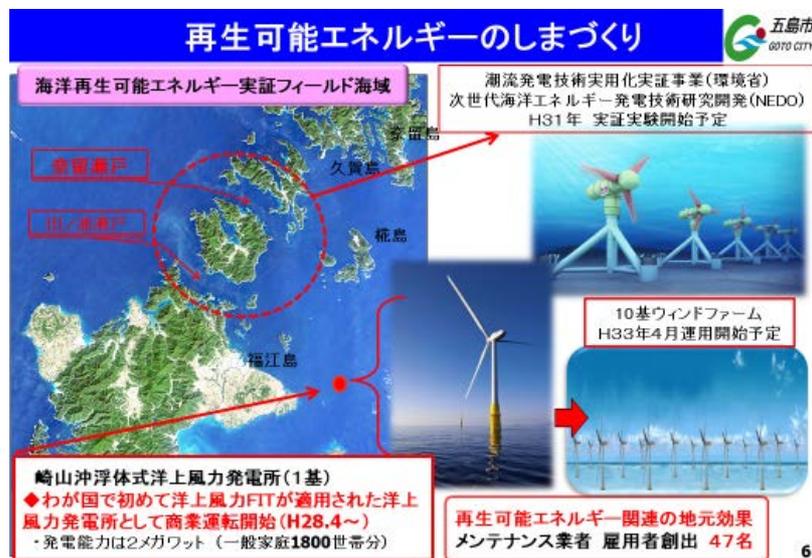
5歳毎階級別人口・年齢3区分人口（平成27年国勢調査）



そして、島の紹介ですが、現在11の有人島がございます、かつてはこの赤い所も有人島でした。13あったのが今は11になっています。今一番少ないのが黒島に2人……90歳のおばあちゃんとその娘さん(70代)が住んでいらっしゃいます。ゆくゆくは無人島になる可能性が非常に高い島です。こういった状況が刻一刻と進んでいるというのが五島市の現状です。



続いて、五島市が今力を入れています四大プロジェクトをご紹介します。まずは「再生可能エネルギーの島づくり」で2つあります。浮体式洋上風力……これは海にプカプカ浮いています。海底に3点鎖でつないでいる浮体式の洋上風力なのですが、環境省の実証実験の後、平成28(2016)年4月に日本で初めて商業運転を開始しております。今1基ですが、発電動力は2メガワットで、一般家庭で言いますと1800世帯分ございます。今後の話ですが、10基のウィンドファンを平成33(2021)年4月に運用開始する予定で取り組みを進めています。これは民間事業者がやっておるのですけれども、五島市にこういった経済効果があったかという、やはりメンテナンス業者が非常に今育っておりまして、海底のメンテナンス、それから海から上の羽などのメンテナンス……といった事業者が非常に成長しております。そういった雇用が47名今創出されているというところです。

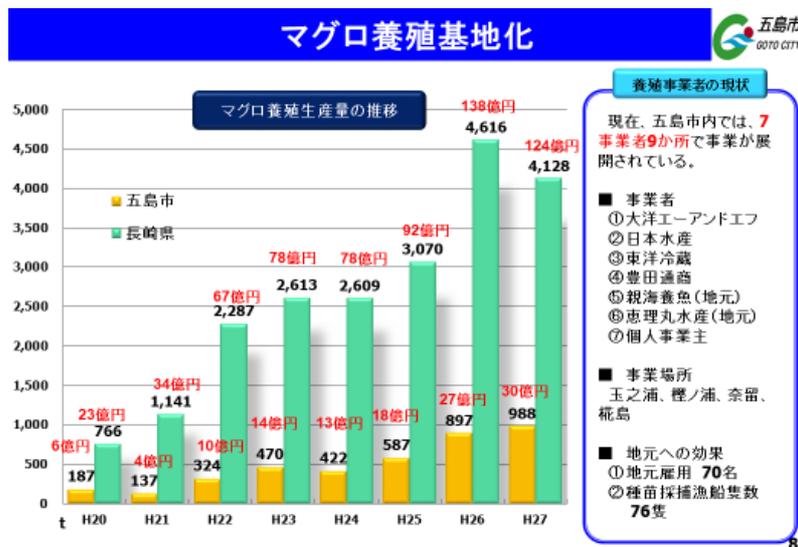


もう1つが潮流発電です。海の中にこういう大きいプロペラが、潮の流れで発電するというものなのですが、この丸が込みの奈留瀬戸という所で今後実験を行う予定です。見て分かる通り非常に潮の流れが速い所で実験を行います。ただ今、詳細設計など実施をしております、平成31年度から実際にこの海域に、これはヨーロッパ製の大きいものなのですが、1基は世界最大規模と言われるもので実験を進める予定です。今後の発電データ、そういったものの検証を行っていくというところです。

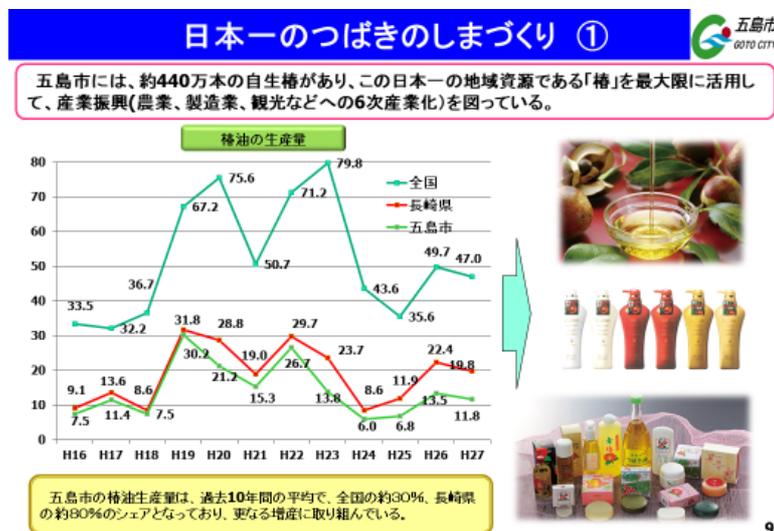
続いて「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」でございます。ご存知の方もおられるかと思いますが、実は平成27年に推薦されまして、その時のユネスコの諮問機関 ICOMOS の指摘によって、まだまだ価値証明が不十分ではないか、禁教期にもっと焦点を当てるべきではないかということで、一旦は取り下げております。名前の方も「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」からこういった名前変更されているというところです。元々はその前の27年7月に「明治維新日本の産業革命遺産」と推薦候補を争っていたのです。そういったこと言うと今回で3度目のチャレンジになります。今(2017)年度推薦をしておりますので、来(2018

年) 年7月には必ず世界遺産登録の運びになるということを我々は信じております。五島市の中には奈留島と久賀島に関連遺産がございます。

続いて3つ目が「マグロの養殖基地化」です。長崎県はマグロ養殖日本一の生産量を誇っております。現在五島市では7事業者9か所で事業展開をしております。いろいろなハード整備も終えまして、今だんだん出荷額も増えてきているというところです。地元との兼ね合いを少しご紹介しますと、マグロを育てるにはヨコワという稚魚を釣る漁師たちがが必要です。五島でも70名の雇用が生まれておりまして、従来の夏場の漁というのは収入が少なかったのですが、このヨコワの漁で収入も安定することに繋がっているということで、地元の漁業者ともうまくいっているのではないかと考えています。それから、この豊田通商は、皆さんご存知かもしれませんが、卵から孵化して育てていく種苗センターというのを地元で生業しております、マグロの完全養殖というのも五島の地で行っているところでございます。



それから最後に4つ目は「日本一の椿の島づくり」で、五島市には椿が440万本あると言われています。これは平成21(2009)年度に数の調査をしまして、椿で有名な伊豆大島を抜いて日本一になっております。椿の活用としましては、例えばこちらの資生堂の「TSUBAKI」というシャンプーに原料で提供したり、あとは石鹸やハンドクリームに広く使われております。椿油の生産量ですが、過去に数度日本一になった年もございます。ただ、年によっては豊凶の差が激しいということで、これは今も解明はされておりませんけれども、生産量を保つというのは非常に難しいという状況です。その他、2020年に国際椿会議の開催予定もいたしております、そういったいろいろな取り組みを行いながら日本一の椿の島づくりの政策を進めているというところでございます。



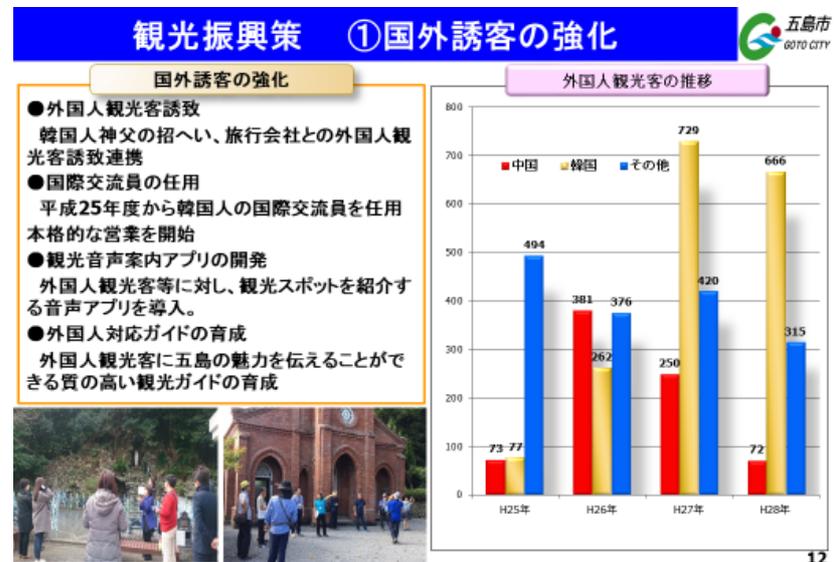
続いて、観光関係のご紹介です。まず、国内誘客はどのようなことを行っているかという、今まで紹介された自治体と同じようなことなのですけれども、まず魅力ある商品を作るということで、これまでの定番の旅行ツアーから地元が作るおすすめツアーということで、今地元の観光協会の方で一生懸命やっております。たとえば世界遺産のツアーとして「教会を巡るキリシタン物語」を作成しまして誘客に力を入れております。それから当たり前の事なのですけれども、観光ガイドの育成……今日午前中に対馬の藤井敦子さんという素晴らしいガイドを聞きながら対馬の町歩きの体験をしましたがけれども、まだまだ五島でもそういった方が少のうございます。そういったガイドの育成を地道に続けているというところです。それから、長崎県内の離島全域で一斉に取り組んでいたのですけれども、「しまとく通貨」の活用ということで、2割のプレミアムが付いた商品券を販売して地元の消費拡大に努めているところです。平成26(2014)年から福岡と東京の方に事務所を開設して今年も観光物産の営業を頑張っております。その一環として、大型客船の誘致、先ほど礼文町の方のご報告でも出ました国内チャーター便……フジドリームエアラインが運航するチャーター便の方が28年度では16本、約840人が来島しています。愛知県の小牧、静岡、米子といった全国

各地から来ていただいています。



11

国外の誘客については韓国を中心に行っています。世界遺産の巡礼ツアーを中心に行っています。ただ、人数としてはまだ非常に少なく、この単位は「人」ですけれども、1000人っていないという状況です。今後は韓国に加えてフィリピンにも力を入れて取り組みを続けていきたいと思っています。



12

また、民泊の方も非常に力を入れていまして、修学旅行の方が今27校、関東、関西、関西であれば奈良県であるとか、海が無い県を中心に進めています。課題については魅力ある商品の造成、受け入れ態勢の強化とか。もう1つ、産業関係の後継者対策ということで、例えば、2次離島の民宿など、後継者がおらずに廃業していくというケースがございます。対策としては市が後継者を公募して見習い期間中は生活費を支援するというようなことも行っているのですけれども、なかなかうまくいっていないという状況でございます。

観光振興策 ②体験型観光(民泊)の推進



- 民泊組織整備
市内各地で11の民泊受け入れ組織を立ち上げ、体験プログラム集「五島感動しま旅！」を整備。
- 体験型修学旅行(民泊利用)の受入れ
平成27年度より本格的な受入が始まり、平成29年度も中高生の予約が増加
- 修学旅行の誘致拡大
一般旅行向けの体験プログラムを整備するなど、体験型観光推進への取り組みを強化



新たな取り組みとしましては先ほどお話がありました通り、滞在型観光の促進に力を入れ、五島の澄み切った空を体験する「星空ナイトツアー」、日本遺産、五島は遣唐使とか空海ゆかりの史跡がございますのでそういったツアーの作成も行っています。新たに「五島列島ジオパーク構想」にも取り組んでいまして、平成31(2019)年度に日本ジオパーク登録を目指して頑張っています。もう1つ「離島教育プログラム」という聞き慣れないものなのですが、全国から中学生・高校生が五島に学びに来るようなプログラムの作成をしたいと思っています。イメージとしては、民泊体験よりさらに本物の職業体験、自然の中でのフィールドワーク、地元学生とのワークショップといったことを通じながら課題解決型の問題意識を高めることに取り組みたいと思っています。

五島市の観光の新たな取組



滞在型観光促進「もう1泊させるための取組」

- 「もう1泊したいと旅行者に思わせるような魅力ある旅行商品造成
「鬼岳星空ナイトツアー」の実施
「日本遺産活用ツアー」、「嵯峨島、大瀬崎クルーズ」の造成
「釣り、アニメ、結婚式等」、新たな観光素材の掘り起し、滞在型商品に！

五島列島ジオパークの推進

- 五島にある魅力的な地域資源(迫力ある海食崖、火山地形など)を保護しながら、島内外の人たちに五島の新たな視点での魅力を知ってもらう活動を行っていく。
H31年度日本ジオパーク登録を目指していく。

離島教育プログラム策定

- 五島の魅力(自然、歴史、文化芸能、職業など)を体験できるプログラム(自然環境を活かしたフィールドワーク、地域の課題解決型ワークショップなど)を策定。
五島への愛着を育み、再訪、将来の定住につなげていく。





15

最後に、実は五島市で来年、JIBSN セミナーが開催されて、このボーダーツーリズムを企画しております。五島に一番近い済州島を経由して釜山、福岡といった所のツアーをできる

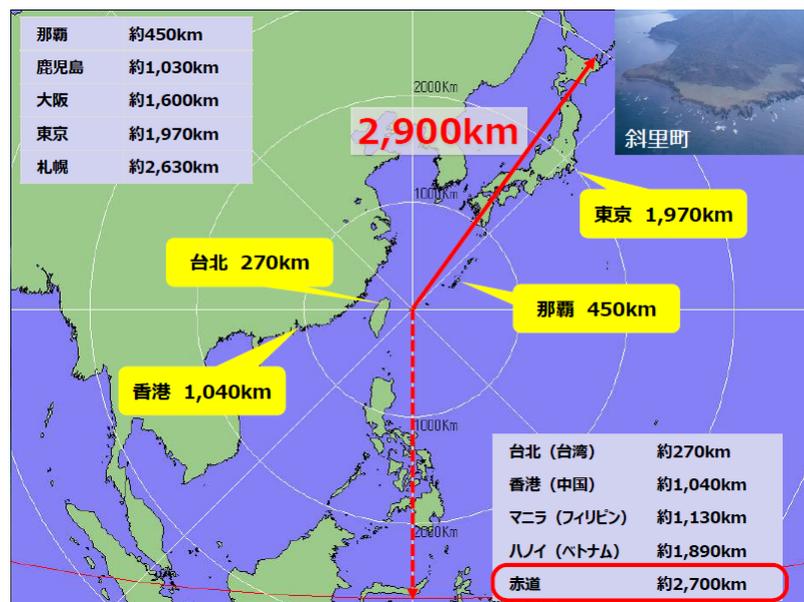
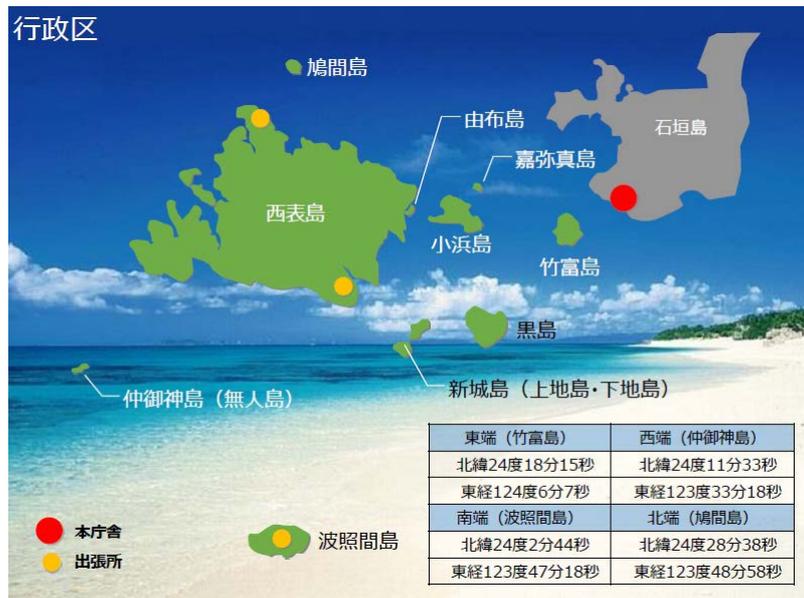
いかと考えております。今、濟州島とは、濟州大学と交流を始めておまして、濟州大学の
 方でも五島を研究している先生がいらっしゃるということですのでそういった話を聞いたり
 り、地元で濟州島に関するいろいろな史跡を周ったりと、そういったツアーになればと考えて
 おりますので、是非五島に来年お越しく下さい。以上です。ありがとうございました。



(田中) ありがとうございました。続きまして、沖縄県の竹富町から来ていただきました、
 大浜様よろしくお願いたします。

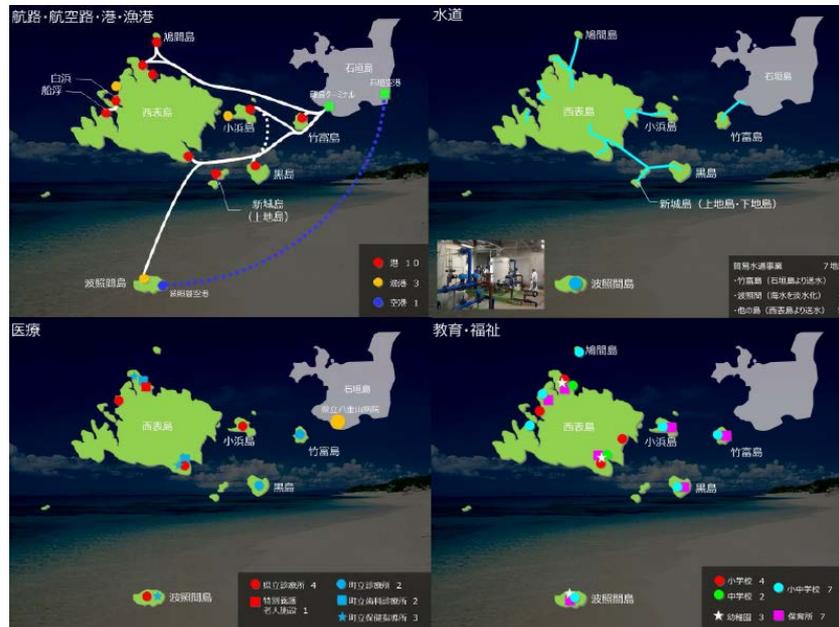
(大浜知司) こんにちは。沖縄県竹富町から参りました大浜と申します。これからわずかな
 時間ではありますが竹富町の紹介、観光の現状等についてお話しさせていただきます。
 竹富町は琉球列島の最南端、八重山諸島に属する9つの有人島と7つの無人島から成る島嶼
 の町でございます。東西約42km、南北約40kmの広範囲による、町役場本庁舎を八重山経済
 の中心地であります石垣市に置いております。沖縄本島に続く大きな島であり、イリオモテ
 ヤマネコで知られる西表島を有することをはじめ、沖縄県下では最大の面積を有する町で
 ございます。

位置でございますけれども、ありますように沖縄本島那覇まで450km、台湾までが約270
 km、東京までの約2000kmという距離はベトナムのハノイまでの距離およそ1900kmまで届く
 距離となっており、竹富町を含めた八重山地方はまさに国境の島と言う表現がぴったりでは
 と思っております。ちなみに本町は、日本の北と南に国立公園を有する町同士ということから
 北海道の斜里町と姉妹町に関係にございますが、この斜里町を訪れるよりも赤道の方が近
 いというような位置関係にございます。また、ここ対馬市とはヤマネコが取り持つご縁によ
 り、昨年7月に友好都市協定を結ばせていただいております、様々な分野で交流を深めている状
 況でございます。



島嶼町の竹富町には各島を結ぶ船舶による交通網が整備されており、各島の玄関口として10の港湾、3つの漁港が整備されています。水道につきましては水がめである西表島から海底送水により供給される周辺離島をはじめ、石垣島からの海底送水により供給を受けている竹富島、海水淡水化施設による波照間島など竹富町の町民は3種類の水を飲んでいるという状況になっております。医療につきましては、沖縄県立八重山病院が石垣市にございますが、竹富町内においても県立診療所、町の診療所、歯科診療所、保健指導所等が整備されており、それぞれの島、それぞれの地域の医療を担っております。教育につきましては町内の各島、各地域に小中併置校を含む13校、幼稚園3園、保育所7園があり、町内の教育行政を担っております。町内には高校が無く、中学校を卒業すると進学のためにはどうしても親元

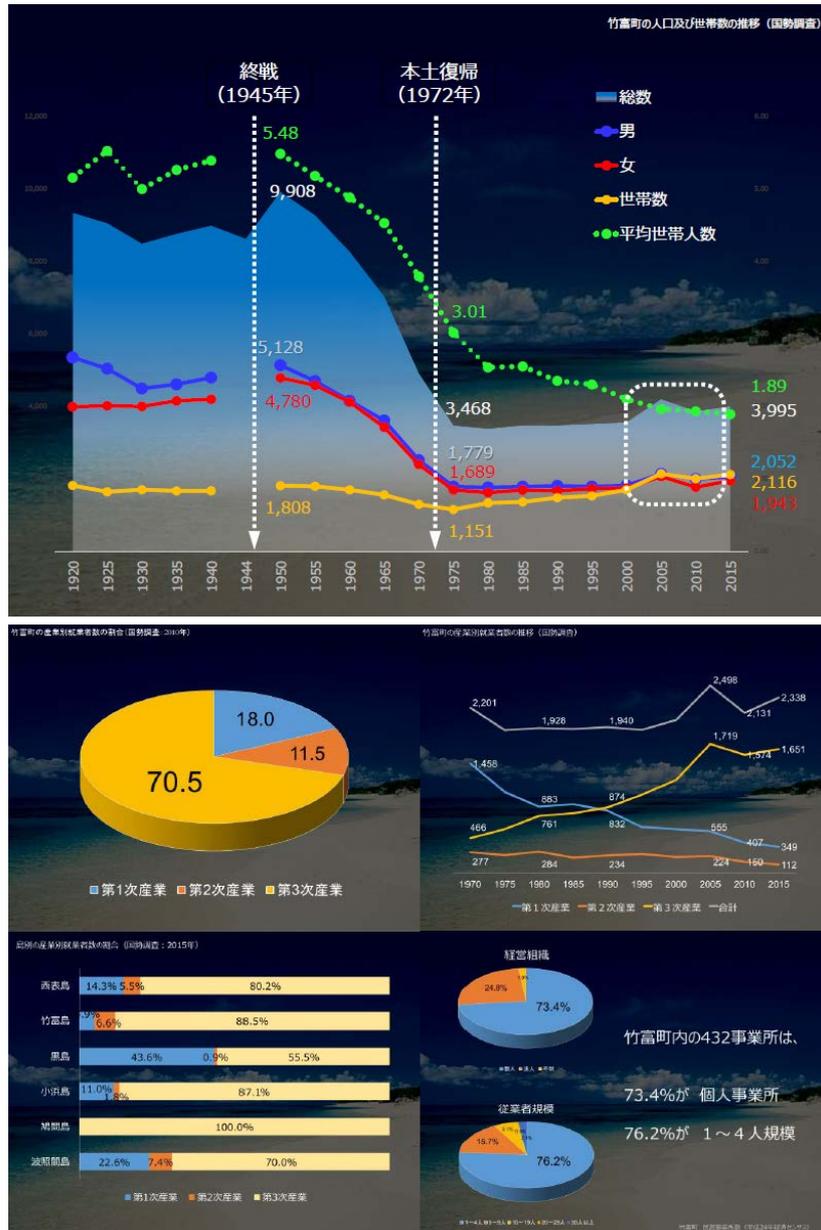
を離れ、町を離れなければならないという現実がございます。



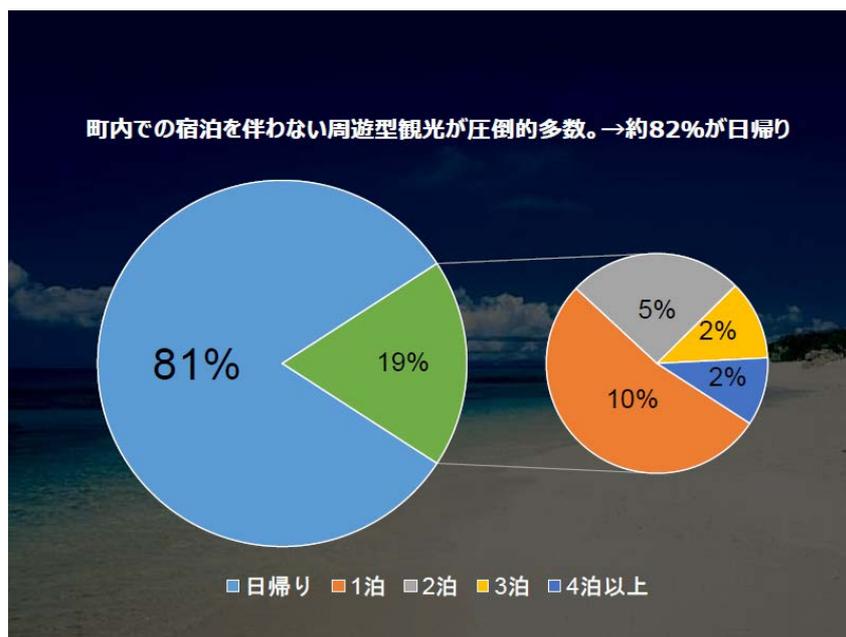
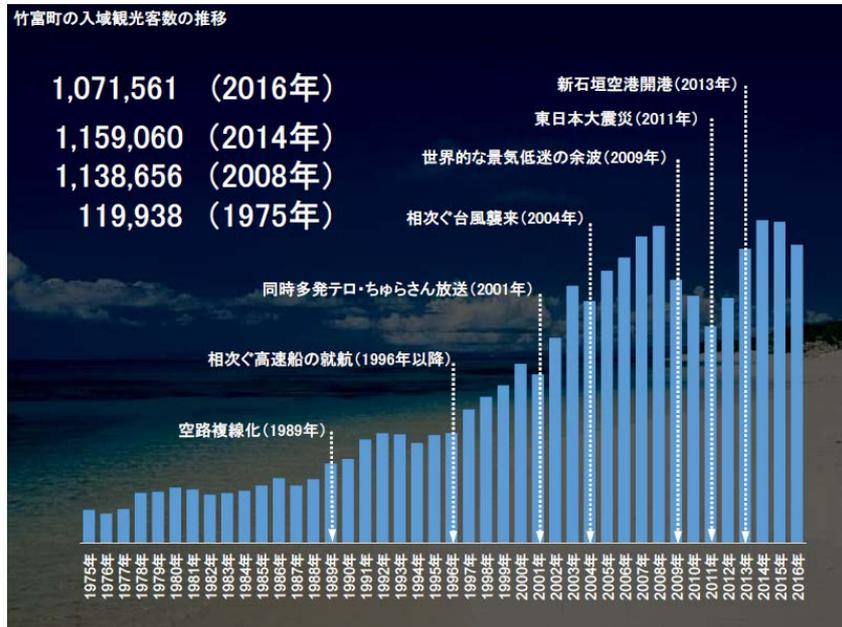
そのような竹富町は、これまで自治区の変遷や政治上の利便性などから役場の場所を昭和13（1928）年に石垣島に移しております。昭和23（1948）年には村から町へと移行し、来年町制施行70周年を迎える今日に至ってなお役場の中心庁舎がその行政区外に位置する国内でも特異な自治体となっております。町内には3か所の出張所を設置し、窓口業務を中心に業務を行っております。また、出張所が設置されていない島については郵便局にご協力をいただき、証明書等の発行の業務を担っていただいております。

人口ですけれども、戦後約1万人の方々に住んでおりましたが、その後急激な人口現象が続き、本土復帰までの下げ止まりまで約1/3近くまで人口が減少しております。その要因は職を求めて石垣島、沖縄本島、遠くは本州への転出が急増したことであり、その後の本土復帰以降は約3500人前後で人口が推移しております。ちなみに平成29年10月末の人口は4300人となっております。

産業は、グラフを見てお分かりの通り全体の7割が観光を含む第3次産業となっております。70年代には第1次産業が7割近くを占めておりましたが、90年代には逆転し、以来島ごとの割合は異なりますが、全ての島で第3次産業の占める割合が大きくなっております。しかしながら第3次産業、観光産業に携わっている430余りの事業所につきましてはその規模が小さく、1人から4人ほどの家族経営に近い、その規模の事業所が全体の76%を占めるという数字となっております。町内への観光誘致活動ですが、90年代後半に相次いだ現行タイプの高速船の導入により、これまでに比べ格段に多くの客を早く何度も町内の各島に送客することができるようになっております。それに伴い、島々を巡る周遊型観光が増加いたしました。



以来、世界的な景気低迷であったり、東日本大震災などによる社会的な要因等による減少時期を経ましたけれども、平成 25 (2013) 年に石垣市に新たに新空港が開港いたしました。その影響もあり、観光入込者数は徐々に伸びてきている状況です。このグラフを見ての通り、観光入込者数は増えてきていましたが、ほとんど 80%以上が日帰り観光という観光携帯になっております。日帰りをしない 19%の方々にも、その半分以上が 1 泊しか竹富町内では宿泊していないという数字が出ております。いろいろ変遷をしてきましたけれども、まだまだ日帰り型からの脱却が進んでいないという状況でございます。



そこで、竹富町における観光携帯を宿泊型へとシフトするため、観光施策として竹富町内での滞在の延伸を考えました。延伸の最大のポイントはやはり宿泊していただくことであり、竹富町ならではの、島でなければ、島に泊まらなければ体験できないメニューの創出を考え、滞在時間の延伸を図ることを、竹富町内の観光協会をはじめ地元の事業所と共に現在取り組んでいるところでございます。非日常を味わうことであり、文化の違いを体験するのが旅であります。旅先は観光客にとってはまさに非日常でございます。



しかしながらそう感じることができるのは、その地において生活する方々の日常があるからにほかなりません。文化の違いを作り上げているのは、その地域独自の自然、伝統、文化、生活、風習であり、同時にそれらを形作っているのが旧暦という時間軸であると思っております。竹富町を含む八重山地域の伝統行事は現在私たちが使用しております新暦とは異なる旧暦によりその日取りが決められることから、伝統行事においても毎年その開催日時が異なることとなります。私たちはこのような暦を「島暦」と言い表し、島々の自然や文化を体験するものとしてまとめてみました。旧暦は月の満ち欠けや潮の満ち引きによって起きる現象であり、このような自然現象を基にした時間の流れに沿って地域の伝統行事などが実施されるため、旧暦を知ることにより島での生活リズムを体感し、観光をより楽しめるのではない

かと考えました。一度でも旧暦の楽しさをお伝えできればということで、島における季節の移り変わりやその自然と生活との関わりを1枚のポスターにまとめてみました。

皆さまから向かって左側、表の太陽の面にはその季節を表現する風の名前を中心に、巡る1年が表現されており、右側裏の月面には島の伝承、言い伝え・物語を記載しております。このような時の流れ、自然とのかかわりが特徴的なアクティビティが竹富町には数多く存在しております。勿論、自然が相手ということになりますので、確実な催行が約束されるわけではございませんが、それらを含めて事前期待を上回る事後満足を提供できるよう各メニューとも趣向を凝らし旧暦、新暦が楽しめるような取り組みを進めて参りたいと思っております。



生涯通える学校がここに・島文化を知る体験滞在の旅
自然と自然・人と自然・人と人

竹富島 島学校

自然と自然 人と自然 人と人

つながりを体験する旅

時間割(行程)		
1日目(夜)	2日目(土)	3日目(日)
午 前	朝 朝	朝 朝
入学式	朝 朝	朝 朝
オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション
夜 夜	夜 夜	夜 夜
夕食	夕食	夕食
ナイトツアー	ナイトツアー	ナイトツアー

竹富島 島学校

西表島西部島学校

現在島の伝統文化を組み込むことで、本来持っている価値の向上となった観光事業も実施しております。その1つが「島学校」であります。ここで言う「島学校」とは、「繋がりを体験する旅」をコンセプトとし、地域の持つ独自のアクティビティ、「自然と自然」「人と自然」「人と人」というテーマによって構成しております。このように表しております。いろいろな自然、いろいろな方々との交流を深めていただきたいという配慮をしております。以上、いろいろ駆け足ではありますがお話しさせていただきましたが、竹富町の現状としては周遊型観光からいかに滞在型観光へ移行するのか、そのひと言に尽きると思っております。竹富町における観光の課題は山積しておりますが、滞在型観光の移行に必要な観光の質の向上は喫緊の課題となっております。

簡単ではありましたが、以上で竹富町の概要および観光に関する現状をお話しさせていただきました。ありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。北から南から西から、いろいろな方々が今日は遠くか

ら来てくださっていることから、場所や気候などが全然違うので、ここにいながら日本のいろいろな所を旅している気分になってしまいました。続いては地元・対馬市の内山歩様、よろしくお願ひします。

(内山歩) 皆さん、こんにちは。対馬市しまづくり推進部政策推進課の内山と申します。本日は JIBSN 対馬セミナーの開催にあたり国境の島・対馬へ各地よりご来場いただき、誠にありがとうございます。報告させていただく前に、本来であればこの場には観光政策の担当者が報告したほうが分かり易く皆様方にお伝えできるのかと思ひますが、実は私がフライングをしてしまいまして、あとでこのセッションの報告内容が「観光政策」と聞いた時に、すでに私の名前が掲載されたポスターが刷り上がっておりまして、そういう状況の中でこのようなミスが功を奏してこのような場で登壇させていただいていることを大変うれしく思っております。

それでは、対馬市の概要と観光政策について説明いたしたいと思ひます。対馬は福岡から海路で 138 km、一方隣の国韓国までは最短距離で 49.5km に位置し、古い時代から大陸との交流が盛んに行われていた島でございます。人口は今年の 9 月末現在で 3 万 1494 人、最も多かった昭和 35 年には約 7 万人で、現在では半分以下に減少しています。面積は 708k m²。南北に 82km、東西に 18km で、日本の離島では佐渡島、奄美大島に次いで 3 番目に大きい島となっております。また、スライドでは紹介しておりませんが、対馬の産業構造としましては離島ということもあり、漁業を中心とする第 1 次産業が多く 20%以上を占めております。漁業ではブリやイカなどが主で、素潜りによる採介藻や真珠養殖が盛んに行われ、アナゴの漁獲量は日本一となっております。

① 対馬市の概要・紹介	
●位置	北緯 34度42分～34度5分 東経 129度30分～129度10分 福岡までの距離(海路) 138km 韓国までの距離 49.5km
●人口	31,494人
●世帯数	15,193世帯
●面積	708.65km ² (南北82km、東西18km) (平成29年9月末現在)

対馬の名称が最初に出て来たのは中国の歴史書『魏志倭人伝』とされており、その内容は「急峻な地形で山が海まで迫っており、平地が少ないため田畑は少なく魚や貝類を獲って生活しており、船で九州や朝鮮半島に出向き交易もしている」というような内容の文章でござ

います。そのまま現在の対馬として紹介したとしても近いものがあるのではないかと思います。歴史の分野としましては、607年以降の遣隋使が4回派遣されており、いずれも対馬を経由しておりました。630年以降も6回の遣唐使、これも対馬を経由、668年以降は27回の遣新羅使が派遣されておりますが、万葉集には一行が詠んだ対馬に関する歌が42首あると言われております。

① 対馬市の概要・紹介

魏志倭人伝に紹介された 「対馬」

- 始めて一海を渡ること千余里、対馬國に至る。その大官を卑狗と日い、副を卑奴母離と日う。居る所絶島にして、方四百余里ばかり。土地は険しく深林多く、道路は禽鹿の小径の如し。千余戸有り。良田無く、海物を食いて自活し、船に乗りて南北に市糴す。
- 急峻な地形で、山が海まで迫っている。
- 平地が少ないため、田畑が少ない。魚や貝類を捕って生活している。
- 船で、九州方面や朝鮮半島と交易（貿易）をして生計を立てている。

また、先ほど比田勝市長のご挨拶の中にもございましたユネスコ世界記憶遺産に登録された朝鮮通信使に関しましては、豊臣秀吉の文禄慶長の役の朝鮮出兵により断絶した国交を回復しようと徳川将軍の命を受けた当時の対馬藩主・宗義智が苦勞を重ねて1607年に第1回目の通信使の来日につなげ、1811年までの204年の長きにわたり計12回の朝鮮通信使が来日しております。



アクセス

空路（昭和50年空港開港）

- 福岡空港から ANA 30分 4往復
- 長崎空港から ORC 35分 4往復

海路（九州郵船）明治29年定期運行

- フェリー 博多⇄厳原 4時間 2往復
- 博多⇄比田勝 5時間 1往復
- ジェットfoil 博多⇄厳原 2時間 2往復

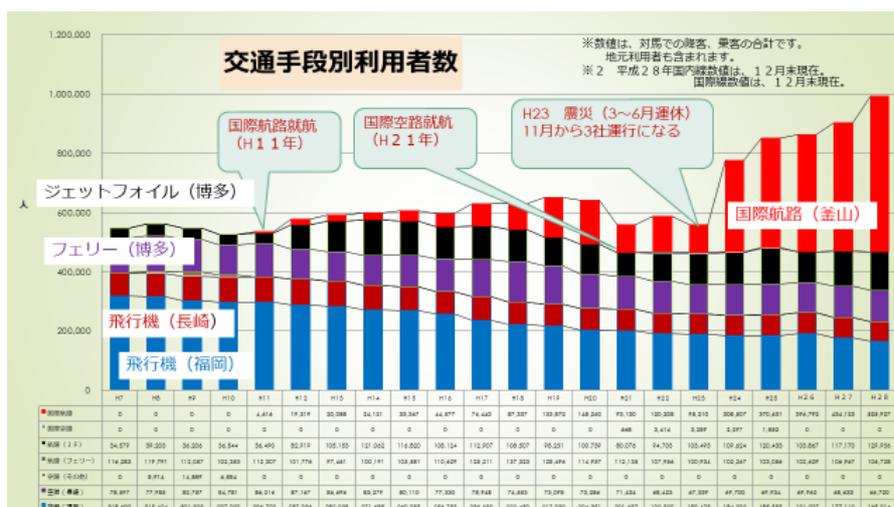
国際航路（平成11年開設）

- 釜山⇄比田勝 約1時間
- 釜山⇄厳原 約2時間

次にアクセスでございますけれども、空路は島内に1ヶ所、対馬空港、愛称「対馬やまねこ空港」があり、昭和50（1975）年に開港し、対馬空港から福岡空港、長崎空港にそれぞれ約30分で結ばれております。海路では九州郵船によるフェリーとジェットfoilが就航し

ており、いずれも博多港から出航しております。

国際航路は平成11(1999)年から釜山と対馬を結ぶ航路が開設され、現在対馬北部の比田勝港および南部の厳原港から1日3から4往復運航しております。また、平成21年4月から韓国のコリアエクスプレスエアーにより座席数19席のプログラムチャーターがおこなわれていましたけれども、平成25年7月から運休中となっております。現在就航再開に向け関係者が協議中であると言っております。対馬の国際航路の流れとしましては、平成元年に小型船を建造し、平成5年から韓国の馬山を結ぶ航路を開設しましたが長くは続いておりません。平成11(1999)年からは韓国資本の大亜高速海運が航路を開設し順調に韓国からの観光客が増加してきている状況で、平成23(2011)年に新たに2社が参入し、現在3社体制となっております。比田勝港から1時間、厳原港からは約2時間で結ばれており、船の大型化も進んでおります。これが2時間、比田勝港から約1時間ということになっております。



このグラフは交通手段別の利用者数です。下段から、青が福岡便の飛行機、茶色が長崎便の飛行機、紫が博多港からのフェリー、黒が博多港からのジェットfoil、そして一番上

の赤が釜山からの国際航路を示しております。飛行機や船を利用した国内からの数字は地元客やビジネス客も含まれておりますが、近年ほぼ横ばい状態です。しかしながら国際航路の利用者は平成24(2012)年から運航事業者が3社体制になったこともあり急増しています。



このグラフは国際航路を利用して対馬に入港した分布を国籍別に示したもので、黄色で示している韓国人客が全体の98%以上を占めております。ちなみに、クルーズ船など特例の上陸許可を除いた出入国者数でいきますと、平成28年は比田勝港が全国1位、厳原港が3位となっております。

② 観光施策の概要・取組状況について

目標設定

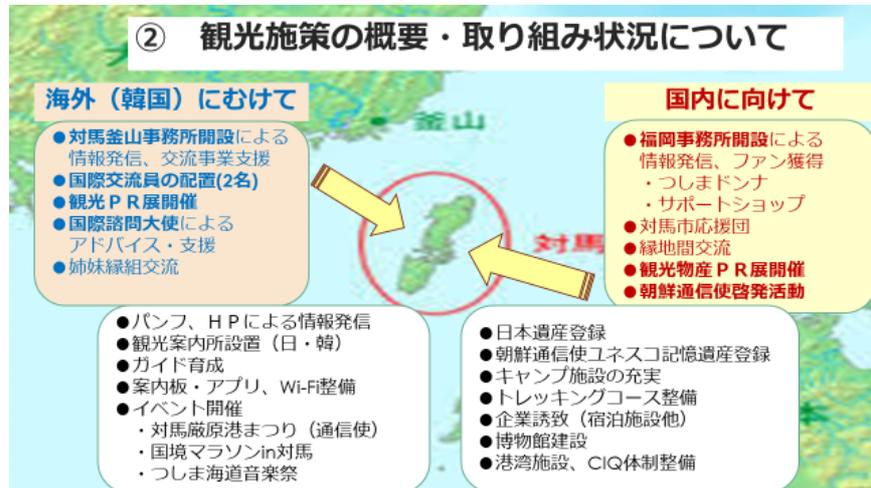
(テーマ)
「対馬型観光まちづくり産業 ワン、ツー、スリー、フォーUP!!!」

■観光振興推進計画の目標■

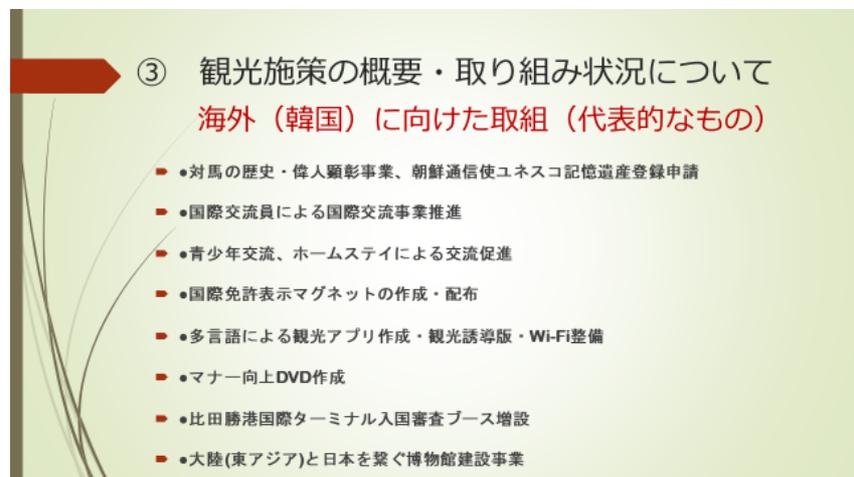
目標項目	平成27年実績	平成32年目標	備考
1 消費額(円/人)	(宿泊客) ¥19,705- (日帰り客) ¥15,400-	(宿泊客) ¥21,600- (日帰り客) ¥16,900-	10%UP
2 宿泊客数	269,894人	323,000人	20%UP
3 日本人観光客実数	177,370人 (想定数) ※実数調査実施後、見直しを行う	230,000人	30%UP
4 インバウンド客実数	215,612人 (韓国人 213,676人 その他 1,936人)	302,700人 (韓国人 300,000人 その他 2,700人)	40%UP

ここからは対馬市の観光政策の概要、取り組み状況について説明いたします。まず、対馬市では観光の振興を図るために観光振興推進計画を策定しており、5年後の目標をこのように設定しております。テーマは「対馬方観光まちづくり産業 ワン、ツー、スリー、フォーup!!!」と設定し、具体的には観光消費額を5年後には10%上げる、宿泊客数を20%、日本人観光客実数を30%、インバウンドを40%上げるという目標を設定しております。この目標を達成するための様々な取り組みを行っておりますが、インバウンド観光客の目標の実数値に

については平成 29 (2017) 年中に目標達成は確実と考えられますので、目標の見直しが必要だと考えております。平年 32 (2020) 年度目標韓国人 30 万人となっておりますけれども、もうすでにこの 9 月末現在で 27 万人ということで、この 30 万人は達成できると考えています。



これは観光施策をまとめたものでございます。まず海外、韓国に向けた営業としましては、対馬釜山事務所を活用した韓国内での対馬の情報発信や交流事業に対する支援を行っております。その他、国際交流員による国際交流事業推進、また韓国内での観光PR展の開催や、国際諮問大使による国際情勢に係る情報提供やアドバイスを頂いたり、姉妹縁組によるイベント、交流を行っております。国内に向けた取り組みといたしましては、福岡事務所の開設による九州北部での観光や物産に関わる情報発信、対馬ファンの獲得をはじめ、対馬市応援団や朝鮮通信使などに縁のある他の自治体との交流のほか、観光物産PR展の開催、朝鮮通信使の啓発PR活動を実施し、対馬への誘客を計っているところでございます。対馬の中での取り組みといたしましては、観光パンフやホームページでの情報発信、他、島内受け入れの充実に関わるものとして、日本語・韓国語で対処できる案内所の設置やガイドの育成、観光案内アプリ、Wi-Fiの整備、その他、国際交流イベントの開催支援等を行っております。



こちらは、韓国に向けた主なものです。歴史、偉人の顕彰、朝鮮通信使の普及、およびユネスコ世界記憶遺産登録……これは10月31日に登録が決定しております。国際交流員による国際交流事業の推進、民間団体が実施するホームステイ等への支援。それから、国際免許の表示、マグネットの作成・配布、これは年々増加する韓国人観光客の方がレンタカーを借りて、やはり個人客の方が最近増えておりますので、レンタカーを運転するにあたっての注意喚起につなげるためにマグネットの作成をしております。次に多言語による観光アプリの作成や観光誘導版 Wi-Fi の整備、それからマナー向上の DVD 作成ということで、いろいろと韓国人観光客が多く来ていただくのですが、その中でやはりマナーの問題が出てきておまして、当然習慣の違いやマナーを理解していただくための DVD を作成して、対馬入港前に船内にて放映していただくように各船舶会社の方に依頼しております。そして比田勝港国際ターミナルの入国審査ブースの増設……平成27(2015)年に審査ブース4ブースから6ブースに増設しておりますけれども、韓国人観光客の急激な増加、出入国の比田勝港への集中により審査待ちの時間が非常に長時間化しているために、平成29(2017)年度に審査ブースを9ブースに増設しております。この他、東アジアと日本をつなぐ博物館建設事業もございます。



経済効果については平成24年度ということで古いデータになるのですが、島内消費額33億円程度ございました。けれども、これを15万人で割ると1人あたり2万2000円くらいになります。現在は日帰りのお客様が増えているということで1人あたり2万円を切って1万円台の後半まで下がってきていると思われまますが、これによって就業者、就業誘発数が524人、雇用誘発者390人ということで、やはり雇用が生まれてきていることを示しております。

観光の現状と課題ということで、先ほど取り組みの中でも説明させていただきましたが、対馬の認知度が低い、観光交流人口を拡大し、経済交流に結びつける、外国人観光客マナーアップ、対馬独特の観光素材の活用・整備、受入態勢の充実、郷土学習の促進が課題となっております。

③ 観光の現状・課題

現状と課題

- 対馬の認知度が低い。
- 観光交流人口を拡大し、経済交流に結びつける。
- 外国人観光客のマナーアップ。
- 自然、歴史など対馬独特の観光素材の活用・整備。
- 島内交通、食、宿泊施設等受入態勢の充実。
- 郷土学習の促進。

その他としましては、対馬高校国際文化交流コースが創設されており、1学級51名の学級があるということと、国際文化交流コースを開設した中で、韓国の大学への進学者が年々いらっしゃるということで、そこでいろいろと韓国語等の勉強をしてもらって対馬の方に戻って韓国人観光客対応、ガイド等をしてもらえればと考えております。

④ その他

対馬高校の国際文化交流コース

- 学級数・生徒数 各学年 6学級(513名) ※平成29年度4月現在
 - 普通課：4学級(361人(全学年))
 - 国際文化交流コース：1学級(51名(全学年))
 - 商業科：1学級(101名(全学年))
- 平成15年に韓国語や韓国の歴史・文化を学ぶ「国際文化交流コース」を開設。
 - 韓国の大学への進学者数
H22(1)、H23(1)、H24(4)、H25(2)、H26(10)、H27(3)、H28(4)
- 韓国情報観光高等学校と姉妹縁組 (H19.11.3)
- ユネスコスクール加盟 (H27.02)

その他、国際交流事業として姉妹縁組、釜山広域市影島区、それから蔚山広域市蔚州郡と姉妹縁組をしております。

以上ですけれども、対馬市の観光政策の紹介とさせていただきます。最後に、本市におきましては韓国人観光客が年々増加傾向にある一方で、国内観光客の誘客には苦戦しているところがございます。このような中で、このボーダーツーリズムに関心が高まりつつあることは、まさに国境の島・対馬にとって大いに期待するところです。対馬から隣国を望み、対馬から隣国へ渡り、対馬と隣国の文化・風土に触れ、今後この対馬が魅力ある交流拠点となるよう観光政策推進をして参りたいと考えております。どうもご清聴ありがとうございました。

④ その他

その他の国際交流事業（姉妹縁組）

○釜山広域市 影島区	○蔚山広域市 蔚州郡
戦前は対馬から日常の買い物に行ったり、多くの人が影島に住むなど、古くから親しい隣人として友誼関係にあり、相互の恩恵を受けて発展。 その古き良き時代の再来を願う姉妹縁組締結	対馬市内に建立された記念碑等の文化遺産の保存・継承、発展させるため友好協力関係を結ぶとともに、双方のイベントに参加するなどの交流を行っている
1986(S61)年5月 姉妹島縁組	2005年1月 文化交流協力意向書
1994(H6)年9月 行政交流協定	2005年11月 友好協力了解書

(田中) ありがとうございます。今までは自治体の方々に地元……国境・境界地域の観光の課題や特徴についてお話いただきました。最後に、この度立ち上がったボーダーツーリズム推進協議会の伊豆芳人様から、よろしく願いいたします。

(伊豆) 最後にボーダーツーリズム推進協議会の活動について、簡単にご報告をさせていただきます。私は伊豆（いず）と申しまして厳原（いずはら）に来ると何かすごく嬉しくなるのです。昔「実は私は対馬の生まれではないですか？」と聞いたのですけれども、「それは違う」とある高名な先生から言われて、違うとは思うのですけれども、もうこれで対馬には10回は遥かに超えているくらい来させていただいております。どうぞよろしく願いします。

私は元々ANA（全日空）グループにおりまして、2013年12月に対馬への初めてのモニターツアーの時に全日空が協力するというので、その時に初めてボーダーツーリズムという言葉を知ることになりました。そういう意味では、ボーダーツーリズムに関しましては全くの初心者でございます。ただ、私は約40年全日空グループで特に旅行商品を作り、主にオフシーズンとか、あるいは閑散期を埋めさせていただくというのが主な仕事でございました。例えば、先ほども出ていましたけれども、オホーツク人のツアーなどを網走に向かってやらせていただいたり、あるいはもう10年前になりますけれども、ここ対馬に万葉集の防人の歌を訪ねるというツアーで約100名のお客様と対馬を訪れまして、ちょうど今日みたいな良い天気でありまして、対馬海峡を見ながらお客様100人と何故か「海ゆかば」を歌ったという思い出がありまして、そのような経験が少しはお役に立てられるのではないかと思います、いろいろなシンポジウムから参加させていただくようになりまして、今に至っております。

このボーダーツーリズム推進協議会に関しましては、本年7月10日に設立総会を開催いたしまして、活動を開始いたしました。設立から約4ヶ月でございますが、自治体の皆様、関連企業の皆様のご支援を頂きまして何とか運営をいたしておりますが、課題もたくさん見え

てきております。やるべきことが山積みということで、その辺も含めて簡単にご案内させていただきたいと思います。

ボーダーツーリズム推進協議会とは、一言で言えば観光で国境・境界地域を活性化させることを目標に民間の企業、団体、自治体の皆様、研究機関が集結した団体でございます。設立の発起人イコール初代の役員ということで今日いらっしゃっております岩下先生、古川先生、花松先生ら、JIBSNの主要メンバーもいらっしゃるのですが、こういった研究者の皆様方からのモニターツアーなどの経験に基づくお声掛けが無ければ、この推進協議会の設立はなかったと言えます。しかしながら、先ほどお話ししましたけれども、ボーダーツーリズム推進協議会というのは、国境・境界地域の魅力を紹介、あるいはPRしまして、モニターツアーではないお客様を集めるための旅行商品を作り、販売するビジネスモデルの流れを世に広めていく組織です。我々は旅行会社ではありませんので自分たちでは旅行商品は作れないのですが、そういった流れを世の中に作っていくということが役割でございます。先生方のご指導、自治体の皆様のご支援なくして、協議会は活動することがまだまだできないのですが、是非、われわれ民間の力を、観光関連産業の民間の力を結集したプラットフォームづくりを今目指しております、活動を進めているところでございます。

1. ボーダーツーリズム推進協議会の概要



まだ4ヶ月でございますので、活動の内容と言えども無いのですが、少しご紹介をいたしますと、7月10日の設立総会と前後いたしまして、専用のwebサイトをオープンさせていただいております。是非一度ご覧になっていただきたいと思うのですけれども、いろいろなボーダーツーリズムに関する情報を紹介させていただいております。それから、ボーダーツーリズムに興味をお持ちの方に会員登録、これ無料なのですが、会員登録をさせていただいて、そういう皆様、一般の方ですね、それからご支援を頂いております正会員の皆様には月1回のペースでボーダーツーリズムに関するメールマガジンを配信しまして、もうすで

に3回……8、9、10月に配信をさせていただいております。先日は、右下にございますけれども、ツーリズムの万博と呼ばれています「ツーリズムエキスポ2017」におきまして、ボーダーツーリズムのセミナーを開催させていただきました。いろいろな、観光業界のみならず幅広い方にこのセミナーに来ていただきまして、例えば先ほどちょっと出ましたが、内閣府の「国境へ行こうプロジェクト」の審議官の方にも来ていただきましたし、あるいはマスコミ関係にもたくさん来ていただきました。特に興味深かったのは「世界ふしぎ発見」というテレビ番組を制作しているディレクターがボーダーツーリズムは素材としてすごく面白いということで、番組になるかどうかはわかりませんが見ていただいたりしていただきました。こんな活動を、今日司会をしていただいている田中さんのブログで紹介をしていただいたり、沖縄タイムスのニュースになったり、観光業界誌はたくさん出していただいております。PR活動は何とかご期待に沿えるような活動が、成果ができていないかと思っております。これはご報告なのですけれども、来年4月からは約1年間、毎日新聞日曜版に「旅コラム」というのがありますけれども、その「旅コラム」を、ボーダーツーリズム推進協議会が担当するというご指名をいただきましたので、先生方などを中心に日曜日にはボーダーの各自治体様のいろいろな取り組みももしかしたらうまくご紹介していけるのではないかと考えていますので、ご期待頂きたいと思っております。

2. ボーダーツーリズム推進協議会の活動内容

PR活動



■設立総会(2017年7月10日)

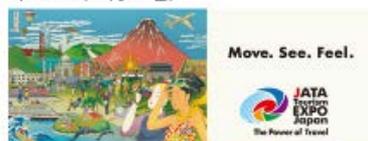


*トラベルビジョン、沖縄タイムスなどの新聞、田中輝美さんのブログなどで活動を紹介していただきました。

■WEBサイトオープン(2017年7月6日)
 URL <https://www.border-tourism.com/>

■メールマガジンスター(2017年7月6日)

■ツーリズムEXPO2017セミナー開催
 (2017年9月22日)



続きまして活動内容でございますけれども、やはりボーダーツーリズムの旅行商品、今は協議会の正会員でございます稚内に本社を置かれております北都観光様の「サハリンツアー」や、あるいは私の元いた会社の ANA セールスが左下にございますけれども「祈りの島 五島」、あるいは事務局でもあるビッグホリデーには自社のウェブサイト「改めて日本の国境の島、境界地域へ」という、専門のページまで作っていただきまして、今活動商品を作っています。ただ、なかなか総客数という数字ではご紹介できないのですが、少しずつでも商品

の整備、拡充をしているところでございます。今のところ、正会員数につきましては、自治体、企業、団体の正会員様が15、個人で応援していただいている正会員様が9名ということで、本当にこの場、高い所からではありますけれども、ご支援ありがとうございます。

2. ボーダーツーリズム推進協議会の活動内容

ツアー紹介



行ってみませんか。日本の隅っこへ

■ビッグホリデー観光WEBサイト
行ってみませんか。日本の国境の島、日本の隅っこへ。



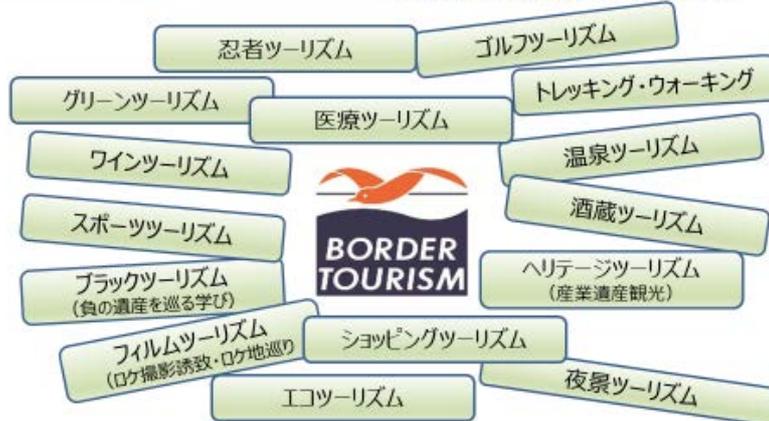
ANAセールス観光WEBサイト



■北都観光 観光サハリンへの旅多数

3. ボーダーツーリズム推進協議会の課題

〇〇ツーリズムとは・・・？
〇〇で観光需要を創造・喚起すること
 乱立する〇〇ツーリズムの中でボーダーツーリズムが質・量ともに確固たる位置を確保するためには・・・。



続きまして、最後になりますけれども、ボーダーツーリズム推進協議会の課題について、私は専門がツーリズムでございますのでご報告をさせていただきます。協議会の課題があるなら解決していかなければならないということがございますけれども、私が言うまでもなく、今や国を挙げて観光立国政策が推進されております。20世紀にはツーリズムで日本を支えるなんて言うのは誰も思っていなかったと思いますが、そういったツーリズムが日本を支える産業として期待をされております。よって様々な「〇〇ツーリズム」というのが生まれてい

まして、私どもと同じような「〇〇ツーリズム協議会」というような組織も、良いか悪いかたくさんできております。まさに言い方は悪いですが、〇〇ツーリズムの乱立状態ということでございます。私の持論なのですが、「〇〇ツーリズム」というのは、「〇〇」の魅力で観光需要を作って、観光需要を喚起していくということが「〇〇ツーリズム」の原則でございますので、「ボーダーツーリズム」というのは、国境・境界地域の魅力でどれだけの観光需要を創造して喚起できるか……まさにこれが勝負でございます。ボーダーツーリズムのクオリティを磨き上げて送客量を増やしていく活動を協議会はしていかななくてはならないということでございます。こういったツーリズムはいっぱいありまして、こんなツーリズムに負けてなるものかという思いでボーダーツーリズムを育てていきますので、是非一緒に頑張らせていただきたいと思っております。

私がマーケティングの基本を言ってもしょうがないのですが、4Pマーケティングで、特に旅行商品には4つのPが大事です。よくご存知とは思いますが、まずProduct（プロダクト）……商品ですね。それから売り場所のPlace（プレイス）、それからPromotion（プロモーション）、それからPrice（プライス）あるいはProfit（プロフィット）です。この4つが揃っていないとなかなか旅行商品は売れないです。

3. ボーダーツーリズム推進協議会の課題



それでボーダーツーリズムの我々の活動で最大の課題というのは商品不足です。今、会員の皆様が各社それぞれツアーを作って我々のウェブサイトで紹介しておりますけれども、共通の規則も無く、ただ境界地域に行けばボーダーツーリズム商品ということになっているのです。そうするとなかなかうまく浸透していかないということで、我々が今からやろうとしていることは、先ほどから着地型の良い商品もいっぱいご紹介いただいているのですが、自治体の皆様、先生方、それから着地の旅行会社、ガイドの皆様の協力を頂いて商品を作る商品規則、JTBをはじめとする旅行会社がボーダーの商品を企画販売する意欲が湧くよ

うな、「ボーダーの商品を作ったら売れるかもしれない」という要はキラーコンテンツを作っていくのがすごく大事で、それさえあれば少し言葉は悪いですが、交付金が無くても続いていくのです。こういう仕組みを是非作っていかなくてはならないと思っています。

そのためには各地域の先ほども出ました物語性、「素通りからストーリーへ」というのがテーマですので、やはり物語を持った着地型の商品を作っていただいて、できればその物語を半日か1日のコースとしてお客様に語るガイド作りが非常に大事でございまして、それをできれば来年の1月以降の新しい活動のポイントとしていきたいと思っています。少なくとも良いので、キラーコンテンツさえ作れば販売場所、つまり、この販売場所は我々のウェブサイトや旅行会社のパンフレットかもしれないですが、旅行会社も非常に商品を作りやすいし、売りやすいのです。

それからプロモーションも「ボーダーに行こう」という抽象的なものではなくてボーダーのこの商品に参加しよう、このガイドに会いに行こうというような具体的なプロモーションのためにも、どちらかというプロダクトアウトで商品ありきになってしまう活動ですが、絶対的にプロダクトが不足していますので、まずプロダクト作りから今日ご参加いただいた自治体の皆様のご支援を頂きながら頑張っていきたいと思っております。偉そうなことを言っておりますけれども、活動資金の確保も大事なことで、その辺の段取りも今一生懸命に行っているところでして、できるだけ、本当は会費などなくやっていきたいという思いはあるのですが、そういうことが実現するようなことを今一生懸命東京の方で取り組んでおりますので、是非協議会は来年2年目に入りますけれども、こういった課題を抱えながらやって参りますので、どうぞよろしく申し上げます。



以上で説明は終わるのですが、先ほどから着地型の商品をいっぱい作られているお

話を自治体の皆様から聞きました。だいたい成功している着地型は、例えば長野県阿智村の「星空観賞」や北海道トマムの「早朝雲海」などが共通しているのは夜にやるか朝にやるかなのです。必ず泊まるのです。昼間にやったら日帰りするのです。結構早朝にやると前の日泊まります。泊まればご飯も食べるということで、自治体の皆様や地域の観光業者の皆様にお金が落ちます。そうすると長続きするというふうになっているのではないかと思いますので、是非、そういった観点も含めて私どもも意見を言わせていただきますので、ちょっと長くなりましたけれども、よろしく願います。入会されていない方がもしいらっしゃいましたら、これからはいろいろな先生方が書いたコラムもメールで飛んでいきますので、是非ボーダーツーリスト会員への登録を、今日を機会にお願いできればと思っておりますので、よろしく願います。長くなりましたが、本当にありがとうございました。



(田中) ありがとうございました。残り時間もわずかということになりまして、皆様、会場から今話をお聞きになっていろいろ聞いてみたいこともおありかと思いますが、それは一番最後の総合討論の時に基本的には会場の皆様のご質問はお受けしますので、是非、このようなことを聞いてみたいということがあればその時に願います。

お話を聞いていて、改めて境界地域というのは、もちろん両方の地域から、要は日本国内から来るといふことと隣の国である国外から来る……そういう両方の可能性を持った地域なのだということを含めて対馬の例を含めて感じたところです。一つ伊豆様の方にお聞きしたいのは、ボーダーツーリズム推進協議会というのは基本的には国内がターゲットということで理解してよろしいでしょうか。

(伊豆) クロスボーダーも含めてです。ですから、明後日皆さんに行っていただく釜山も、それからサハリンも、あるいは八重山から台湾も含めたクロスボーダーです。それから、国境を眺めるというのももちろん。国境から眺めるというのは、向こうから眺めてももちろん良いわけです。釜山まで行ってこちらを眺めるというのも有りです。そのようにあまり限定しないでやっていこうと思っています。



(田中) 参加する方……要はターゲットというのは基本的に日本国内の人ということで良いのでしょうか。

(伊豆) 今のところはそうなのですが、皆さんもヨーロッパへ行けばフランス、ドイツ、EU というのは一緒に周るではないですか。欧米から来ていただく方、つまりインバウンドも、要するに日本に来たら韓国あるいは台湾にも行きますよね。何しろ、日本に一番来るのは政治的にはいろいろある韓国、台湾の人が一番たくさん来ているわけですから、何か、東アジア観光圏みたいなものを……と言うとまた怒られてしまいますが、観光くらいは仲良く一緒になってアジアを周れば割引になるみたいな仕組みができるところまでいければ最高だなと考えている次第です。

(田中) 境界地域から見たらどちらからでも観光客の方が来てくれるということが大事になってくるわけですね。

(伊豆) そうです。日本は全部海なので、何しろ3万 km²の海なので、海岸線は世界6位だということらしいですけれども、その先はみな国境ですよ。アメリカ人は壁を作る人もいますけれども、メキシコまで歯医者さんへ通う人まで含めて出国しているわけです。それからジョホールバルの話は花松先生の方が詳しいかもしれませんね。結構、国境を超えるということが日本では大変ですよ。だから、旅行商品を作るのも大変なわけですけれども、観光くらいは気軽にと考えています。

(田中) ありがとうございます。お話を聞いていて、対馬の場合はお隣の韓国からのインバウンドが力になっていますが、他では逆に日本国内からのインバウンドが課題だということをおっしゃられて、それは端ということもあって認知度が高まらないということもあるのではないかと感じてお聞きしたところですよ。逆に竹富町の場合は、国内の方がメインということですよ。

(大浜) 先ほども少しばかりお話しさせていただきましたけれども、今年間約110万人前後の観光客が町内の方に訪れています。新石垣空港が開港しまして、石垣で計120~130万人の観光客が来るということで、そのうちの100万人余りが竹富町内に足を運んでいるという状況にあります。ただ、これも少し先ほどお話しさせていただきましたけれども、ほとんどが周遊型です。船が大型化し、高速化したものですから、町内には9つの有人島があると申しましたけれども、1日に3島巡りといった商品が今は主流なのです。

(田中) 基本的に日本の方がそういった周遊をしているのですか。



(大浜) そうです。周遊型観光で商品化されたルートに乗って観光に来るという状況です。最近ではインバウンドと言いますか、クルーズ船が石垣の方にけっこう寄港しておりまして、そこからの外国人観光客……主に台湾が多いのですが、本当に少しですけれども出てきている状況です。ただ、やはり日本の方の観光客がそのほとんどを占めているという状況です。

(田中) ちなみに、礼文でロシアの方が来られるということはあるのでしょうか。

(今野) 私どもの方は、最近ではインバウンドの旅行者が増えているという話をさせていただいたのですが、ロシアは古くから私ども接している町なので、礼文の方までロシアの方から旅行者の方が来られるというのはほぼないというか、非常に少ない状況になっております。

(田中) 先ほど渡辺様がお話しされたように、稚内には来られているわけですね。稚内だけを観光して帰られるというのがロシアの方は基本ということでしょうか。

(渡辺) 台湾や韓国といったアジアの方々には基本的には稚内に来ることが目的になっています。ただ、ロシアの方は先ほども言いましたように、札幌もしくは東京に行くということで、要するに稚内は通過地点ですね。確かに何人かは利尻・礼文に行く方はいますけれども、目立っているというわけではないです。

(田中) なるほど、ありがとうございます。先ほど伊豆様がキラーコンテンツが大事だというお話をされていて、通過点から目的地のひとつになるために、やはりキラーコンテンツが必要になってくると強く感じました。もう時間がないので最後になってしまうのですが、伊豆様の方から自治体の方のご報告をお聞きになって、これは結構ヒントになるのではないかなというようなことがあったら是非教えていただきたいと思うのですが。

(伊豆) それほどきちんとしたことを言えるかどうかなのではございますけれども、先日五島市に伺いまして教会群の世界遺産登録というお話を伺いました。その時に今日も来ていただいている久保実部長から「隠れキリシタン」と「潜伏キリシタン」の違いという話も少し聞きました。そういうことを聞いたのは初めてで「違うのですか？」と質問したのですが、そういうことにすごく興味を持っている、好奇心をくすぐられるシニアの方というのはたくさんいらっしゃると思います。シニアだけではないとも思うのですが、旅好きの方はたくさんいらっしゃると思うので、僕はいつも言っているのですが、旅行会社の人を地元と呼

ぶよりも影響力のある人……感性の高い、何か写真を撮っている方、あるいはエッセイ書いている方、本を書いているような方に来ていただいて、それぞれの所に、「こんなのは売れない、東京の人には売れないよな」と思っていることがもしかしたら売れるので、そういう意見交換会をされると良いと思います。

旅行会社の人はどうしても商品を作るという頭で来るので、私も含めてどうしても「形」に作りたがるのですけれども、その前に、先ほどから皆さんもずっとおっしゃっている島を代表する物語をもう一回改めて再チェックするべきです。それで何が良いのかはちょっとわかりませんが、例えば石垣・竹富は最近、海が綺麗なのですが今度は星空も綺麗だということで今すごく有名になってきています。けれども、まだまだたくさん実はすごいのに外に出しそびれているキラークンテンツが各地にいっぱいある気がいたしますので、それをもう一回ちゃんと見られる人と一緒に語り合うということが必要です。旅行会社がダメだと言っておるわけではないのです。旅行会社だけではない方々と意見交換する機会はずごく大事ではないかと最近とみに思っております。答えになっていませんけれども、皆さん素晴らしいコンテンツをお持ちなので、私が言うほどの事ではないのですが。

(田中) 大変ヒントになりました。ありがとうございました。ちょうど時間にもなりましたので、セッション1の方はこれにて終わらせていただきます。ありがとうございました。





セッション2「境界地域の人口問題」

(花松泰倫) セッション2を始めます。私は司会を務めさせていただきます九州大学の花松と申します。よろしくお願いいたします。セッション1のテーマはボーダーツーリズムでしたが、このセッションは「境界地域の人口問題を考える」というテーマになっています。実は私はボーダーツーリズムを研究していきまして、普段はボーダーツーリズムの議論に出ることが多くて、人口問題と言われると門外漢でちょっと困ってしまうのですが、門外漢ながらもうちの大学生、大学院生をいろいろな地域へ連れて行って、人口問題を含めたある種の地域の衰退と活性化や、地域をこれからどうするかといった持続可能性の問題を勉強しているものですから、いろいろ思うところ、感じるころはあります。ただ、司会の私がペラペラ喋ると時間があっという間に無くなってしまいますので、ご登壇者の方々、各自治体の方々の報告に早速移らせていただきたいと思います。

その前に、このセッションの主旨、目的を少し確認させてください。日本は今急激な人口減少、少子高齢化が進んでいて、その中の一つの象徴と言いますか、あるいは最も厳しい地域の一つとして日本の国境・境界地域があるのだらうと思います。そこで、各国境・境界地域における人口対策を議論してみたいと思いますが、特に人口というのはいろいろと広がりのある概念ではありますので、後で少しご説明します。本セッションでは特に各自治体の移住・定住政策についてご発表いただいて情報共有・意見交換を図るのがまず第1の目的になります。その後に時間があるかどうかわかりませんが、できれば国境・境界地域特有の人口問題というのはあるのか無いのかということ、それから国境・境界地域ならではの人口対策、あるいはそれに向けた解決策はあるのか無いのかということも少し探る機会にさせて頂ければと考えております。

では、発表に移らせていただきます。最初に根室市からいらっしゃいました織田敏史さんに根室市の人口対策についてご発表頂きます。よろしくお願いいたします。

(織田敏史) ただ今ご紹介にあずかりました、北海道根室市から参りました織田と申します。私は根室市役所の方で北方領土対策に関するセッションにおりまして、戦後の北方領土問題や北方領土対策に関する仕事をしておりますので、今回は人口問題ということでございますので若干畑が違いますので、どこまでご期待に沿えるかわかりませんが、聞いてきた話や根室市の紹介を中心にお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、根室市というのは北海道の端にありまして、日本の最東端の町と紹介させていただいております。東の方には北方領土が当然あるのですが、北方領土はロシアに実効支配されているという現実から、日本の最東端の町は根室市だということでご紹介をさせていただきます。本日お邪魔している対馬市からだいたい1710kmほど離れています。



地図を見ても分かる通り、根室市は海に囲まれた町でありまして、古くから漁業、水産業を基幹産業として栄えてきた町であります。特に戦後は、北洋漁業が最盛期になった昭和50年頃なのですけれども、根室市の人口は4万5000人を超えていたところがございますけれども、北方領土問題の長期化や相次ぐ国際的な漁業規制の影響を受けまして、一転して人口はどんどん減少し続けております。本（2017）年10月末では約2万6500人程度にまで落ち込んでおりまして、現在も人口減少が続いている状況であります。少し見づらいと思えますけれども、この北方領土の先にある赤い線ですが、これは日本が国境であると主張しているけれどもロシアはこれを認めていないということで、北方領土は現在ロシアが実効支配しているという状況であります。



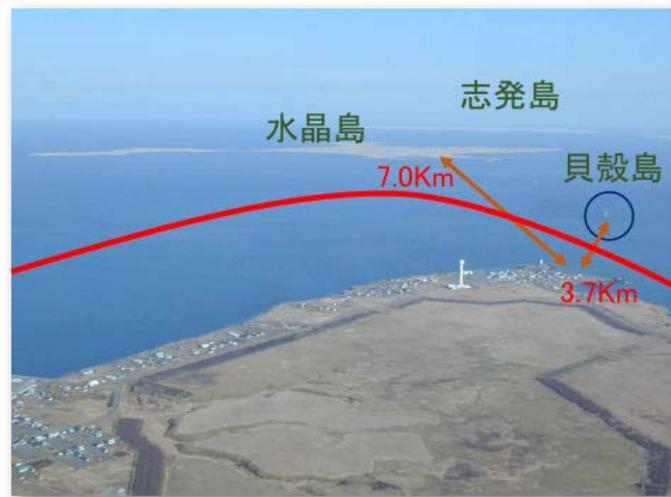
これは私どもの道東地方を大きくしたものですけれども、根室市はここにありまして、北の方に標津町があります。これらが北方領土なのですけれども、ココに黒い線を引かせてもらいました。これが中間ラインということで、ロシアはここが国境だと主張していますけれども、これはまだ決定していないという状況ではありますけれども、実際問題北方領土には



ロシア人が生活しております、我々、標津町も根室市もそうですけれども、この線を越えてこちら側に行くことは基本的には許されていないという状況であります。



これは海上保安庁のホームページから抜いてきた地図で、日本の領海などの海里図というものでありまして、この図の説明でも日本の排他的経済水域は択捉島までであるのだという説明になってはいますが、繰り返しの説明ですけれども赤い線、場所に関しては日本人が自由に入ることのできない日本の排他的経済水域だということでご理解いただければと思います。



先ほどの繰り返しのようになりますが、根室市は漁業水産業の町ということで栄えてきたとお話ししましたがけれども、戦前は北方領土も日本の領土ということで日本人が生活していたので、根室市も北方領土の玄関口ということで4島との定期航路も結ばれていて、人もそうですし、物資も根室港を通過して4島との繋がりがあったというところがございます。人口も当時は4万5000人程度いたのですけれども、現在は2万7000人を割り込んでいるという状況でございます、また地図になりますけれども、これが納沙布岬になります。この見えている島が歯舞群島の水晶島と貝殻島です。貝殻島が一番近くて3.7kmで、納沙布岬から肉眼でも見え

ます。天気が良ければ水晶島も見えるのですけれども、水晶島まで7kmしか離れていません。この線がさっき説明した中間ラインということで、この線を越えて漁業者は魚を獲ることもできませんし、我々も自由に観光という話でこの線を超えることはできないという状況でありまして、この線がなかなか撤廃されないということが鮭の漁業者に対しても大きな打撃を今でも与え続けているということで、この中間ラインがあることによって漁業水産業は現在も停滞を続けていて、これが人口減少の大きな要因の一つになっているのだろうという認識をしております。

根室市人口問題・少子化対策推進本部（H26.10）

人口問題、少子化対策への課題へ早期に対応するため、平成27年度からの5カ年間の基本的な取組方針を示し、迅速な意思決定と着実な事業展開を図る。

○人口問題・少子化対策に関する施策展開方針

【主な重点項目・施策パッケージ】

- ①出生率の向上
- ②子ども・子育て支援
- ③子ども医療等の充実
- ④妊娠・出産の支援
- ⑤仕事と家庭の両立支援
- ⑥若者の地元定着
- ⑦出会い・婚活の支援

根室市では、これらの人口減少問題に対しまして、これまでも様々な対策を講じてきたところでありすけれども、なかなか問題の解決につながることは難しい状況にありました。このため、根室市人口問題・少子化対策推進本部を平成26（2014）年10月に組織しておりまして、人口問題・少子化対策への課題に対応する、新しい縦割りではなく市役所の中で関係するすべての部署を含めた横断的組織……横の連携した組織を立ち上げております。今現在、5カ年間の計画を定めまして、大きく7つのプロジェクトを今動かしている状況であります。詳しくは説明しませんが、出生率の向上、子ども・子育て支援、子ども医療の充実等々書いてあります。基本的には根室市で子供を産んで死ぬまで生活していただきたいということで、出産から高齢化対策までひっくるめた対策をとということで、いろいろな事業を行っております。

先ほど説明しましたように根室市は水産業の町であります。漁業者もどんどん減っており、後継者不足の問題もありますので、役所がこのようなことをやるというのはどうかとも思うのですけれども、婚活やお見合いパーティーといったことも、いろいろな予算を付けて取り組んでいるところでございます。先ほど北方領土の地図を基に説明させていただきましたけれども、根室市は中間ラインというものが存在していることに伴いまして、その先に行くことができない「行き止まりの町」という状況になっています。対馬市のように隣の地域、国である韓国との交流を積極的に進められているということは、いろいろとお聞きをしてわ

かっているのですけれども、できれば我々根室市も北方4島とこういった交流ができれば根室市は「行き止まりの町」から脱却できるだろうし、そうすることで観光客をはじめ、どんどん人が根室市あるいは根室地域1市4町にも人がどんどん来てくれてもっと活性化につながるのではないかと考えております。

最終的な目標は北方領土問題の解決というところに期待をしつつ、やはりそれが実現するまでは、根室地域に日本人観光客を呼び込んで、交流人口の拡大、あるいはそれを定住の方につなげていきたいということで、いろいろと事業展開をしているところでございます。まだまだ課題は多くというか、具体的効果は出ていないのですが、引き続きこういった人口対策について取り組んでいきたいと思っております。以上で根室市からの報告と説明とさせていただきます。

(花松) ありがとうございます。では次に標津町からいらっしゃいました山口将悟様からご報告をお願いします。

(山口将悟) ただ今紹介にあずかりました、標津町の山口でございます。昨日朝8時30分に自宅を出まして釧原のホテルに着いたのが午後8時ということで12時間くらいかかって、3回飛行機に乗ってきました。午前中は烏帽子岳に登って良い景色を見せていただきました。ありがとうございました。

それでは私の方から発表させていただきます。まずは簡単に標津町の紹介をさせていただきます。先ほど根室市の方から説明がありましたので簡単にします。写真を見ていただくと分かると思います。洋上24km先に北方領土の国後島を望むことができる町です。地図で見ますと先ほどもありましたが、札幌市とは直線でも300kmほど離れております。面積は624km²ということで、ほぼ東京23区と同じ面積になります。人口は5302人。地形は写真の通り、知床連山から広がる広大な原野でありまして中央を標津川が流れています。

標津町は

- 北海道の最東端、根室振興局管内の中心部に位置しています。
- 本町を中心にちょうど両腕を出すように、海に向かって左手に日本最後の秘境と言われ、世界遺産である知床半島が、右手には納沙布岬を先端とする根室半島が延びています。
- オホーツク海に面し、洋上わずか24km先には近くて遠い島国後島が、その大きな姿を見せています。



標津町は

- 面積 624.54km²
(東京23区の面積とほぼ同じ)
- 人口 5,302人 (平成29年10月1日現在)
- 世帯数 2,346世帯 (" ")
- 地形
知床連山からオホーツク海に緩やかな傾斜をもって広がる原野で、中央部を標津川が悠々と流れています。



標津町の基幹産業は大きく2つです。1つは水産業で、鮭・ホタテが主な水揚げ魚種です。特に秋鮭はかつて全国一の水揚げを誇っていましたが、近年は漁獲量が極端に減ってしま

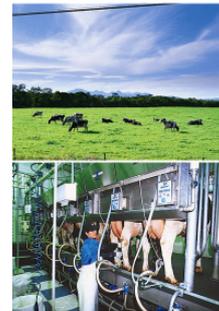
て、昨年は3000トン、約100万尾となっております。かつてはおよそ6倍の1万9000トン、約650万尾の水揚げでした。水産加工品はイクラが全国ブランドとなっておりますし、近年は鯉節ならぬ鮭節が人気を集めております。

標津町の基幹産業(水産業)



- サケ・ホタテが主な魚種
- 秋サケの水揚げは昭和60年から15回日本一を記録
- 現在は漁獲量が極端に減少
- 平成28年度は約3,000トン(約100万尾)
- かつてはこの6倍、19,000トン(約650万尾)
- イクラや鮭製品などを製造する水産加工業もさかん

標津町の基幹産業(酪農業)



- 広大で肥沃な大地を活用して、人口の4倍の乳牛、約2万頭を飼育する国内有数の酪農地帯
- 生乳生産量は、平成28年度で10万8千トン(1リットルの牛乳パックで1億本)
- 近年は、家畜糞尿を最大限に活用した資源循環型酪農(有機低コスト酪農)を目標として、クリーンで低コストの酪農を推進しています。

それから、もう1つの基幹産業は酪農です。人口の4倍、約2万頭の乳牛を飼育する国内でも有数の酪農地帯で、平成28年度は年間生乳を10万8000トン、10の牛乳パックで1億本くらい生産をしております。また、体験型の観光も盛んで、北方領土学習を含めて、修学旅行生が多く訪れています。以上で、簡単ですが標津町の紹介を終わらせていただきます。

それでは本題に入ります。標津町の取り組みを紹介します。お手元に政策パッケージという少しまとめた資料を配らせていただいておりますので、それと併せてご覧いただきたいのですが、「人口減少時代に挑戦する政策パッケージ」と言っておりますけれども、簡単に言うと町民のライフサイクルを応援する政策をパッケージ化して町民の皆様に提供することによって定住移住を促進しようというものです。

人口減少時代に挑戦する政策パッケージ ～小さな町のキラリと光る挑戦～

- 町民のライフサイクル(出会い、結婚、妊娠、出産、子育て…高齢者対策)を応援する政策を、パッケージにして町民の皆さんに提供する
- これにより定住・移住を推進する

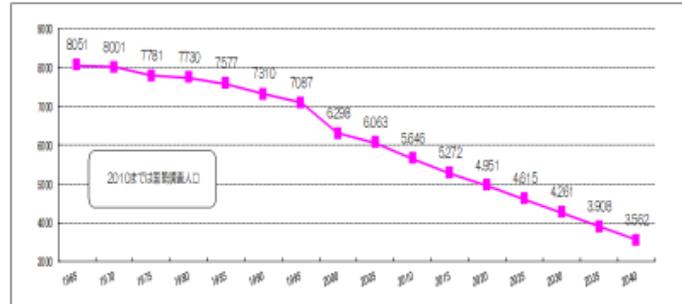
何故このような取り組みをするに至ったかと言いますと、もちろん人口減少で、全国的な問題なのですが、このグラフの通り標津町にとって衝撃的な内容の報道がなされました。それは平成25(2013)年3月に厚生労働省の国立社会保障人口問題研究所が発表した標

津町の推定人口ですけれども、2010年度 5600 人の人口が 2040 年の 30 年後には 3562 人になるということで、本当に危機感を持ちました。

政策パッケージ策定の経緯

(1) 推計人口の報道 【平成25年3月】

■標準町の人口の推移と推計



- ・厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所（社人研）が平成25（2013）年3月27日公表した推計人口（翌日、3月28日に大きく報道されたもの）
- ・約30年後の人口が、5,600人から3,500人になるという内容
- ・標準町にとっては、衝撃的な内容

8

それで何とか対策を打たなければならないということで、翌4月に人口減少対策を検討する庁内連絡会議を実施しております。副町長、教育長を含む関係課長で10月まで議論を重ねまして、これから説明します政策パッケージとしてまとめています。平成26（2014）年度（一部は平成25（2013）年度）からスタートしまして、当初は20事業で始まりましたが、現在は30事業で展開しております。ちなみに平成29（2017）年度の事業費は5億1000万円ですが、これは認定子ども園の建設費が入っておりますので、それを抜くと2億5000万円ほどの事業費となります。

政策パッケージ策定の経緯

(2) 人口減少対策の検討 【平成25年4～10月】

■連携会議の設置

- ・副町長、教育長を含む、関係課長による連携会議を設置

(3) 政策パッケージの展開

- ・平成26年度（一部は平成25年度）にスタート
- ・平成26年度は20事業、平成27年度は28事業、平成28・29年度は30事業で展開

■ライフサイクルにあわせた支援(イメージ)



平成29年度事業費 5億1,000万円
(ハード事業除く 2億5,000万円)

9

それでは具体的な政策について説明をいたします。先ほどのように、詳しくはお手元の冊子にまとめております。30事業は大きく3つのカテゴリーに分かれております。まず「結婚・子宝・子育て政策」ということで、政策パッケージの中でも一番手厚い事業で、少なくとも北海道内では一番の支援ではないかと考えております。①は結婚活動の応援でありまして、専門の職員などを配置して、出会いの場の提供などを行っております。②は安心出産の支援です。実は標津町には産婦人科がございません。このため妊婦さんには事前に登録を頂いて緊急時は速やかに他町の産婦人科に搬送できる体制をとっておりますし、吹雪で通行止めになることもあります。そういう場合は「早い時間から病院に行ってください。その交通費と宿代は出します。」という支援をしています。それから③は出産祝い金です。第1子5万円、第2子10万円、第3子以降は50万円を給付しております。また④は紙おむつ代の助成金ということで、2歳を迎えるまでの購入費12万円を給付しています。次に⑤⑥は認定こども園の関係です。平成28(2016)年まで町立で保育園と幼稚園がそれぞれ2園あったのですが、この4月から幼保連携型の認定こども園として統合しまして2つの園を開園しております。3歳以上は給食費も含めて完全無料です。それから、3歳未満も国の基準の1/4の使用料に減額をしております。その他、⑦は学習教材費の助成、⑧高校卒業までの医療費の無料化、⑨地元高校での学びの支援等も実施しております。

人口減少時代に挑戦する政策パッケージ 2017

政策パッケージ構成事業の内容 ①

結婚・子宝・子育ての政策
【若い世代の結婚や出産等の理想・希望を叶える】

まちお1地区に1見立て
大助成対象を拡大

<p>①結婚活動の応援強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門職員の配置、関係団体との連携強化による出会いの場の提供ほか <p>②安心出産の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妊婦情報の共有による緊急時の緊急体制確保 ・リスクの高い妊婦の事前宿泊・交通費の助成 <p>③出産祝い金の給付</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1子5万円、第2子10万円、第3子以降50万円を給付 <p>④乳幼児紙おむつ購入助成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町内出生児を対象に、2歳を迎えるまでの紙おむつ購入費12万円(月5,000円×24ヶ月)を給付 <p>⑤幼保連携型認定こども園の開設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標津・川北地区に保育園や幼稚園などの機能を集約したこども園を開設し、より充実した子育て支援を推進 	<p>⑥こども園の無料化または負担軽減</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳以上の使用料や給食費等は、無料 ・3歳未満の使用料は、国基準の1/4に減額 <p>⑦小、中学生の学習教材費の助成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料や実験材料等に係る保護者負担分を助成 ・小学生5,800円/年、中学生11,200円/年 <p>⑧こども医療費助成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生までの医療費無料化(平26開始) ・平27から対象を高校生までに拡大 <p>⑨標津高校での学びの支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書・制服代相当5万円支給、町内外バス通学費全額助成、国公立大学入学金相当30万円支給、医療費無料の町外通学者対象、修学旅行費の支援ほか
--	---

10

次に大きな2つ目、「定住・移住・暮らしの政策」です。⑩住宅取得助成として、新築で最高300万円、中古住宅で最高100万円の助成を行っております。また、⑪住宅リフォーム助成として、最高50万円を助成しております。さらに⑫住まい・暮らしの資源の利活用で、空き家や遊休施設を住宅施設として再開発する事業も行っております。それから高齢者の支援としては、⑬安心サポートセンターの設置をしております。高齢者、障害者を含めて住み慣れた地域で安心して暮らしていけるよう町民サポーターがボランティアで支援していくシス

テムを作っておりまして、多くの町民の方々がサポーターとして登録していただいて、支援を頂いているところです。それから⑭高齢者の施設入所の負担金として、家賃等を助成。それから⑯除雪支援等を行っておりますし、その他⑰若者の健康推進、⑱医療技術者確保のための奨学金制度創設、⑳災害防災対策、㉑未来のリーダーづくりの取り組みを行っています。

人口減少時代に挑戦する政策パッケージ 2017

政策パッケージ構成事業の内容 ②

定住・移住・暮らしの政策
【このまちで暮らしたい、暮らし続けたい希望を叶える】

<p>⑪住宅取得助成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅新築 最高300万円 ・中古取得 最高100万円 	<p>⑯高齢者等の除雪支援充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域コミュニティを核とした支援の向上
<p>⑫住宅リフォーム助成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最高50万円を助成 ・町内業者の施工に限定 	<p>⑰若者の健康・保健指導の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・16～39歳を対象に生活習慣病予防を目的とした健診を実施。自己負担1,500円（約8割軽減）
<p>⑬住まい・暮らしの資源の利活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空き家や遊休施設等の資源を利活用 ・望ヶ丘ハイムの平29入居開始 	<p>⑱医療技術者等の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町で勤務する医療技術者を養成・確保するため、修学資金及び就業支援金の繰付制度を創設
<p>⑭あんしんサポートセンターによる地域での支え合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者等が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、サポーター（町民ボランティア）が支援 	<p>⑲避難道路・防雪槽の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難経路の整備 ・川北西3号道路防雪槽
<p>⑮高齢者福祉施設利用者の負担軽減</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サ高住等の平28供用開始 ・高齢者施設の家賃等の一部を助成 	<p>㉑新・地域防災計画の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たな計画に基づいた防災・減災対策を実施
<p>⑯介護予防事業の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者が生きがいをもって暮らす地域づくりを図るため、「いきいきお歳体健」等を実践 	<p>㉒ふるさとの未来を担うリーダーづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しべつ未来塾でのリーダー育成及び若者と町内外関係団体との連携・ネットワークづくり

11

最後に大きな3つ目、「産業・経済の政策」です。㉒新規就農者の受入れ強化、㉓農業協業法人の支援、㉔水産資源の対策強化、㉕標津ブランドづくり等、試験的な支援政策によって基幹産業の振興を図っております。その他、㉖環境保全対策、㉗起業支援なども行っております。

人口減少時代に挑戦する政策パッケージ 2017

政策パッケージ構成事業の内容 ③

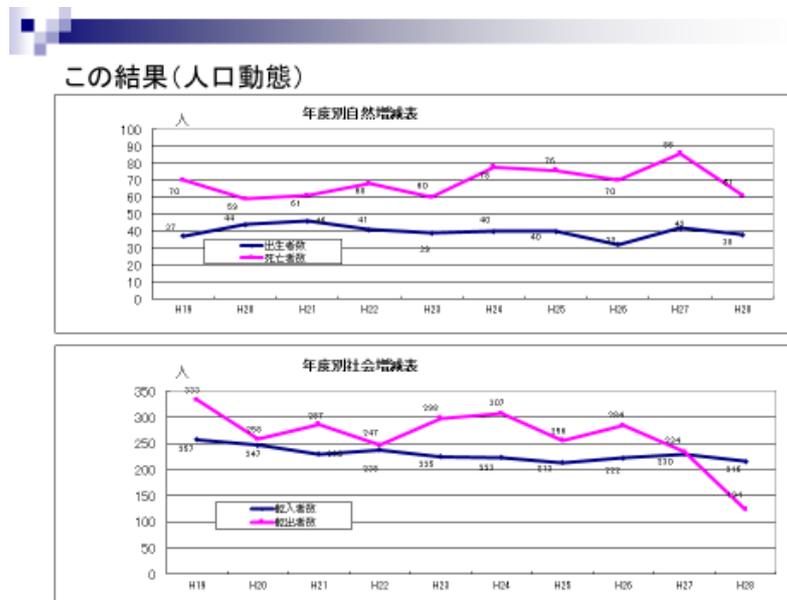
産業・経済の政策
【生産基盤を高め、地域資源を活かし、人の流れを変える】

<p>㉒新しい農業経営者づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就農予定者研修支援 ・就農体験者受入れ強化 	<p>㉗起業支援補助拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補助金上限 250～300万円
<p>㉓農業協業法人の支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TMRセンターの設置を支援 ・権数戸による農業法人の設立を支援 	<p>㉘再生可能エネルギーの活用等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーの有効活用 ・誘致財源の有効活用
<p>㉔水産資源対策の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・沿岸餌料等環境調査の実施 ・ホタテ生産力向上対策事業の推進 ・アマコ種苗放流事業の推進 	<p>㉙交流人口の拡大による地域の活性化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みどころ30選の魅力発信 ・体験交流の実践による地域経済の活性化
<p>㉕標津ブランドづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランドづくり事業の推進 ・製品開発、販売促進の強化 	<p>㉚情報発信の強化等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まちの情報発信力を強化 ・地域おこし協力隊による地域活力の創出
<p>㉖標津川の環境保全等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標津川の環境保全対策の強化 ・標津川の水深確保の要請 	

12

以上、簡単に説明しましたがけれど、新規に取り組んだ事業、それから、拡充した事業、既存の事業を政策に位置づけ、それらをまとめて政策パッケージにしておりまして、今後も検証を行いながら事業を進めていきたいと思っております。

次にいきます。政策効果はまだまだこれからでございます。ただひとつだけ人口動態の点から申しますと、上のグラフは自然増減で、出生者数よりも死亡者数のほうが多くて、自然増減では減少となっております。下は、社会増減です。政策パッケージを開始した平成26(2014)年度からは徐々に改善しておりまして、平成28(2016)年度はついに、ここ50年の増減では初めて増加に転じました。転入者は大体横ばいですので、転出者に歯止めがかかったと分析をしております。



また、今後の課題は色々ございますが、このような支援を継続する一方、基幹産業の漁業等の振興発展を図ることが重要でありまして、関連産業を含めて相当の雇用の場になりますので、今後とも力を入れていきたいと考えております。



最後に、人口減少対策とは関係ないのですが、境界地域にある標津町としての夢をひとこ



と申し上げます。この写真は、北方四島からビザなし交流で訪れたロシアの子どもたちと日本の子どもたちが交流の際に共同で作成した工作です。この一部を拡大しますと、標津町と国後島に橋を掛けるという子供たちの夢が描かれております。下の写真は合成写真なのですが、将来、国後島と自由に行き来できたらなど、これが、標津町の夢でございます。

以上で、簡単ではございますが、説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(花松) ありがとうございました。これまでのお二方は北からの報告でしたので、今度は南から、与那国町総務財政課の小嶺長典さんから報告をお願いします。

(小嶺長典) こんにちは。私は与那国島からきました。総務財政課には最近異動になりましたので、よろしくお願いたします。

町の人口ビジョンについて、お話していきたいと思います。まず、位置図ですが、与那国は、皆さんご承知のとおり、一番西の端ということで、石垣まで 127km、台湾の蘇澳鎮という一番近いところまで 111km であります。その間の中間線に国境が引かれておりまして、この国境線によって与那国の人口問題にも大きな要因（増減）が関わっているということになります。



それでは、大雑把に人口の推移なのですが、戦前は 4,000 人台の人口でした。これが昭和 20 (1945) 年……終戦の年ですが、昭和 21 (1946) 年から昭和 24 (1950) 年の混乱期に一気に 12,000 人以上になりました。それは国境線が引かれることによって、台湾との実貿易の中継



地点となったということで、ここに人も物もお金も集まってきて、それでいろいろな意味をもった人が集まって、それで12,000人以上になって昭和22年に町に昇格したということがあります。そのあと、昭和25(1950)年に国境封鎖があり、その頃から取締りが大変厳しくなり、駐留米軍が島にも上陸してそこからさらに厳しくなり、それ以来人口がどんどん減少していくわけですね。その後は実貿易や中継貿易ができなくなって、平成26(2014)年には1467名そこまで減ったわけです。そして、そこからまた上がってきます。平成27(2015)年に自衛隊の沿岸監視隊の駐屯地ができまして、先月で1708名まで回復しております。

和暦	西暦	人口	備考
大正9年	1920	3,802	
大正14年	1925	4,174	
昭和5年	1930	4,462	
昭和10年	1935	4,609	
昭和15年	1940	4,580	
昭和20年	1945	5,561	終戦
昭和21年~24年		12,000以上	密貿易の時代 22年町昇格
昭和25年	1950	6,158	国境封鎖開始
昭和30年	1955	5,259	
昭和35年	1960	4,701	
昭和40年	1965	3,671	
昭和45年	1970	2,913	復帰2年前
昭和50年	1975	2,153	
昭和55年	1980	2,101	
昭和60年	1985	1,999	
平成2年	1990	1,890	
平成7年	1995	1,797	
平成12年	2000	1,831	
平成17年	2005	1,723	
平成22年	2010	1,614	
平成25年	2013	1,551	
平成26年	2014	1,467	
平成27年	2015	1,646	陸自駐屯開始
平成28年	2016	1,693	
平成29年10月末現在	2017	1,708	

1. 与那国町の人口の現状分析

1) 三区分別人口の推移

○2010年には、年少人口と老年人口が入れ替わり、年少高齢化の進行が伺える。

○生産年齢人口は1980年から2015年までで300人微減し、2015年度には1,000人を切り、950人となっています。



出典:総務省「国勢調査」

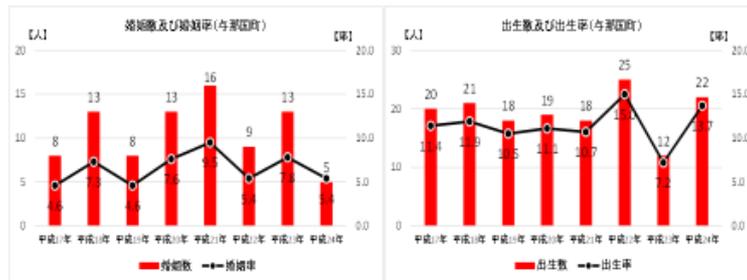
さらに分析しましたところ、人口が減っていった赤いラインが生産年齢(16歳~65歳)人口です。次に青のラインが年少人口ということで15歳以下です。緑のラインが老年人口(65

歳以上)です。もちろん、全体的に減っていくわけですが、2010年には年少人口と高齢人口とが逆転しました。このようにして、人口構造が変化していったわけです。これの要因としては2010年～2015年の間にどの世代が転入転出していったかという、10代から20代前半までが、転出超過になっています。その他は概ね同じくらいになっています。やはり、若い世代がどんどん出て行く、中学卒業するとどんどん出て行くという、そこに家族も一緒に出て行くという問題がありまして、島の人口はどんどん減少構造に入ってしまったということになります。

3) 婚姻率と出生率の推移

○与那国町の婚姻率は、増減が大きくなっています。この婚姻率は、全国(4カ年平均5.4)、沖縄県(4カ年平均6.3)に比べて与那国町は7.0と高くなっていますが、総人口が少ないために、その年の婚姻数により大きく変化します。

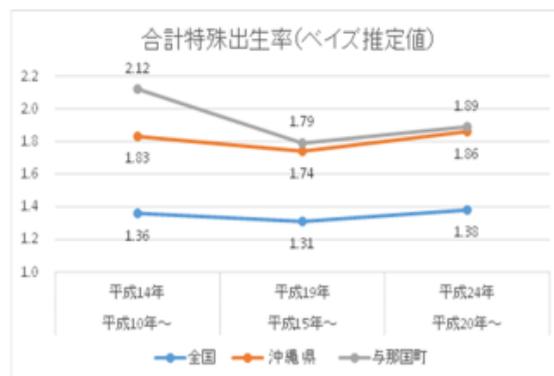
○出生数及び出生率は、平成23年度は出生率7.2と極端に低下したものの、その他の年は全国の8.0台を上回る10.0以上を維持しています。



出典: 沖縄県統計年鑑

4) 合計特殊出生率

○合計特殊出生率をみると、全国的にも高い沖縄県の値と同等の値を維持しています。



出典: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」に基づき作成

これは婚姻率ですが、与那国町の婚姻率は、全国で年間平均 5.4、沖縄県が 6.3、与那国町が 7 ということで高いわけです。出生率も図にありますように平均して高い出生率を保持

います。元もとのパイが小さいために一人二人で出生率も変動するわけですが、与那国町の自然動態の増減はそれなりに高いという結果になります。合計特出生率……これは女性の方が一生のうちに何人の子供を生むかということですが、全国で見ても、沖縄では高いわけですが与那国町はそれを上回るということで、自然増減としてみれば与那国町は頑張っています。先ほど申しました10代から高校がなくて出て行くというところで、その要因により人口が減ってくるということがあります。

これが平成22(2010)年からの図ですけれども、若干減少していつているわけです。さっき申しましたとおり、ここにつながっています。そこに自衛隊の駐屯が開始されたということがございます。この緑と紫の棒グラフは、死亡と出生の関係で大体同じような感じで推移していて、転入転出、社会動態といいますが、平成22年は転入のほうが多いですが、総じてそれまでは転出のほうが多かったわけです。平成27(2015)年3月に駐屯地ができて、そこで一気に転入が増えているということになり、そこから落ち着いてくるということになります。これはちなみに今(2017)年10月の時点でありまして、これから一気に増えていくかなと思っております。

5) 人口動態の推移

○H23年度からH26年の4年間では転出者が転入者をやや上回っています。

H27年に自衛隊駐屯開始(H28.3)により転入・転出数が逆転しました。

○出生と死亡数の自然動態はほぼ同様に推移しています。



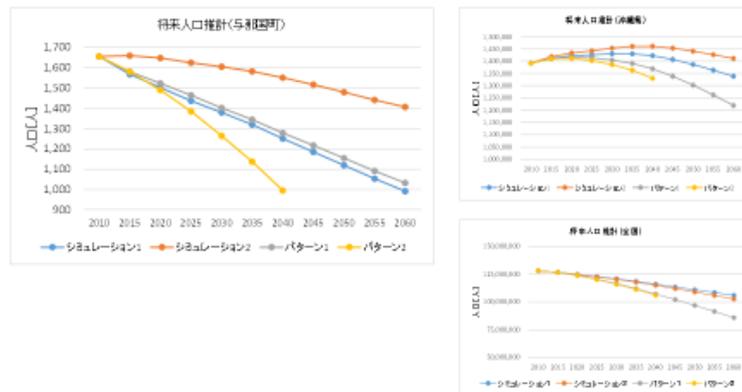
年	3月末人口	出生数	死亡数	転入数	転出数
平成22年度	1,581	24	15	151	135
平成23年度	1,534	14	18	129	172
平成24年度	1,527	24	20	158	169
平成25年度	1,551	15	13	120	140
平成26年度	1,457	16	18	130	150
平成27年度	1,646	11	21	362	163
平成28年度	1,693	19	21	202	153
H29年10月	1,708	17	8	98	92

それから、今の状態から見て対策を立てなかった場合に与那国町の将来人口がどうなっていくかということですが、全国も少しずつ減少しているのです。沖縄の場合は平成 35 (2023) 年がピークで減少していくわけですが、与那国町はずっと減少していつにいうこととございます。これが年齢区分別ですが、先ほど申しました生産年齢人口、年少期、高齢人口など、今までの流れの中で、そのまま高齢人口は増えて年少人口は減っていくということとあります。

2. 与那国町の現状から見た将来予測人口

1) 与那国町の将来人口

○人口推計結果では、沖縄県では2025年ピークであるのに対し、与那国町では既に減少局面に入っている



それで今度は、与那国町の今後目指すべき将来の人口ですが、条件として結婚、出産、子育ての支援の充実をすることで、出生率を上昇させていくということとあります。ちなみに、実際に与那国町には産婦人科がなく、小さな診療所しかなく、その出産のたびに八重山病院（石垣島）に行きます。その渡航費用ということで、妊産婦の健診や出産までの経費をいれますと、11回の飛行機代を出したり、その宿泊代を出したりという助成をしております。

次に学校に関しては、小学生・中学生完全無料……所得に関係なく給食費は無料にしています。また町営で塾を行っておりましてテキスト代以外は取っていません。町営塾ではオンラインで ICT を利用しまして現役の東大生等を講師として遠隔で授業をしています。これが5年になりますが、結構成果をあげておりまして、全国学力テスト等で県内でも上位の状況にあります。そういう子育てをはじめいろいろと具体的に取り組んでいます。それから社会増減のところですが、中学卒業後にほとんどが出て行きますので、そういう子供たちが将来戻ってくるという環境作りをしなければならないということです。そこを考慮しまして、今から具体的に何をやるかという話しですが、与那国の人口を2060年には1500人くらいを維持したいと考えております。これが全国調査のパターンで計算したシミュレーションでいくと多くても1400人、少ないと1000人を割るような状況が来るだろうということとありますが、様々な政策を講じてなんとか1500人は維持していこうということを考えています。それを元

に今後どのようにしていくかということ、この負のスパイラルから好循環の確立のほうへの逆転をやっつけていかないといけないと考えております。

最後ですが、いろいろ示しておりますが、時間が無く具体的な話はできませんが、雇用・居住の安定・くらし・子育て等を様々な政策を講じて、様々な創出をしていくことで人口の問題を解消していかないといけないと考えております。以上、ざっと、でございますが、与那国町の人口ビジョンの考え方でございます。ご清聴ありがとうございました。

- ①与那国町らしい、小さな仕事と小さな雇用を創出する
- ②与那国町への新しいひとの流れに対応できる環境づくり
- ③若い世代が夢を持ち、人生の希望をかなえることができる島をつくる
- ④人口減少に歯止めをかけ、島のくらしを守るとともに、地理的特性を活かして地域と地域を連携する

的を絞った総合戦略を行います。



(花松) ありがとうございました。では、次は、中京大学の古川先生にご発表いただきます。古川先生には、今日こちらに来られなかった東京都小笠原村と島根県隠岐の島町からのご報告を代理でご発表いただきます。少しレギュラーな形ですが、よろしくお願いいたします。

(古川) ご紹介ありがとうございました。中京大の古川です。先ほど、ご紹介がありまし

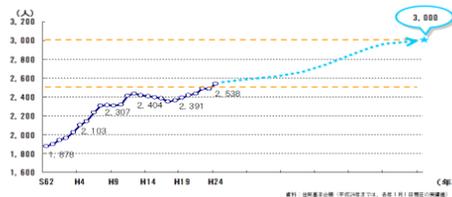
たように、今回、JIBSN に加盟している自治体は全部で 10 あるわけですが、今回、参加が叶わなかった小笠原村と隠岐の島町について説明させていただきます。

小笠原村の人口動向は、少子高齢化が進み、人口減少にあるという話がありますが、小笠原村の場合は、ご覧のとおり、微増減を繰り返しながら少しずつ増加して、将来は 2020 年ころまで増加しその後減少に転じていく予測となっております。小笠原村としましては、村の目標人口としては 3000 人、これが上限です。東京から 1000km 離れている島ですので、あまりたくさんいると、水はどうするんだということをはじめいろいろと問題になってきますので、3000 人を上限にしているようです。

1. 小笠原村の人口動向

(2) 村の目標人口

- 【長期目標】 3,000人 (=上限人口)
- 【短期目標】 現在の『ゆるやかな人口増加』を維持する



1. 小笠原村の人口動向

(1) 人口の推移・現状・予測

- ＜推移＞ ①昭和43年(返還)～平成7年 ⇒ 増加の一途
- ②平成7年～現在 ⇒ 増減しながら増加
- ＜現在＞ 微増減を繰り返し、少しずつ増加
- ＜将来＞ 2020年頃まで増加し、その後、減少に転じる予測

【最近5年間の人口動向】

年	総人口	出生数	合計特殊出生率	死亡数	高齢者数	高齢化率
平成25年	2,593人	26人	1.36	12人	315人	12.1%
平成26年	2,584人	34人	1.82	10人	337人	13.0%
平成27年	2,553人	38人	2.07	7人	354人	13.9%
平成28年	2,587人	22人	---	8人	377人	14.6%
平成29年	2,594人	---	---	---	396人	15.3%

* 総人口・高齢者数・高齢化率は各年1月1日現在の数字、その他は各暦年の数字

そのため、ここにもありますように短期目標としての緩やかな人口増加を維持するため、外部からの人口流入施策はあえてとらず、Uターン・Iターン等の受入れは流れに任せるといふ施策の方向性で進めておられます。

2. 人口増加と定住に対する施策の方向性

(1) 人口増加に対する施策の方向性

- ◎短期目標『ゆるやかな人口増加を維持』するため

- 【施策の方向性】 ①転出の抑制
- ②出生数の増加を支える

* 外部からの人口流入施策はあえて取らない (Iターン、Uターンなど受入れは流れに任せる)

このことで、ゆるやかに人口が増加することを維持する。併せて、増えた居住者に長く住んで(定住)いただく努力をする。

2. 人口増加と定住に対する施策の方向性

(2) 定住に対する施策の背景

【長く住んでいただくための前提】

- ◎島において、都市部のような利便性・機能性を、自己完結的に、整備することは無理

- ①解消できない不便性などを、離島に住む者の宿命として負っていただく(理解していただく)必要あり
- ②行政は、島で住むことのマイナス要因を解消していく必要あり

【小笠原村での定住に係るマイナス要因】

- ①隣の町(東京)まで、24時間を要する距離と交通アクセス ⇒ 島内で完結できず隣の町で完結するための移動に、他地域と比較して、より多くの「時間」と「お金」が必要
- ②ライフサイクルにおける将来不安 ⇒ ライフサイクル、特に老後における病氣・介護の島内体制への不安から、元氣なうちに島から出てしまう(転出)

2. 人口増加と定住に対する施策の方向性

(3) 定住に対する施策の方向性

【人口増加の方向性】

- ◎転出の抑制
- ◎出生数の増加を支える

【定住のための背景】

- ◎島で住むことのマイナス要因の解消
- 隣の町までの距離とアクセス (時間とお金)
- 将来不安

＜定住につなげるために＞

- 【社会基盤の整備】 ①高速交通アクセスの整備
- 【社会体制の整備】 ①医療体制の充実
 - ・播磨医療の質の向上
 - ・専門医療の提供機会の充実
 - ・妊婦支援の充実
- ②介護体制の充実
 - ・介護サービスの質・量の向上
 - ・高齢者入所施設の島内整備
- 【マイナス要因の補完】 ①隣の町への移動に対する財政支援
 - ・出産支援金
 - ・内地への通院・治療の船賃補助

現状に対する施策として、どのようなことを考えられているかということ、長く住んでいただくため、いただきたいというようなことで、その前提としてはこちらに書かれているとおり、島において都市部のように利便性機能性を自己完結的に整備することは難しいので、不便性等、離島に住むものの宿命として負っていただく必要とか、あるいは行政は島で住むことのマイナス要因を解消していく必要があるということで、施策を進められています。ちなみに、そのマイナス要因としては、隣の町まで24時間を有する距離と交通アクセス、すなわち空港がなく船でしか移動ができないということです。それから ライフサイクルにおける将来不安として、特に老後における病気、介護等の島内体勢の不安から、元気なうちに島を出てしまうというマイナス要因があるようです。そこで、どのようなことをしているか、転出の抑制あるいは、出生数の増加を支える、定住のための背景として、そのマイナス要因の解消をして、こちらにかかれていますような社会基盤の整備、社会体制の整備、それからマイナス要因の補完、という3つの大きな項目の施策を進めておられます。

もう少しそれらについて詳しく言うと、まず社会基盤、社会体制の整備の施策としては交通路の開設……ただこれはまだ進行中です。次に医療体制については妊婦支援の充実ということで、こちらにも書かれていますように、産婦人科医による妊婦健診の回数増、出産病院の紹介、出産支援金の支給、助産師外来の実施、小児科専門診療の実施等を行っておられます。介護体制としては有料老人ホームを既に整備されています。財政的な支援に対する施策としては入院通院のための高齢者運賃割引制度、医療サービス、出産支援金等、ここに書かれているような施策が行われているということで、先ほど来、申しあげましたように、ゆるやかな人口増加を維持するという施策を行っているのが小笠原村ということで、ご紹介させていただきました。

3. 人口・定住に資する施策

(1) 社会基盤・社会体制の整備に係る施策

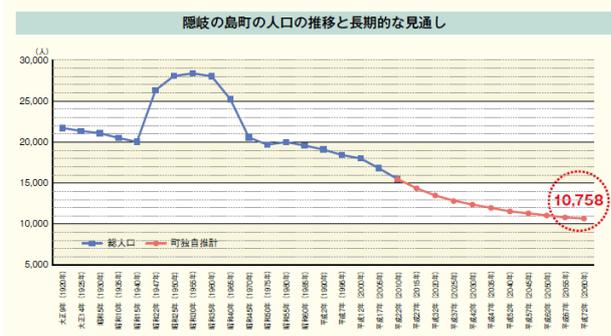
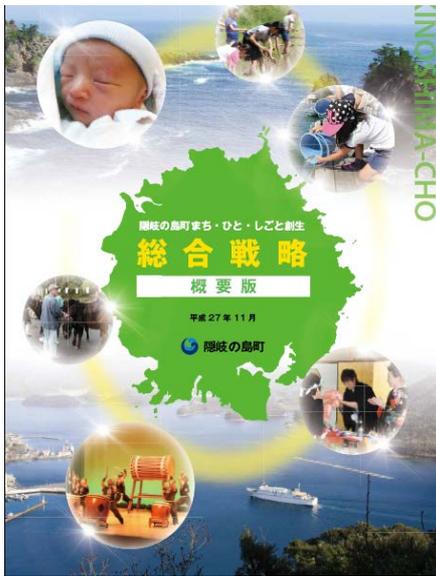
	事業名	現状
高速交通アクセス	航空路の開設	進行中
医療体制	妊婦支援の充実	
	①産婦人科医による妊婦健診の回数増	①内地から産科医を招聘 2か月に1回(年6回)実施
	②出産病院の紹介	②3か月滞在可能な部屋付きの提携病院を紹介
	③出産支援金の支給(後述)	③医療保険から支給される出産費とは別に村が支給
	④助産師外来の実施 ⑤小児科専門診療の実施	④随時、相談に対応 ⑤年2回実施
介護体制	高齢者の入所施設の整備	
	①有料老人ホームの整備	平成23年3月開設済み

3. 人口・定住に資する施策

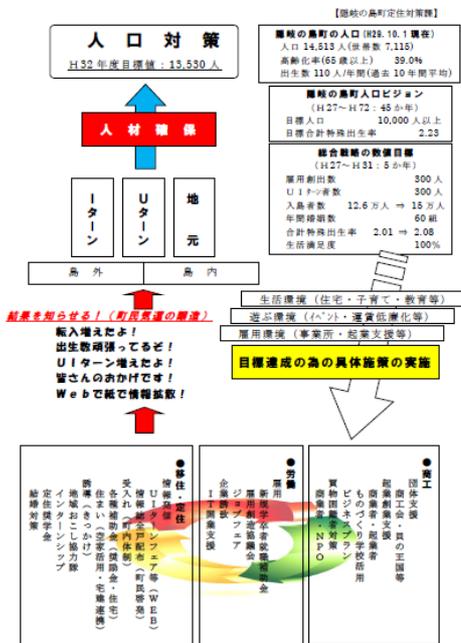
(2) 財政的な支援に係る施策

	事業名
医療	①入院・通院のための高齢者運賃割引制度 【対象者】 入院・治療のため内地医療機関を受診する75歳以上の村民 【支援内容】 定期船の往復運賃を50%引きとする。
	②医療支援サービス 【対象者】 慢性疾患を有し、その治療のため内地医療機関を受診する村民 【支援内容】 慢性疾患の治療のため、年2回以上、内地医療機関を受診した場合における、2回目以降(最大5回分)の定期船の往復運賃について50%引きとする。
出産	①出産支援金 【対象者】 島内出産ができないため、内地で出産する妊婦全員 【支援内容】 1回 40万円

次の隠岐の島町ですが、隠岐の島町も先ほど与那国町の小嶺さんから発表があった総合戦略(隠岐の島町まち・ひと・しごと創生総合戦略)を立てておられます。これを全て説明すると時間が足りませんので、大まかなところ現状としてどうなっているのかということだけを説明しますと、ここにもありますように、このままどんどん減少していくという過疎自治体である認識は隠岐の島町ももたれているということです(平成72(2060)年に10758人と予測)。



隠岐の島町はそれに対して、どのような施策を行っているかという、細かいところを言っていると時間が足りませんので、概略をご紹介しますと、こちらにありますように、人口ビジョン、総合戦略の数値目標を出しまして、目標達成のための具体的な施策の実施として商工・労働・移住・定住が書かれていますけれども、平成32年度13530人を目指して、様々な施策を行っているということです。



事業名	旧制度		新制度(H29.4)	
	Uターン促進奨励金		ふるさと定住奨励金	
助成種類	Uターン者奨励金		Uターン者	
	Uターン者	10万円	Uターン者	10万円
	Iターン者	5万円	Iターン者	10万円
助成額	転入者1人当たり 1万円		-	-
	-	-	新)新規学卒者	10万円

隠岐であんきに 住んでみようや!

U・Iターン助成制度のお知らせ

助成金の種別	助成種類	助成額
ふるさと定住奨励金	U・Iターン者	10万円
	新規学卒者	10万円
Uターン促進専業補助金	住宅改修補助	限度額100万円
	住宅家賃補助	限度額 月額3万円 (交付決定の日から1年間助成)

※転入日から起算して180日を経過する日までに申請が必要です。

ふるさと定住奨励金

●対象者

- ・Uターン者
過去に町内に住所を有していた者が町外に転出し、町外で1年以上居住した後に本町に平成29年4月1日以降転入した50歳未満の方。ただし、定住する意志がない方を除く。
(住民票又は学生等住所を異動していなかった方は、町外居住を把握できる書類で確認します。)
- ・Iターン者
過去本町に住所を有したことがない方で、本町に転入した50歳未満の方。ただし、定住する意志がない方を除く。
- ・新規学卒者
町内に住所を有し、申請の前年度に大学、専修学校、高等専門学校、高等学校又は特別支援学校(高等部に限る。)及び中学校を卒業した方で、引き続き町内に居住する30歳未満の方(中学校卒業後高等学校又は特別支援学校(高等部)に進学する方は除きます。)

【隠岐の島町への定住のお約束】

奨励金交付後に、生活の拠点を他の自治体に移された場合には、返還を求める場合があります。
※転勤又は出向派遣により定住が阻害されていない方は対象となりません。

お仕事に関するご相談は、
「ハローワーク隠岐の島」へご相談下さい。

＜お問い合わせ先＞ハローワーク隠岐の島 TEL: 08512-2-0161

住宅改修補助金

【対象者】

- ① 転入日から起算して180日以内に実家等の改修を行う方
- ② 転入日において50歳未満のUターンの方

【補助対象外】

- ① 建物解体及び築造のみを行う工事 ②カーテン、家具、家電製品の購入
- ③ 電話及びインターネットの接続工事 ※支給以外にもあります。

住宅家賃補助金

【対象者】

- ① 転入日から起算して180日以内に賃貸借契約の締結をされた方
- ② 転入日において50歳未満のUターンの方

【補助対象外】 飲食・娯楽

町民の皆様のお陰で、本町へのU・Iターン者数が
増えてきています!

生まれ育った隠岐の島で、家族と一緒に暮らせる幸せ
地域の中で活躍できることのいきいきが
豊かな暮らしって何だろう?
人それぞれで価値観はちがうと思いますが
今、隠岐での生活に目を向けておられる方
の今後の、思いがわがやが増えてきます
何かきっかけに、ご家族でいろいろ転入されて下さい
いつまでも、町が元気であり続けることを願って
私達も、お手伝いさせていただきます。

平成29年度 定住対策職員一側です!



迅速なご返信にご期待下さい!

【担当内容】 移住定住・就業や雇用に関すること

“トビックス”

★平成28年は、町村合併以降はじめて、2人の転入超過(転入者が転出を上回ること)となりました!

＜お問い合わせ先＞ 隠岐の島町役場 定住対策課 TEL: 08512-2-8570

No.	市町村名	平成29年度 県内U・Iターンランキング		
		U	I	計(A)
1	松江市	290	425	1,505
2	出雲市	284	425	1,107
3	浜田市	189	108	297
4	安来市	185	72	258
5	浜田県	180	66	246
6	江津市	117	47	164
7	雲南市	92	51	145
8	隠岐の島町	113	24	137
9	大田市	89	51	110
10	島根県	54	52	95
11	津和野町	47	54	81
12	吉賀町	55	40	75
13	東出雲町	49	16	65
14	美郷町	19	11	50
15	備前町	10	18	28
16	川本町	10	15	25
17	高瀬町	9	12	21
18	西ノ島町	10	8	18
19	知夫村	5	1	4

※県内でも町内では、1年多くなりました!
★隠岐の島の転入超過は今年度の記録です!
Uターン者数 109人
Iターン者数 103人
計 212人(前年度比+75人)

次がその施策の紹介で、残りの時間の許す限り、皆さまに説明しますと、まずふるさと定住奨励金を隠岐の島町は創られたということです。これはしかも、平成29(2017)年4月よりそれまでのUターン促進奨励金、Iターン者奨励金という制度に代えてふるさと定住奨励金という形にして、こちらにもありますように、Iターンの方の助成額を増やし、さらに新規学卒者の方にも10万円という支給を始められたそうです。その新規学卒者というのは、町内に住所を有し、申請の前年度に大学専修学校、高等専門学校、又は町内の高校及び中学を卒業した方で、引き続き、町内に居住する30歳未満の方にも、そのような助成を行っているということです。それから住宅改修補助、住宅家賃補助も行われているということです。その結果、下の方に書かれています、平成28年は町村合併以後始めて、52人の転入超過となったということで、実は島根県内のU・Iターンランキングで全体では8位、町村では1位になったという結果がでています。

ここから先はまた細かい話になりますが、年で見ますと、ここにもありますように転入が転出を上回っていて、自然動態(出生・死亡)も加えると減少していますが、社会動態という観点から見ると増えたということです。こちらの数字は年度の数字で、年度でも社会動態では転入が転出を上回っています。

隠岐の島町人口増減数

(住民基本台帳数(H29.2.2調べ))

年	転入	転出	差	出生	死亡	差	合計
平成17年	515	696	▲181	134	245	▲111	▲292
平成18年	480	658	▲178	112	246	▲134	▲312
平成19年	459	728	▲269	123	248	▲125	▲394
平成20年	446	606	▲160	101	242	▲141	▲301
平成21年	428	547	▲119	99	223	▲124	▲243
平成22年	432	523	▲91	120	256	▲136	▲227
平成23年	382	469	▲87	116	283	▲167	▲254
平成24年	402	501	▲99	111	264	▲153	▲252
平成25年	397	458	▲61	126	250	▲124	▲185
平成26年	409	438	▲29	86	229	▲143	▲172
平成27年	386	458	▲72	126	258	▲132	▲204
平成28年	490	438	52	87	241	▲154	▲102

※1月から12月までの数値

H28年度 人口動態集計表

月	自然動態		社会動態		UI区分		
	出生	死亡	転入	転出	Uターン	Iターン	その他(転勤・就学)
4月	3	22	164	81	30	7	127
5月	15	14	21	16	5	8	8
6月	6	19	18	13	6	4	8
7月	6	16	18	15	4	2	12
8月	7	17	13	22	7	4	2
9月	5	16	16	17	7	7	2
10月	12	17	31	10	12	16	3
11月	4	26	24	14	9	15	0
12月	8	28	10	15	5	5	0
1月	8	27	14	12	3	10	1
2月	8	26	15	20	7	8	0
3月	8	19	91	183	14	17	60
合計	90	247	435	418	109	103	223
増減	▲157		17		▲140		

次にこれが隠岐の島町の地域おこし協力隊の配置状況ということで、平成30年度は10人で、そこから7人、4人と減っていくわけですが、いろいろな分野のところに地域おこし協力隊を配置されているということです。具体例ですが、横浜からこちらに移った方がいて、KUSUBURU HOUSE～燻るハートに火を着ける!!!～ということで、こちらで移住されている方がいらっしゃいます。東京で友人の友人に出会い、隠岐の島に行って、そして、ゲストハウスを創ったそうです。KUSUBURU HOUSEの由来は燻っている人々に対するきっかけとしての窓口になりたいということで、燻っている人たちをどんどん呼び込むということもされているそうです。

隠岐の島町地域おこし協力隊配置状況

No	活動拠点(内容)	移住前	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	H32	定住の状況
1		U・東京都稲城市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	定住(帰郷)
2	隠岐の島ものづくり学校 (地域活性化)	I・東京都三田市区	→	→	→	→	→	→	→	→	→	定住(帰郷) 財産権あり100万円
3	役場農林水産課 (地域産品のPR活動)	J・神奈川県横浜市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	中途辞職
4	隠岐の島ものづくり学校 (地域活性化)	I・神奈川県横浜市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	中途辞職
5	役場農林水産課 (地域産品のPR活動)	I・兵庫県姫路市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	中途辞職
6	隠岐世界クワイア推進協議会 (審判員)	I・松江黒田町	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
7	役場玉置支所 (五全アークに地域活性化)	I・東京都杉並区	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
8	隠岐水産高等学校 (高校魅力化(ホキ))	I・長野県駒ヶ根市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
9	隠岐の島町観光協会 (外国人観光客への対策)	I・三重県津市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
10	役場市島支所 (地域産物で商品開発・地域活性化)	I・東京都杉並区	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
11	役場農林水産課 (特色ある農産物の開発・普及)	I・兵庫県三田市	→	→	→	→	→	→	→	→	→	10/1~任用
12	役場農林水産課 (地域産品のPR活動)		→	→	→	→	→	→	→	→	→	N.S.の兼任
13	役場都方支所 (都方首長地域の地域活性化) (産物の開発と商品開発・販路開拓)		→	→	→	→	→	→	→	→	→	
14	役場観光課 (情報発信専門員・イベント実施)		→	→	→	→	→	→	→	→	→	
15	隠岐ジョイパークアワード (ガイド・イベント企画・実施等)		→	→	→	→	→	→	→	→	→	
各年度の人数			2	2	3	2	4	7	10	7	4	

※ ニーズ調査 → 各課にアサイン(必要性・任期終了後の定住等) → 事業計画 → 募集 → 書類審査・人物評定

ゲストハウス
KUSUBURU HOUSE ～懐るハートに火を著ける!!!～ 21 隠岐の島町

＜横浜出身の青年の隠岐の島への道のり＞

2015.3.27 東京散歩道である男と出会う（大学の友人の友人）
隠岐の島ものづくり学校の管理人をしていその男から隠岐の島を知らされる

2015.5.12 隠岐の島へたどり着く
サザニ村 ⇒ 飯屋（ゲストハウス）⇒ DJ Bar YULA YULA
隠岐プラザホテルで3ヶ月住込みで働く ⇒ 熊田材木店で働く

2016.3 念願の農業研修スタート

2017.4～ 空き家のリフォーム工事開始
町外「フグダ」町内有志の寄付/町の空き家改修補助金

2017.6.1 KUSUBURU HOUSE オープン

これから作るゲストハウス

- ・ 地元の人、宿泊客が繋がる場
- ・ 暮らし体験が出来る場
- ・ 色々な価値観に触れることが出来る場
- ・ 国内外を問わず、生の情報が伝わる場に入る場
- ・ 移住サポート、隠岐の島の仕事を提案する場

岩井 明人

- ・ 平成元年6月5日生まれ 27歳
- ・ 神奈川県横浜市出身
- ・ 経済林大学卒
- ・ 父:コック 母:カラオケの先生
- ・ 趣味:人と会話、ギター
- ・ 「競争」より「共創」
- ・ 野望:世界から肌をなくす

僕たちの未来予想図

- ・ なんかしたくてモヤモヤしてる隠岐の島行くっしょ!!
- ・ 第一次産業する隠岐の島っしょ!!
- ・ 隠岐の島が抱える問題を少しでも解決できるっしょ!!

→人口過疎化 →若い子不足 →隠岐の島 FR

KUSUBURU HOUSE の由来

- ・ 何をしようかな～
- ・ 何をしたいのいいのかな～
- ・ どうすればいいのかな～

↓

まっかけとしての窓口になりたい!

隠岐の島町総合戦略（基本的な考え方）

① 若者定住 ② 生涯学習 ③ 意識改革

ここまでの好課題

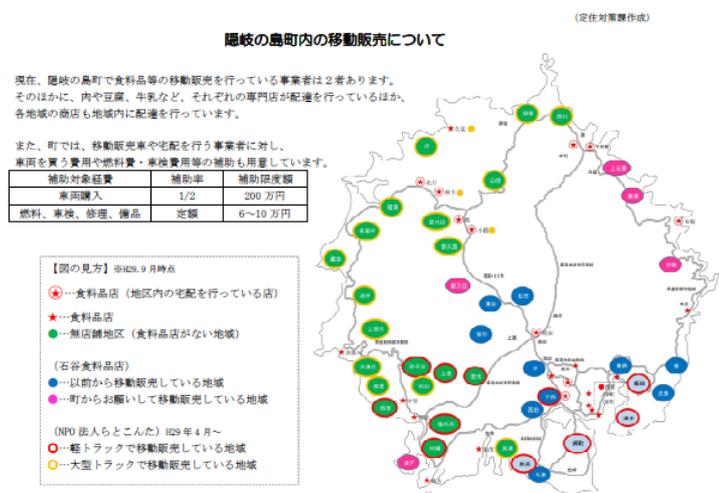
- ・ 若年層の本気度と人柄による人脈
- ・ 1ターンの先輩者の存在とアドバイス
- ・ 町内事業者の応援（相談相手の存在）
- ・ 二人の仲良し
- ・ 地域への届け込みと力強い応援
- ・ 町民（地元）の受け入れ意識の向上
- ・ 町への相談もタイムリーだった

これからの展開

- ・ 町内ネットワークの熟成（人と情報）
- ・ 協働のパラダイス

その他、創業支援事業ということで、隠岐の島ものづくり学校をつくったり、移動販売については後でさらに説明しますが、隠岐の島町地域商業等支援事業費補助金、IT 開業支援補助金、創業支援事業計画、企業誘致はなかなかうまくはいっていないようですが、隠岐の島町仕事創生事業費補助金といった施策を行っているそうです。また、ビジネスプランコンテストもされています。最後に島町内の移動販売も行われていて、買い物ができなくなることを考えてこのような施策を進められているようで、NPO 法人を作って、町が販売車両購入等の補助をして、移動販売活動をしているそうです。

以上で、雑駁ですが私の報告とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



【定住対策】

NPO 法人らとこんだ 活動写真



島外 らとこんだ



ごさい らとこんだ



(花松) ありがとうございます。では最後に対馬にあります一般社団法人 MIT の川口幹子さんにお願いします。今まで 5 つの自治体のご紹介がありましたけれども、全て行政の立場から政策的な観点でのご発表だったかと思います。これに対して、川口さんは後でご自身よりご紹介があると思いますが、対馬の中で最も高齢化率が高い 64%、人口も 60 人~70 人というレベルの集落に島外から移住されて戦っていらっしゃる方です。その現場のレポートをぜひお聞きいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

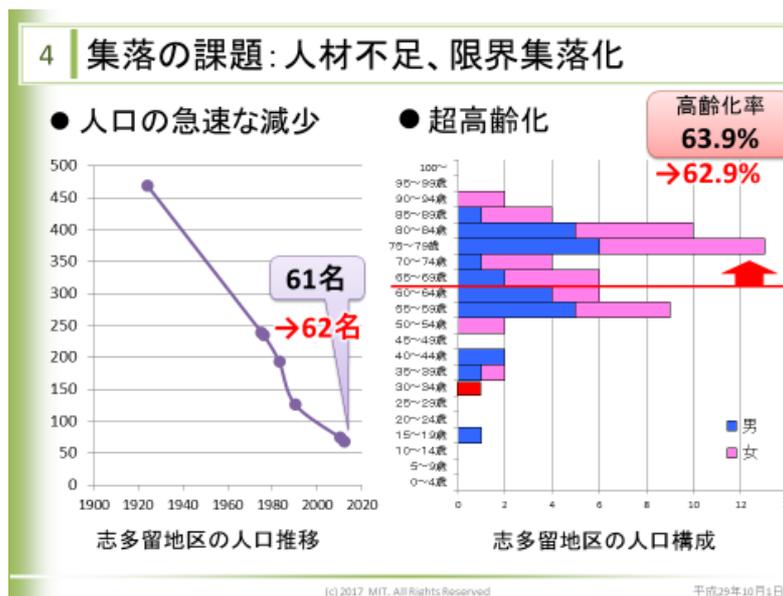
(川口幹子) 皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介に預かりました一般社団法人 MIT の理事をしております川口幹子と申します。私がここに並んでいるのは場違いではないかとも思ってまいりましたが、現場の取り組みということで、ご紹介させていただきます。皆さんご存知のように対馬は国境の島です。韓国のほうが近いということで、鰐浦からみた韓国の夜景ですけれども、国境というものを目で見ることができるといことです。

対馬市もご多分にもれず、どんどん人口が減少していております。花松先生からご紹介いただいたのですが、私が住んでいる地域は志多留地区という対馬の北西部にある小さい集落なのですが大変な過疎地域です。対馬で最も早く過疎が進んだ地域のひとつでもあります。かつて 500 人近く住んでいた集落が 6 年前のデータで 61 名まで減少してしまっている状況です。もっと深刻なのは人口構成ですが、65 歳以上の高齢者が 63.9%を占めるとい

う集落で、ここにひとりの高校生がいましたが高校を卒業して福岡に就職した結果、彼もいなくなってしまいました。



私はこの集落にほれ込みまして6年前に飛び込んで移住しました。その当時、私は32歳だったのですが、それによって、高齢化率がこうなりました。すずめの涙の減少なのですが、このグラフを作ったときに、島内からIターン者が来て、この集落の高齢化率が下がりましたという発表をしたかったのですが、一人に力ではぜんぜん下がらないのです。そして、この地域は黙っていれば本当に無くなるというのが住んでいてよく分かります。というのも先ほど社会増や自然増の話がありましたけれども絶対に自然増がない地域だからです。この、子どもを産む世代に夫婦がいないわけですね。だからというわけではないのですが、3年前に結婚しまして、去年、ここに1人生まれました。先ほどここでウロチョロしていたのが私の息子です。なぜ私に対馬に来たかといいますと、先ほどの隠岐の島町の事例でご紹介がありましたけれども、地域おこし協力隊として移住してきたからです。元々私は対馬に縁もゆかりもない青森県の出身です。

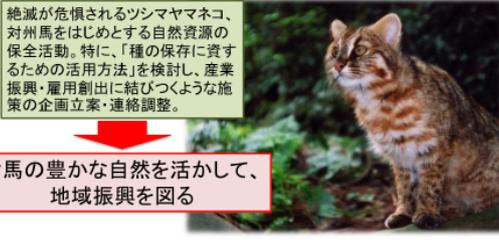


対馬市の地域おこし協力隊は、他の地域とは違って島おこし協働隊という独自の名前をつけているのですが、それだけではなくて、〇〇担当という名前をつけて、〇〇をしてほしいというターゲットを明確にして、それを実現するために移住するという狙いがあるところと他の地域と違っている特徴かと思います。

5 自己紹介

出身: 青森県青森市
 「対馬市島おこし協働隊生物多様性保全担当」
 平成23年6月～平成26年3月 (2年10か月)

絶滅が危惧されるツシマヤマネコ、対州馬をはじめとする自然資源の保全活動。特に、「種の保存に資するための活用方法」を検討し、産業振興・雇用創出に結びつくような施策の企画立案・連絡調整。



対馬の豊かな自然を活かして、地域振興を図る

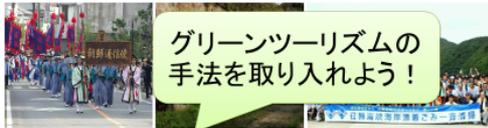
(c) 2017 MIT. All Rights Reserved. 平成26年10月1日

6 対馬の資源を活かして「学び」を産業に！

① ツシマヤマネコの保全を軸とした環境教育



② 大陸との交流と国防の歴史を軸とした国際交流・平和学習



グリーンツーリズムの手法を取り入れよう！

③ 離島だからこそ残る文化・風習を学ぶ暮らし体験

(c) 2017 Tsushima Green-Blue Tourism. All Rights Reserved. 平成26年10月30日

私に課せられたミッションは「絶滅が危惧されるツシマヤマネコ、対州馬をはじめとする自然資源の保全活動……特に、「種の保存に資するための活用方法」を検討し、産業振興・雇用創出に結びつくような施策の企画立案・連絡調整」と書いてあるのですが、対馬の豊かな自然を生かして地域振興を図ることに取り組んでいく人を募集しますということだったわけです。元々私は大学で生態学を勉強しておりまして、非常に自然が好きだったし、そういう場所で子供を育てたかったという思いもあって、そういうことを仕事にできるのだったらラッキーだと思って移住しました。この対馬の豊かな自然を生かして、地域振興を図るにはどのようにして行ったらいいのかと地域おこし協力隊の3年間をかけていろいろ考えてきたわけですが、後半部分はその取り組みについてご紹介します。

対馬の資源は何だろうということですが、対馬ヤマネコ……与那国にも馬の写真が出てきましたけれども日本では数少ない在来馬がいたり、大陸と日本が陸続きだったということを証明するような独特の生き物がいます。また対馬にしかないような資源を使って環境教育ができる……すなわち、大陸との交流や国防の歴史を軸にして今でも朝鮮通信使の行列を再現したり、日韓交流の漂着ゴミのイベントをやったり、今でも見ることができる、他では取り壊されて見ることができない戦争遺構を題材にした国際交流や平和学習もできるだろうということです。そして私が最大に面白いと思っているのは離島だからこそ隔離されているからこそ残っている文化や風習です。こういう3つの私が思う対馬のならではの資源を使って交流人口を増やすことができないかという取り組みをしております。特に離島だからこそ残っている文化、風習……これはすばらしい資源であると思っていて、これを生かすためにグリーンツーリズムという手法を使って交流人口を増やすことを考えています。

7 | グリーンツーリズムのための法整備

平成6年(1994年)

「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」



平成16年(2004年)改正

「農泊」＝農林漁業体験民宿

農山漁村での生活体験や農林漁業体験などを提供する民宿業のこと。農家や漁師の自宅で宿泊客を受け入れる。

農山漁村体験を提供することを条件に、自宅での旅館業営業が可能に。



(c) 2017 Tsushima Green-Blue Tourism. All Rights Reserved

平成29年10月30日

グリーンツーリズムは皆さんもご存知かと思いますが、農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律が平成6(1994)年にできまして、平成16(2004)年に改正されたのですが、この改正によって、農山漁村での生活体験や農林漁業体験等を提供する民宿業が漁師や農家の自宅でできるようになりました。宿泊費用をもらうことは旅館営業法の許可が必要ですが、農林漁業体験、農山漁村体験を提供することを条件に、自宅での旅館営業が可能になったというのがこの法整備の最大の特徴です。これによって農林漁業者が自分の自宅で宿泊客を泊めて、それで宿泊費を得ることができることになったということです。島内31箇所、昨日新たな申請が1箇所ありまして、全部で32箇所の農林漁業体験民宿があります。

そして、対馬は南北に長い島ですが、特に国境の地域である比田勝では韓国との交流が非常に盛んですし、日露関係の歴史を学ぶ遺構も残っている状況です。佐護地域は対馬ヤマネコを中心とした自然体験や自然学習ができる地域ですし、志多留・田の浜エリアという私の住んでいる地域は人口が減少していく中でどうやって集落を維持していこうかという取り組みを地域ぐるみで行っており、コミュニティバスを走らせたり、猪や鹿の捕獲隊を作ったりといろいろな取り組みをしています。その地域活動を学ぶということもできます……観光名所に近かったり、シーカヤックと登山という野外活動との連携もできるといった地域ごとに特色のある様々な体験活動ができるわけです。それで農林漁業体験民宿……農泊と略していますけれども、それを使って交流人口を増やしているわけです。

これはあるお客が宿泊された日の様子ですが、ここに出されている食事……これはこちらの内山文男さんが山に行って採ってきた猪ですとか、奥様の内山美津子さんが畑で作っているものといった自分たちの生産活動が宿泊費となって収入になっていくということで、それだけではなく、この自分たちで生産したものを食べるという幸せや価値が都会ではほとんど

ないわけです。そういうことをその学生や観光客が経験すると、ものすごく感動して帰るわけです。



また、対馬は大陸からいろいろな文化が日本に入ってきましたが、その玄関口であったということから、その食生活からその食のルーツを探ることもできます。その代表的なものが蕎麦で、ネパール北部が原産と言われていますが、そこから中国、韓国、そして日本に伝わってきました。対馬は伝来した当初の品種をずっと作り続けているということで、その蕎麦本来の風味や味が楽しめるということで、マニアに人気なわけですが、日本文化だと思っっているもののルーツを探ることもできるわけです。そういったいろんな資源を使って教育プログラムを創っています。



こちらは島おこし実践塾と呼んでいます。地域の課題を考えていこうとか、これは地元の高校生に参加してもらったわけですが、農林漁業体験をしたり、その受け入れてくれる農泊のお母さんやお父さんといろんな話をする中で、対馬の魅力ってなんだろう、課題ってなんだろう、自分たちは何ができるのだろうということを考えて、ディスカッションをしてもらう塾を開催しています。島おこし実践塾は今年で6年目となり、延べ184人の塾生が卒業していったのですが、その中から対馬に移住してきた人もいますし、他の地域の地域お

こし協力隊になった人もいます。この高校生版島おこし実践塾は今年から始めましたが、こういうことを続けていくことによって、一度は島外にでますが、島外で様々な知識や経験を得て、その場で語り合った対馬の将来を実現するために戻ってくる人が増えてくれれば良いと思っています。

12 農泊を用いた教育プログラムを企画

ヤマネコが棲む対馬で生物多様性と暮らしを考える
第6回
島おこし実践塾
塾生大募集

平成28年
8/31-9/4
4泊5日

熱い仲間と語り合い、対馬から日本の未来を考える！
高校生版
島おこし実践塾
塾生大募集

平成29年
8/21-23
2泊3日

卒業体験 + グループディスカッション

対馬の魅力ってなんだろう？ 詳細ってなんだろう？
対馬の仕事を実際に体験し、課題を聞き、みんなで話し合ってみよう。



農業 (〜おみやげづくり体験)



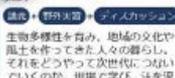
里親施設



農務志



赤牛飼育



加工品製造 (むらさき)



エコツーリズム

● 対象 中学生、専門学生、大学生、社会人
 ● 定員 20名 (対馬市内は15名、島外は5名)
 ● 参加費 2,000円
 ● 申込方法 7月28日(金)まで
 ● 申込先 対馬市観光課(対馬市観光課)

最近、韓国人観光客も農泊を利用するようになっていて、今は、対馬グリーンツーリズムで韓国人スタッフを1名雇っているわけですが、彼が窓口になって、地元の人との交流を楽しみたいという人は喜んで帰って行ってくれます。そういった日韓交流や日韓市民ビーチグリーンアップ等毎回行っていますし、アヒラン祭り……名前が変わって港祭りになりましたが、こういう今でも続く国際交流も貴重な学びの交流の場になるのではないかと思います。また、島ならではの暮らし、島だからこそ残っている暮らしというものは本当に貴重な教育資源であり、観光資源だと思っています。今、私は対馬グリーンツーリズムという農泊のネットワーク組織の事務局をやっているわけですが、来月から対州そばの手打ち体験ツアーが始まったり、対馬だから残っている正月文化を体験したり、一番美味しい時期にブリの皮まで使うブリを丸ごと食べつくすというツアーを企画して販売しています。

13 韓国人観光客も農泊を利用するようになった

韓国人スタッフが窓口対応、対馬のことも農泊の家族のことも熟知しており、お客様のニーズに合わせたマッチングが可能



©2017 Toushima Green-Blue Tourism All Rights Reserved. 平成28年10月30日

14 日韓交流も、貴重な学び

日韓市民ビーチグリーンアップ
～日韓海峡沿岸産物フェア開催～



対馬アヒラン祭り「朝鮮通信使行列」

©2017 Toushima Green-Blue Tourism All Rights Reserved. 平成28年10月30日



最後に今、対馬グリーンツーリズム協会の事務局として、私を含め3名雇用していますし、その事務局をしている一般社団法人 MIT は8名の雇用がありますが、全員移住者です。仕事は作ればあると私は思っておりますが、このような島の資源を使って教育なり観光なりを産業にしていくことで11名の雇用が生まれているということです。これがいつまで続くかということは、いつまでも続けていかなければならないのでしょうか、それが私の使命だと思いますし、このようなツアーをきっかけにして対馬を好きになって、移住してくれる人が増えていくことを期待しています。以上です。

(花松) ありがとうございます。6つの自治体に関するご報告をいただいたわけですが、それぞれの自治体でこういった移住・定住政策がとられているのか、またこういった取り組みをされているのかというお話をさせていただいて、それぞれお互いの中で、参考になる部分や良い部分を学び合うところもあったのではないかと思います。その一方で JIBSN の枠の中で人口問題を論じるという意味で言えば、やはり、国境・境界地域ならではの人口問題があるのかなのか、それから対策も国境地域、境界地域だからこそ打てる手があるのかなのかを考える必要があるのではないかと個人的には思っております。

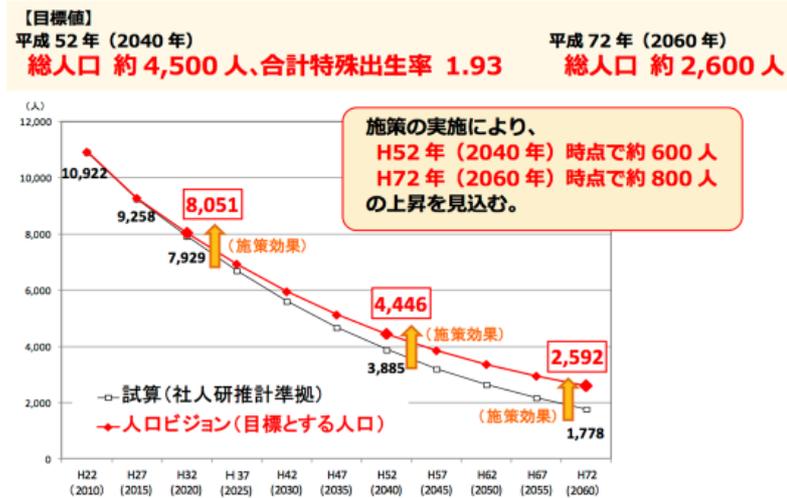
その話をする前に私のほうから若干、国境・境界地域特有の問題から外れまして、今、日本全体がどのようになっているのか、つまり、国境・境界地域に限られない日本の人口問題がどうなっているのかを一度確認させてください。

自治体の方はご存知の方が多いと思いますが、こういう状況なのです。日本は今、人口が約1億2千万ですが、2060年には8800万、これには書いていませんけれども2080年には今の半分の約6000万になるといわれています。人口統計も多少のブレはあっている議論がありますが、裏切らない部分もあって、人口が今後60年で半分になるという状況は踏まえておかなければいけないと思います。都道府県別で細かく見ると東京・関東圏が一人勝ちしています。これは転入者数が転出者数を上回っている社会増です。それ以外で社会増なのは愛知、大阪、福岡のみです。他の道府県で下に棒が出ているのが社会減ですけども、これを見ると都市部だけが一人勝ちの状況がわかります。

緩やかな自治体もあります。セッション1でご登壇いただいた自治体の数字はこのようになっております。これはインターネットで公表されていますが、概して厳しい状況だといえます。もちろん、差はありますけれども、やはり厳しい状況にあるようです。

北海道夕張市の人口ビジョン

●人口の将来展望



出典：夕張市地方人口ビジョン及び地方版総合戦略 (H28年3月)

去年 NHK で放送されてかなり評判になっていますが「縮小ニッポンの衝撃」という番組があります。人口が減るということは前提で、維持するとか増やすということは無理だから、減る事を前提に行政サービスをどこまで切り捨てるかという、言い方は悪いのですが、そういった議論をせざるを得ない状況になっているのではないかという報告が、いくつかの自治体で既にされています。実は私のゼミでこの番組を元にした新書を読んでいるのですが、暗い話が多いので、みんなシーンとなってしまっている状況です。その中で今、最も注目されているのが財政破綻した北海道夕張市で、私も 2 週間前に行きましたが、夕張は元々人口が 12 万人だったのが、今は 8 千人に推移しているわけです。最終的にはせいぜい 2500 人ぐらいになると推計していて、もう増えることや維持することなど考えていないわけです。

減る事を前提に減るスピードを緩和したり、減る度合いを緩和してそれに見合った最低限の行政サービスをするという考え方に切り替えているわけです。他方で、もっと厳しいものになると、廃村や村納め、あるいは今の時点で、できるときに集団移転をしてしまうといった研究もここ 2, 3 年で光が当たりはじめて、そういう研究をされている方もいらっしゃいます。やはりこれまでは研究者も、こういった状況をタブー視して眼を瞑っていたわけです。けれども眼を瞑れば瞑るほど、後に先送りするだけなので、今できるときにやるべきことをやるという議論も始まっています。

人口概念の再構成
定住人口・交流人口+「関係人口」



一方で宣伝ですが、セッション1の司会をされた田中さんが最近『関係人口をつくる』という本を刊行されました。このセッションは人口問題がテーマですが、人口とは多様な概念で、実はツーリズム（観光）も交流人口とも言い換えられますから、これも実は人口問題なのです。さらに人口というところまでは、どれだけそこに人が住んでいるかという意味での定住人口、それから人がどれだけ来るかという交流人口の2つで考えられていたわけですが、最近注目されているのが、3つ目のこの関係人口です。別に住んでいるわけでもない、来るわけでもないけれども、その地域に何らかの関わりをもってお金を落としたり応援をしてくれる人たちのことです。例えば、ふるさと納税は最も分かりやすいと思うわけですが、それ以外には離れていながらその地域の特産品やグッズを買ってくれる、いわゆるファンみたいな人たちも含めて、人口としてカウントしていくことが必要ではないのかという議論です。逆に言えば、定住人口と交流人口の2つだけではもう持たないという考え方が根底にあるのではないかと思います。

議論すべき論点

1. **領土保全、国境管理の役割**を担う国境・境界地域自治体が街を縮小する、たたむ（人口減少を前提とする）ことはできるのだろうか？
2. 国境・境界地域であるがゆえの**特有の人口問題**はあるのか？
国境・境界自治体のなかで**人口問題の共通点や違い**はあるか？
3. 各自治体の移住定住政策競争のなかで、移住定住を促すための国境・境界地域**特有の「魅力」**はないのだろうか？国境・境界地域であることを**「ウリ」**にすることはできないだろうか？
4. 国境・境界地域であるからこそ打ち出せる**独自の対策、突破口**はないのだろうか？
 - ・隣接国との付き合いの中で生まれる国際結婚
 - ・隣接国からの移住者の受け入れ
 - ・隣接国からの交流人口、隣接国に住む関係人口の促進
 - ・自衛隊の受け入れと隊員家族による人口増加 など



ここまできて、今日のこのセッションにあまり関係ない話だったとも思いますけれども、改めて登壇者の方々に聞きたい事が4つあります。お答えできるものだけで構いません。

まず一つ目は、先ほども言いましたが、町を縮小するとか、あるいは最悪の場合町や村を閉じるとか村を閉じるという可能性についてです。そういったことが本気で議論されるようになってきた中で、登壇者の自治体では町を縮小するという選択肢は取り得るのかということです。例えば夕張であれば内陸の山奥ですから、そこが閉じて山林に戻ったとしても、日本の領土保全には何の影響もないと思います。しかし、国境・境界地域はそういうわけにはいかないのではないのでしょうか。人がいなくなって自衛隊が入れば別ですが、そこに市民がいなくなるということを、現実的な可能性としてどのようにお考えになられているのかを率直にお聞きしたいのがまず1点です。

次に、これは先ほどの繰り返しになりますが、国境・境界地域であるか故の特有の人口問題があるのかについてです。つまり、ボーダー（国境・境界）がある種の原因になることによって生じる人口の減少問題というものがあるのだろうかということです。

3つ目は逆に対応策として、ボーダーというものが人口問題対策のための何らかの道具や資源として使えないのかという観点からお聞きします。私も学生を連れていろいろな自治体に行くわけですが、それぞれの地域で定住・移住政策があります。ただ、言い方は悪いですが、どこも似たり寄ったりで、子どもの医療費の助成もどこもやっていますよね。3歳までとか6歳までとか、中学生までとかいろいろバリエーションはありますが、基本的にどこでもやっています。そういうある種の競争、奪い合いの中で、移住定住を促すために国境・境界地域だからこそ打てる手、特有の魅力のようなもの、売りのようなもの、そういうものはないのでしょうかという質問になります。

最後、これも先の3つの質問とかぶります。これはお答えできる自治体とお答えできない自治体とがあるのは承知の上で聞いているつもりですが、たとえば隣国とのお付き合いの中で生まれる国際結婚や隣接国からの移住者の受け入れなどを考えることはできないでしょうかという質問です。対岸からの移住、移民については、対馬では実際にニーズが出てきていると私は聞いています。また隣接国に住む関係人口をどう活用するかといったことも考えられると思います。こういったものも国境・境界地域だからこそ打てる手やアイデアをお聞きできればと思います。

セッション1のボーダーツーリズムは言ってみれば0の状態からどうやって1、2と作り上げていくかという議論ですが、人口問題については最初からマイナス100、200という絶望的な状況で議論しなければならないと私は思っています。そういった場合には現実的な対策を着実に踏む必要もあると思いますが、それと同時に夢物語でも良いので、もう少し大きな話をしてもいいのかなと個人的には考えています。そういった文脈のなかで、国境・境界地域であるからこそ打てる手として、どういったことが考えられるのかをお聞きできればと思います。全てに質問にお答えできなくても結構です。お答え出来る質問だけでも構いません



し、あなたの問題の設定の仕方が悪いという意見でもかまいませんので、ぜひ織田さんから一言ずつお願いできればと思います。よろしく願いいたします。

(織田) 私の説明からも申し上げましたが、若干議論が違いただろうと思っております。議論すべき論点の一番上の人口が減っていく中で、自治体自体を縮小する、たたむという可能性については、現在、我々の口から言うことは出来ませんし、実際検討している自治体はないだろうと思っています。今、お話頂いた中でも、人口が減ってきているので増やしましょうという自治体はほとんどないのではないかと思います。先ほどの私の説明でもしなかったのですが、根室市の人口少子化対策は、減少率を少し緩やかにしましょう、あるいは歯止めをかけましょうということで、具体的には人口減少率がマイナス 1.61%と出ている数字を、これをマイナス 1%にしましょうということで、若干改善していきたいという思いでいろいろな施策を打ち出しているようです。私も畑違いなので、これ以上突っ込んだ事が言えないのですが、その中でその後、人口が 0 になってしまうと、自治体は無くなってしまおうと思います。そこを見据えての議論はまだ出来ていないと思いますし、やる視点はないと思います。他の所はお任せします。

(山口) それでは 1 の人口減少で町をたたむのかということですが、やはりたたまないと思います。その理由としては、先ほども説明しましたが、うちは漁業と酪農の町だからです。やはり国内の食料を担っているという自負がありますので、これをなくすということはないだろうし、やはり誰かが担っていかなければならないと考えますので、そういうことではないと思っています。それから特有の人口問題についてですが、無いといたら無いです。ただ、もし北方四島が帰ってきているのであれば、まだまだ栄えた地域になっていたと思っています。観光の可能性も十分にあります。そういう点で言えば、特有かどうかはいいにくいですが、帰ってきてくれたらという思いはあります。それから、特有の魅力、なかなか難しいですが、期待している部分を一つ申し上げますと、今、日露の共同経済活動が始まろうとしています。なかなか進みませんが、5 項目先行してやろうという話し合いをしています。ひとつに観光があります。行き来できるようになるのではと思っています。今、ビザなし交流で行っていますが、それがどういう枠組みで行けるのかどうか、それに非常に期待しております。これができれば特有の魅力になるのではと思っています。最後 4 の論点に関しては自衛隊の受入と、隊家族による人口増加がうちにもあります。沿岸監視隊です。ロシアとの緊張があって、低空でくるとレーダーに映らないので、目視で 24 時間監視しています。これがあるので自衛隊が必要です。ロシアとの緊張感がなくなって自衛隊が引き上げたらどうしようといったことも考えたりします。以上です。

(小嶺) まず、島に人がいなくなるということは、到底考えられないと言いますか、尖閣



諸島の二の舞になってはいけないという意見があります。ただの人もいない島になると、どこはいいませんが、領有権を主張してくると考えます。元々、領有権をいつているわけですから、そういう人が居なくなると一番端ですから、そこから攻めてくるのではないかと思います。尖閣諸島も端ですから、そういったことに対して何としても維持していかないと考えますので、廃村とか廃町、そういったことはあり得ないだろうと思っております。特有の人口問題ですが、国境、境界というよりは、離島の問題、必ず10代の子供達が出て行くと、その子供達が学校を卒業して働こうとしたときに、島に働く環境がないわけですね。当然、就職活動も全て沖縄本島や県外でやっていくわけですが、そこから戻ってくるかということ、例えば私は長男なのでそういう関係であれば戻ってこざるを得ないでしょうが……と思っております。次に、3番目の対策ですけれども、今話を聞きまして、今年内閣府と協議して、高校生が夏休みで島に帰って来た時に、琉球大学と協力してICTを利用して遠隔授業をしたのを思い出しました。これが来年、再来年まで実施される、そういう成果を踏まえながら、一つの島に一つの高校ではないわけですね、琉球大学を中心とした……その分校なのか、どういう形状なのかは分かりませんが……枠組みも考えていこうと思っております。高校まで島にいと、島を出て行く人もいるかもしれないだろうけれども、島に残る人もいるだろうし、高校3年間でいろいろな事を考えるわけです。中学校を卒業した時点で、将来自分がどうしようかと言う事を考える子供達は少ないと思っております。4番の論点ですが、隣の国、台湾ですが、実際、2006年、2007年に国境交流特区申請をやっておりまして、内容は様々ですが、与那国町が台湾との間に限定して関税等のCIQを申請して、町でできるようにして欲しいとそういうことをやっておりました。これは見事に蹴られました。そういうことで、台湾との繋がりをもっと深めていきたい、そして先ほど言いましたが、戦前までは与那国は国境ではなく通り道だったわけですから、人が来たり物が入ってきたり、お金が集まったり……といったことがあったわけですが、そういうことを再び少し夢見たいと思っております。

(花松) ありがとうございます。古川先生、お答えできる範囲で構いませんのでお願いします。

(古川) 今日の私の役割は参加が叶わなかった自治体の定住対策の紹介ですので、私個人の意見になりますが、最初の論点はやはり、0になるという推計を出されている自治体はありませんので、何とか今の国の制度のまま維持して通していきましょうという形になっていると思います。この話になりますと、移民を受け入れるべきかそうではないのかという論点にも広がっていくわけですが、移民という形では受け入れられないのだが、東京オリンピックの時に誰が現場で働くんだったという話になると、政府は入管に新しい在留資格を作らせるということになっているようですので、実際、進めたくても進めない……まさに国境・境界地域もそうでしょうが、結局、隣ともっと交流すればいいのではと思っても、それが全く認めら



れなかったり、財政上の理由で打ち切られたりするところも出てきますので、今の制度のままでは、国境地域で何か起こるとマスコミが大きく取り上げて勇ましいことを言われる評論家もいますが、そこに住んでいる方々は思っていることがなかなか伝わらずに喉もと過ぎれば熱さ忘れるという形でどんどん人口が減少して衰退の方向に向かっていると考えます。そういうところをどうするかというのは、自治体でどうするかというより、この国をどうしていくのかという視点から議論をもっとしていかないといけないと思います。

その中で、私自身、2つの自治体の定住対策を紹介させていただいて、特に興味深かったのは若者を呼び込んでいる点です。若い人たちが入ってくるというと、私も学生を教えているときは、自分からすると真っ直ぐに行かせようとしているのですが、多分そういったやりかたではうまくいかないのではないかと考えました。先ほどの KUSUBURU HOUSE がそうですが、やはり別のやり方が何かあるはずなのです。そこで、受け皿になる魅力を、そこに住んでいる若い人たちの意見も、あまり大した事ないと決めつけるのではなくて、そういうところも実は検討していくべきかなと……生意気な言い方ですが、外からみると、あるいは、学生を指導していて自戒を込めてということになります。そのように考えます。ボーダーツーリズムもそうでしたように、なにか突破口になるものを我々活動していっておりますので、その中で、私自身も考えていきたいと思っております。すみません、回答になっていないかもしれませんが。

(花松) では、最後に川口さん、お願いします。

(川口) 難しい問題ばかりですが、最初に4番の論点から……現状で対馬グリーンツーリズムを通じて雇っている韓国人が一人います。これは隣接国という付き合いの中で生まれた国際結婚で、奥さんが日本人で旦那さんが韓国人で移住してきたというパターンです。今、私が観光や教育に携わっていて感じるのはどんどん韓国人が来ていることです。今年は40万人になるのではないかとされていますが、そういう中で韓国人が日本に来る所の観光業に携わるのも韓国人というパターンが多くなってきていると思っていて、それはどうだろうと個人的に思っています。国境地域であって韓国人の交流人口が非常に多いというのは対馬の強みであるので、そこに携わる日本人が増えなければならないのではないかと個人的に思っています。

1番の話になりますが、こういう話をするときは必ず様々な自治体の方いかにか減少率をどうするかという話をして、それは確かに大事な事だと思いますが、私は今日、小笠原村の発表であったように、最終的に何人が適切なのかというところを見据えたほうがいいのではないかと思います。対馬の面積で何人住んで、どんな仕事に就くのかということを一度何人で安定するのが理想なのかを描く必要があると思います。その人たちが島にある資源、それは先ほど標津町の方は酪農の町だと仰いましたが、対馬の場合は何で人口を維持していく

のか、漁業なのか林業なのか農業なのか、あるいは観光なのかということをきちんと議論して、その産業を作るなり維持するなり、最終的な目標に到達する為の施策と、そこにいくまでに減少していく時代があるので、その時代をどう乗り切るかというのは分けて考えなければいけないのではないかと個人的には感じています。

(花松) ありがとうございました。時間になりましたので、まだいろいろ聞きたい方もおられると思いますが、この後の総合討論で質問等受けつけますので、そちらでよろしく願いいたします。それでは、これでセッション2「境界地域の人口問題」を終わります。ありがとうございました。





総合討論

(岩下明裕) 最後の討論御司会進行役を務めます JIBSN では企画部会長、国境地域研究センターでは副理事長、それから北海道大学と九州大学では教授として、今回のイベントのほとんどに関わっている岩下でございます。先ほどの花松さんの素晴らしい司会を聞いて、もう私の出る幕はないからやめて帰ろうかなと思いましたが、負けられないので頑張りたいと思います。

この境界地域研究ネットワーク JAPAN の年次セミナーというのは今回で 6 回目になります。テーマは毎回いろいろありまして、一番ハードなところと言うと領土問題を扱ったこともありますし、領土に関わることもあります。領海とか排他的経済水域の問題、オホーツクとか東シナ海と日本海と比べて扱ったこともあります。それから医療とか環境も島が多いので海ゴミを扱ったことがありますし、あとハードなところと言うと原発も扱ったことがあります。原発は、境界が国境に近いと、要するにその国の原発に近いので、先ほど報告された与那国町の小嶺さんが「原発の問題は何かあったらいろいろ大変だけれども、それでも同じ国の中だからまだ良い。我々の場合は台湾の原発なので本当に情報などないだろう」ということでした。対馬の場合も全く同じで、国境地域の境界地域とはそういう特性があるという議論をしたことがあります。今回は、人口とツーリズム。特にツーリズムの方は非常に今熱心にやっていますし、ボーダーツーリズムということで私が編者になりまして、今回ここで関わっている対馬と釜山、台湾と与那国・竹富、稚内とサハリンといったツーリズムを扱った本もあります。これに合わせて見本だけ持ってきました。初めてのボーダーツーリズムを作ったということと推進協議会ができたということで会長に来ていただいてツーリズムをテーマとして扱おうということになりました。何分対馬というのが、ここから釜山に渡ることもありますし、ツーリズムを扱うべき場所だろうということもありますし、それから近年は JIBSN のセミナーを入れたツーリズムを作るということで今回もビッグホリデー様…ボーダーツーリズム推進協議会の事務局をやっていただいていますけれども、ビッグホリデーの主催で 20 名くらいの方がツアーに参加していただいて、明日対馬に行って明後日釜山に渡るという中でこのイベントを考えた面もあります。ツアーに参加しておられませんが、山口県立大学のご一行も独自に周られるということですが、実は山口県立大学と言うと 2010 年にここでまだ JIBSN が設立される前に「国境フォーラム」を開催した時に上対馬と厳原とで高校生の意識調査をしてもらって、高校生の意識と距離の近さということで、長崎の人には申し訳ないのですが、皆が長崎よりも福岡に近い、上対馬の人は釜山に近いという心象地図のようなものを報告してもらったことがあって、今回はそういう色々な盛り上がりの中で開催しております。

それで花松さんと話を、古川さんとも話をされていて、観光ともう一つは何がありますかと聞いた時に、「是非人口問題をやろう」と花松さんが言って、今も素晴らしい司会をしてくれ



ましたけれども、人口と観光ということで2つのテーマを立てました。もともとこのテーマに関して、花松さんは似ている、あるいはつながると言っていましたけれども、私の所でもJIBSNというのは難しい問題もやりますけれども、基本的には境界地域の振興・活性化ということで共通の悩みを提示して情報交換し、もちろん互いに違いはあるけれども参考にしながら何かを作っていくことが前提になっています。

結局、境界地域を活性化させるということはどういうことかということ、申し訳ありません、非常に品の悪い言い方しますが、1つ目はお金が落ちて集まってくれば良いのです。2つ目は人が来て集まれば良いのです。要するにお金が増えて、人が増えて、来て落としてくれば良いということです。お金と人に尽きるとすると、観光がおそらく一番取りつきやすいだろう……ハードなものの部分に頼る、依存度が高いものでお金を稼ぐ人を集めるのは厳しいところがある反面、確かに観光も立地や環境といったものに左右されますけれども、先ほど伊豆会長も言われましたように、ストーリーづくりなどソフト面でカバーできる度合いは多いし、すぐに始められるし、すぐに止められるのはありますけれども、ある意味で北方領土の今回の、いわゆる共同経済活動5項目で恐らくできるのは観光だけなのです。それ以上、何故他ができないのか私は言いませんけれども、観光がやはり一番やりやすいことで、観光を立てることが一つのテーマかなと思います。

それから人ですが、結局これも自然増あるいは社会増と言いますが、増えるか来るかしかないわけです。増えるというのはなかなか難しいし、増える、増やすという課題は境界地域だけではなくてどの地域、どの自治体でもどの地域でも同じだけれども、「来る」ということに関して言うと、田中さんにあとで振りますけれども、関係人口も含めた当該地域の魅力ということで、ソフト面にさせるとするとやはり境界地域ならではの魅力というものを立てて人が来る、お金が落ちるとことを考えると、これは伊豆会長の言われたキラークンテンツであるのだろうと思うのです。ただ、ツーリズムを立てる時に、要するにボーダーツーリズムでなくても良いわけです。だから、今も皆さんツーリズムの話をして田中さんが「ボーダーツーリズムにならないの？」と先ほど私に言っていましたけれども、確かにそうなのです。しかも、ボーダーでなくても観光が立てば良いわけです。だから、例えば石垣とか竹富は自然とか海が豊かであるからボーダーが入らなくても観光が成り立つ側面があるし、礼文も例えば花と自然の素晴らしさですごく観光がピークだった時期があったりする。与那国もそんなに人は多くないけれどもダイビングがあって、別に国境でなくてもできるわけです。ただ、よく考えると、そういうツーリズムをどのようにやっていくにしても、いろいろなツーリズムが頭落ちになっていく中で、礼文町長の前で失礼ですが、礼文の花でもっともっと溢れるばかりに人が来ていたら、果たしてボーダーに関心を持っていたかどうかはわからないですし、それは根室だって魚がもっと獲れて、ロシアと苦しいことにならなければボーダーに関心を持ってくれたかわかりませんが、現に我々の仲間になっていない多くの自治体はボーダーにこだわらなくても表では言わないけれども結構潤っている自治体



が多いということで、やはりここに集まっている自治体はボーダーを切り口に何かをやるという自治体が多いと私は思っています。

それで、人が来る方、移住の方なのですけれども、花松さんの年齢をみて僕ちょっと思ったのですけれども、やはり住みやすさ、暮らしやすさが共通すると多分人は増えるでしょう。たけど、年齢が高くなる、リタイアした人が来るだろう。逆に面白さとか、わくわくするような場所だと若い人が来るだろう。小笠原というのは多分両方掛っていて、あそこは若人も増えているわけです。そう考えると、面白くてわくわくして若い人を魅力として惹きつけるようなものを置くというのは、ボーダーに何かあるのではないかと思います。そういうアプローチができると思います。ここまで喋ると時間が無くなってきますので、今日話を聞いていろいろなことを考え、刺激になったと思います。ここから自由に発言されてください。もちろん、どなたかに対する質問、疑問でも結構ですし、こういうことをやったらボーダーはもっと面白くなると思うという話も結構でございますので、どなたからでも手を挙げられてご質問をしていただければと思います。どなたか皮切りにどうぞ。

(フロア1) 国境問題は対馬にとって今プラスに動いていると思います。ところで、対馬は長崎県に属しているわけです。これが福岡県に属することによって経済、文化と言ったものがもっともっと良くなるのではないのでしょうか。長崎県に属しているのは行政だけなので。そうすると、日本国内から対馬に来ないという話も先ほどいろいろありましたが、そういうものも福岡と対馬が同じ福岡県の中の福岡市に対馬がなれば福岡から対馬にいろいろな方々が対馬に来て国内の観光人口というのが必ず増えると思いますが、その辺を皆さんはどのように考えるのでしょうか。

(岩下) いきなり重い問題で、対馬の転県運動というのは私も存じておりますので、答えようがないので、どなたかいかがでしょうか。例えば、福岡に入れば豊かになると思うのが甘いとか、私も言いたいとは思ったのですけれども、もしも福岡に入ったらこういうように変わるという意見でもよろしいのですけれども、どなたかこの事に関して、対馬以外の方で答えできる方はおられますか？どうぞ。

(フロア2) 東京から来ている者なのですけれども、僕が対馬に行くと言うと、東京の同期から「対馬って福岡だよ」とやはり言われてしまうのです。「いやいや、対馬は長崎県対馬市だよ」と言う、「ああ、長崎の方なんだ」と驚かれます。それくらい対馬とはもしかしたら多分東京の人からみたらイメージ的には結構福岡寄りなのかと考えると、対馬という地域がそれほど遠く感じるような地域ではないのかもしれないなど、これは若者の感覚かもしれませんが、そのように僕は思っています。



(フロア3) 最初の質問をした人に逆に質問をしたいです。私も以前福岡に2年8ヶ月住んでいて、その時から壱岐・対馬が何故福岡ではないのかと不思議には思っていたことがあるのですが、今既に飛行機にしてもフェリーにしても福岡便の方が圧倒的に多いという中で、今対馬が福岡県に移ったらより福岡から人がたくさん来るというより「重い」という理由は何でしょうか。それから、対馬の人がもし本当に県を代えたいと言うならば、今なら例えば住民投票を起こすとか、意思表示をする方法はいくらでも思うのです。それはまた別の問題だと思うのですが、今日はツーリズムの話なので、対馬の人たちが福岡県でも良いと思う気持ちはよくわかるのですが、では何故、福岡県の人がたくさん来ると思うのか、県外の方にもわかるように話していただけますでしょうか。

(岩下) 私も補足して質問して良いですか。私は九州大学という所にずっと10年くらいいました。福岡の典型的な人は「私は壱岐に行ったことはあるけれども対馬には行ったことがない」と言います。私が今何故このように対馬に肩入れしているかと言うと、対馬に行ったことがなかったからです。その反省でこのようなことをやっているのですが、そうすると、壱岐も長崎県ですから県の問題ではないような気がするのですが、いかがでしょうか。

(フロア1) 行政の枠があり、いろいろな国から出てくる予算は長崎県を通じて対馬に入ってくるわけです。これが、福岡県を通じて対馬に入ってきて、それがまた福岡県に建築費の予算なども返っていけばそこに当然経済のつながりが生まれるし、今は長崎と対馬はそのようなつながりがないのです。予算だけ来てほとんど大抵のものは福岡から仕入れるわけです。経済がつながるし、その前に人と人が交流することによって福岡県の人と対馬の人が同じ県であれば、もっともっと先ほど話があったように親睦感というか、親しくできるではないですか。対馬の人がもう5、6万人は福岡に移動して福岡県に住んでいるのです。なお長崎と五島は選挙区も一緒に、五島から長崎にたくさん行っていますので、例えば国会の選挙があっても五島出身の人が長崎市にいっぱいいるから国会に通るのです。対馬から国会議員が出ればひょっとしたら福岡の人と合せて当選するかもしれないという部分もあるわけです。それは一つの考え方ですが、それだけではないですよ。もっともっと対馬と福岡の人は親しくなれるはずですよ。

(岩下) ありがとうございます。我々、ボーダーと言っているのは国境だけではなくて県と県のボーダーもありますので、これは対馬にとって大事な問題だと思いました。皆さんも認識していただけたらと思います。ということで、テーマを変えてもよろしいでしょうか。

(フロア1) はい。



(岩下) では、1部、2部のテーマに戻します。質問でもよろしいですし、問題提起でも結構です。はい、お願いします。

(高田喜博) 北海道から来ました高田と言います。北海道の国際交流機関に勤めています。まずは人口の問題で今日議論をしていた行政の人とか研究している人にとっては当たり前の事なのですが、今日は一般市民の方もいらっしゃるということで、今人口問題で今日は数の話がいっぱい出ていたのですけれども、実際に深刻なのは数と一緒に人口の中身で、高齢化が非常に進んでいて、単に人口が何年前の何人に減ったというだけではなくて、それが非常に高齢化しているというのが大きな問題なのだということを一般の人に補足しておきたいと思えます。

また、今日いろいろな政策が出ていました。例えばヨーロッパの少子化対策に成功した国としてフランスとか北欧の国が揚げられておいて、そこに出てくる政策は似ているのですが、実は私の所属している所は北方圏センターという名前が昔、北方圏研究をしていた所なので、そういった関係で一つ補足させていただきたいのですが、北欧で少子化対策に成功した要因のもう一つは女性の進出なのです。ですから、今日出た出産や子育てのための政策はもちろん大切なことですが、ヒントとして、もし役場とか議会のメンバー、構成員の半分が女性になったら絶対女性の人口は増えます。若い人……それは北欧スタイルで、女性の社会進出がどれだけ進められてどれだけ住みやすくなるのかというのが非常に、若い女性を呼び込むために必要な政策だったということをお知らせください。

次に、1部と2部の関連で、先ほど岩下先生が田中さんに振るとおっしゃっていましたが、今日、紹介された本(『[ボーダーツーリズム](#)』)の中で書かせてもらったのですが、交流人口というのはやはり少子高齢化の中でも重要なことだと思いますが、それを増やす方策として他の地域もみんな観光をやっている、他の地域もみな苦勞しているのです。その中でボーダーツーリズムは、例えばゆるキャラを作ってみた、あるいはB級グルメに挑戦してみたといったような、他と同じことをやってもなかなか勝てません。でもこのボーダーにはボーダーにしかない魅力があり、ボーダーにしかない魅力をブラッシュアップして、それを観光につなげていこうということで、他と違う競争力のあり、他にないツーリズムを作れるのではないかと考えて我々はボーダーツーリズムというのを地域振興に提案しているということをお知らせしたいと思います。

最後に、今日いろいろな所の話ができて、いろいろな所の比較ができてとても面白かったと思えます。裏を返せば、このJIBSNの枠組みの魅力で、いろいろな所が同じような問題で少しずつ違う問題を抱えている自治体や、その人たちがこうやって集まっている議論して討議するという枠組みだということです。それは、こういう問題を解決していくために非常に重要になってくると思っているということも宣伝させていただきます。以上です。



(岩下) 最初の点にお答えします。次に山口さんと小嶺さんと田中さんに振ろうと思っ
ているのですが、実は標津町には私は今年の4月かなんかに行った時に金澤町長がものすごく
ニコニコして「先生、知っていますか。うちは人口がほとんど減らなかったんだ」と言われ
たのです。数人しか減らないというのは、事実上増えているのと同じなんです。3月の段階で
転出しますから4月に入ってくることを考えると画期的なことだということ、さんざん私
は聞かされて、それで標津町はボーダーツーリズムができると思うから絶対人口問題だ
ということで副町長に来ていただいています。それで、高田さんの最初の質問に対して、若
い人に来てもらおうといろいろと取り組まれていると思いますので、標津の方に補足ある
いは標津の魅力を語っていただけないでしょうか。

(山口) 恥ずかしい話ですが、うちには女性の議会議員はおりません。かつて1人だけ
です。本当に今女性の活躍の場というのは非常に大切だと思っ
ていて、決して女性の
議員がないから女性の話を聞いていないというわけではなくて、地域の色々な活動の担
手になっていただいています。色々な声を聞く機会を作っていますし、またそういう人た
ちの声には実感があって本当に政策になりやすいです。そういう意味では、女性の力とい
うのはうまく用いるのが本当に重要だと思っています。それから、転居してきた方々が子育
てされるのですけれども、町の人や事情、ルールなど町特有の事がありますよね。そこは
やはり女性同士だと一番分かり合えるので、そういう意味では移住してきた方との交流の
場なども設けながら対策をしています。簡単ですが、以上です。

(岩下) 小嶺さん、「与那国は沖縄にしては……」と言うとほかの人に怒られますし、す
ごくしがらみがあるのですけれども、無い所もあって、私は五島で一度海の問題をやった
時に漁業組合の組合長が関西の人で島ではない人ができるんだと驚いたことがありまし
た。与那国に行かれると分かると思うのですけれども、生活に疲れたのか、都会に疲
れたのか知りませんが、一人で来られる女性も含めて、そういう、都会から逃げると
いうわけでは無いのですけれども、違うものを求めてくる移住者の方が結構多いの
ではないかと思っ
ていますか。

(小嶺) 最初に、与那国町にも女性の議員はいません。議員自体の定員が6名とい
うことで少ないのですが、やはり10何年前に1人いました。先ほど言われましたように、
いろいろな人が与那国に来ます。元々、進学のために出て行った子どもたちが、長男
だ、家を継がないといけないなど、親の事情で戻ってくるのですけれども、そうい
う意味では割合から見たら男の人が多
いです。女性の人
はなかなか帰って来ないけれども、出生数は増大しています。それは何故かとい
うと、いろいろな他の県から与那国に来て町内に住んでそのまま結婚するから
ですけれども、そういう人たちは島のしがらみを遠ざけてきます。そういう意味で政



治的なしがらみはありませんが、島のいろいろな行事にはもちろん関わってきます。例えば皆声掛けあっているいろいろな祭り……例えば豊年祭があるからそこでちゃんとその地区の踊りを手伝って、あるいは踊りを覚えてやっていきますが、そういった伝統的な行事には皆興味を示します。けれども、それ以外のいろいろな人の軋轢といったことは遠ざけようとしているのがみられます。

(岩下) それから、あまり言うとは議論になるのは嫌なのですが、自衛隊が来てから島は明るくなっているのです。というのは、若い隊員たちが来て子どもたちがうろろしているからです。これは少し前の与那国ではあまり見かけなかった光景で、少なくともそういう部分は社会としては非常にインパクトがあって、ただ小嶺さんが言われていたのですが、自衛隊の住んでいる所は1ヶ所で町内マラソンをするとそこだけ強くなるので自衛隊の人は全地域に割り振って戦力を分化するというのをされているそうです。田中さんは元々記者をやられています、海女もしていて、すごく有名になってますが、そういう点も踏まえてご発言をお願いします。

(田中) はい。今回、関係人口という言葉が何回か皆さんのお話でも出たのですが、一言で言うと交流以上定住未満という人たちのこととして、1回だけ来て、それでもう関係が無くなってしまいう人でもなくて、とって定住するのは難しいので定住まではしない、けれども、住んでいなくても地域の外にいて離れていても地域を応援してくれる仲間のことを指しています。例えば、対馬にいても福岡にあるような対馬のお店に定期的に通って応援してくれたり、特産品を買ってくれたり、ふるさと納税をしてくれたりする人たちのことです。そこが結局、今まであまりにも形が見えていなかったのです。そういう人たちが増えると何が良いかと言うと、先生も仰っていたように地域にお金落ちたりします。結果的にそうやって心の距離が近くなっていて、結果的に移住したり定住したりする人が出るということで、そういう関係人口作りということがこれからは一つのキーワードになるのではないかと総務省も今言っている中で、私も今日改めて境界地域にこの関係人口を当てはめるとどうなるのかと考えたところです。境界地域のポテンシャルは、私もこの前ボーダーツーリズムの記事を書いて発信したら、結構な数の人が「何か、行ってみたいし憧れだよ」「面白そうだよ」というような反応で、やはり皆、普通に例えば、北海道の真ん中とか本州の真ん中あるような所よりも、島だったり、端っこだったりする所の存在……例えば根室、稚内、与那国の存在は知っていて「行ってみたい」「いいなあ」みたいな憧れめいたものはあっても、実際に行くかと言うと、自分でツアーを組んでいくにはものすごい大変なわけです。そこで結局思いはあるけれども、「行く」あるいはファンになるにはすごく遠かったのではないかと感じまして、そこを新しいボーダーツーリズムという切り口があって、ここでツアーに参加したら、行って見たら面白いよという提案……ファンになるきっかけをボーダーツーリズムで提案で



きるのではないかと思います。そうすることで定期的に通ってくれたり、なかなか行けないかもしれないけれども東京や福岡で、特産品を買ってくれたりといった外から応援してお金を落としていってくれる仲間になるということを、ボーダーツーリズムを通じて強くできると思いますし、境界地域こそ関係人口ということをうまく使っていく可能性があると感じます。

(岩下) ここにいる人は皆対馬の関係人口であるということですね。ツーリズムの話が出てきましたので、良かったらツーリズムに関する意見を聞きたいと思うのですが、どなたかご質問や問題提起はございませんか。

(フロア4) 視点が違うかもしれませんが。私はもうリタイアしているものですからロングステイの場所をいろいろ探しているところです。ですから、先ほどからの中で、移住というところまではいきませんが、例えば1ヶ月あるいは2ヶ月、私は札幌ですから寒い時に、12月、1月には台湾へ行って、逆に暑い所の人たちは北海道へ行って避暑をするとか、そんな形もありかなと思うのですが、そういうロングステイの受入れは可能なものなのでしょうか。

(岩下) これは、竹富と礼文に振りたいと思います。竹富町の方、お願いします。

(大浜) 竹富町の大浜です。今のロングステイですが、1ヶ月あるいは2ヶ月の間、竹富町には南国という環境がありますので、1月頃に来たいということだと思いますが、実際に竹富町にも多くの方が定住しているという状況はあります。ただ、この定住をする為にはそれなりの準備期間といえますか、その島で実際に住んでみて、そこでやはり住もうとかこういう状況だったら住めないとか言うような判断をした中で、住まわれている方が沢山います。1ヶ月や2ヶ月の間ということになりますと、ホテル住まいあるいは民宿に泊まらざるを得ません。そこに一軒を持ってその時期だけ来るのは、今はかなり難しい状況にあると考えております。ただ、そういう方がおられれば、もちろんお話は聞きますし、私たちが行政として何らかの形で携わっていきたいということは考えております。

(岩下) 礼文島はいかがですか。

(小野) 礼文島は長期滞在という形ですが、トレーラーハウスというものを作りまして、1泊1,000円でお貸ししています。それは何日でもかまいません。ただ、他の希望者が居る場合には、少し空けていただいています。それともう一つは、礼文島の人口2600人くらいですから、コンブ干しや魚の網はずしなどの労働力が大変不足しています。どんどん高齢化して高



年齢がそのような仕事をしていますので、なかなか仕事はかどらないという事で、島外から若い人で、礼文島で働きたい、あるいは、ボランティアをしたいという方がおられれば、その方を「礼文島体験道場」という形で、現在17人くらい入れる施設を今年の春に完成させました。そのお金は、宣伝になりますが、福岡にある辛子明太子のお店で「福さ屋」というお店がありますが、その会長が礼文島の出身で、何か礼文島にふるさと応援をしたいとして、1億5千万円をご寄付いただきまして、それでふるさと体験応援道場を作って自分で食事をしていただいています。今年も20泊くらいであまり多くはありませんでしたが、来年以降は、今は5月～10月一杯と言う事で営業させていただいておりますが、将来的には冬もやろうと思っております。ただ、冬は相当寒いですから、覚悟をして頂ければ、いくらでも私どもは受け入れたいと思っておりますので、どうぞ、礼文島においで下さい。ありがとうございました。

(岩下) 稚内も何かありませんか。

(渡辺) ロングステイということですが、基本的に稚内市はサハリンからのホームステイ事業は毎年短期でやっています。高校生ですが、卒業しても今はネットがあるので、英語やメールでやり取りしながら来てもらえると言う事で、高校生のホームステイ事業としてここ数年やっておりまして、ある程度成果がでていると思っております。それと、稚内市は水産が基幹産業ということで、ロングステイではありませんが、中国から水産加工所のほうに研修生として、1年もしくは2年間、作業員として稚内に定住して、また町の行事に参加したりしているということもあります。

(岩下) ありがとうございました。あと一つくらい。

(フロア5) せっかくいい話を聞けたので、大学の先生が居られる中で上手く話せるかわかりませんが一言、いろいろお話を聞いて勉強になりました。私も観光をやっておりましたし、対馬で生まれて対馬で死んでいくものと思っておりますが、いろいろな意味で、対馬は進んでいるなど……例えば、先ほどの人口が0になることは全くないだろうと思えます。推測でおっしゃられた所もありますが、2060年には6000万人となるという推測で、対馬は高校生が殆ど出て行きますし、高齢者もいて700人ずつ減っています。基幹の水産業も西側は海草がなくなりました。ですから漁も少なくなりました。礼文は海草がたくさんあって、まだまだ豊かな漁場もあると思えますが、対馬は魚が捕れなくなって、水産関係において特に若者が少なくなりました。もう一つ竹富や与那国、礼文は内地にきて、それぞれの島に行くので、外国の観光客は少ないと思えますが、唯一、離島で航路がある対馬ですので、となりの釜山は360万人で、だいたい横浜と同じくらいということになりますが、そこから観光客



が来て旅行関係、バス、ホテル、お土産といったものも出来てきて、釣り民宿もできてきて、土地を買われたりもしています。例えば、与那国が台湾に航路を作ったとして、北海道も島からやってくるとして、たとえば、与那国は台湾から大変な人が来ると思います。すると、中国人が台湾経由でやってくると思います。ですから、すごい観光客がくるのですが、と同様に労働力も資本も今の対馬みたいに入ってくるのです。やはり、これは入れないとどうしようもない……特に労働力は年配の人ばかりですので、労働力も兼ねて、特に免税店では母国語も話せて韓国語も話せて、島民は出て行って観光産業で隣の町からやってきてという感じになりますが、これは必然的と言いますか、これが航路を開いたという事になります。その覚悟が私たちにできていたかという、20年前にここまで来るとは……人口3万人の対馬に韓国人観光客が35万人来るとは思っていなかったと思います。実際、日本で始めて3万人の所に35万人来たわけですが、やはり様々な形があって、今の日本の既成事実ではどうしようもない事も起こってきて、労働力の若い力も韓国から来てもらって、やっていかなければなりません。ということは、ボーダーリズムは韓国の方からもボーダーツーリズムなので、より日本の文化を残して日本の尊さ、祭り、儀式、お盆なども残していつて迎え撃つというのが大事だと思います。

(岩下) ありがとうございました。

(フロア6) 対馬に韓国人がきて危ないという話がありましたが、今もやっている人たちもいますが、日本の観光立国政策でもっと増やすと日本が危ないという話にならないのかなと思っていて、逆に言うと、対馬の今は日本の先取りの様に見えるのですが、行き着く先には移民をどこかで覚悟するのかわからないのか、対馬が韓国と向き合いながら日本を残していくか、または日本と韓国で新しいものを作り上げていくという意味で、新しいテストになると思います。そういう意味で、私が対馬にこだわっている理由は対馬を日本全体が追っかけていて、次に起こる問題は対馬を見て考えることが日本全体を考える事に繋がるのではないかと考えています。これはそんなに遠い将来ではないと思い、ここでコメントいただいて共有出来た事には感謝します。

(岩下) 議論はつきませんが、この場は何かの結論を出す場ではなく、むしろ、ネットワークブレインズトミーングのような形で、言いたい事を言って勝手な事を言って、あーよくしゃべったと行って帰っていくという場ですので、それぞれに何かを持って帰ってもらえれば良いと思います。最後に毎年恒例ですが、今回はどこでやるか、より熱い来年度のセミナーに向けてのメッセージを、JIBSN 設立時から参加されているメンバーでもあります五島市の久保部長よりいただければと思います。

(久保実) 市長すみません。私の立場で言わせて頂きます。平成25(2013)年に五島セミナーが開催された際、当時台風や海上時化があるなか、男女群島と肥前鳥島というツアーを組みまして、海上保安庁にもお願いして計画していましたが、海上保安庁は上陸できないとして駄目だという話がありましたが、行くだけ行ってやりましょうとなって運よく上陸出来たわけですが、研究者の先生方は大変喜ばれて、翌日は台風が接近し、海上は時化で帰りの船や飛行機はすごく影響があったということが4年前だったとっております。来年、また五島セミナーが開催されると岩下先生から話がありまして、来年(2018年)7月に長崎の潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録されると思います。五島セミナーはその後に開催するという形になると思いますので、皆さんにはぜひ、この世界遺産を見ていただきたいということと、先ほどの発表で濟州島との交流……実は黒潮交流ということで濟州島側でも五島との交流の歴史を研究している先生がおられます。五島には濟州島との交流の記録は残っていません。ただ、濟州島から五島に来て、事業を展開していたというお話も聞いておりますので、そういう物証もリサーチしながら濟州島との交流も研究していければと思っております。五島から濟州島にチャーター便で行って向うでシンポジウムを開催し、濟州島から釜山、釜山から福岡あるいは東京、北海道というパターンで考えていただければと思います。それには最低限の人員が必要ですので、皆様のご協力をお願い致します。それでは来年五島でお待ちしております。

(岩下) 最後に二つ申します。我々は五島に皆行くということと、もう一つはぜひ長崎新聞と西日本新聞の方に来年は五島で濟州島に行くを書いて頂ければと思います。長い時間ありがとうございました。それでは、今日の登壇者、それから対馬市長、五島市長、みなさんに対して拍手で終わらせたいと思います。どうも皆さんありがとうございました。





懇親会の風景



そしてボーダーツアーへ

JIBSNレポート No.15

特集「JIBSN対馬セミナー2017：
変貌するボーダー」

編集者：古川浩司

協力：岩下明裕

発行日：2018年2月24日

発行者：野口市太郎

発行所：JIBSN 事務局（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター内）

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

Tel. 011-706-2382 Fax. 011-706-4952

<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>